

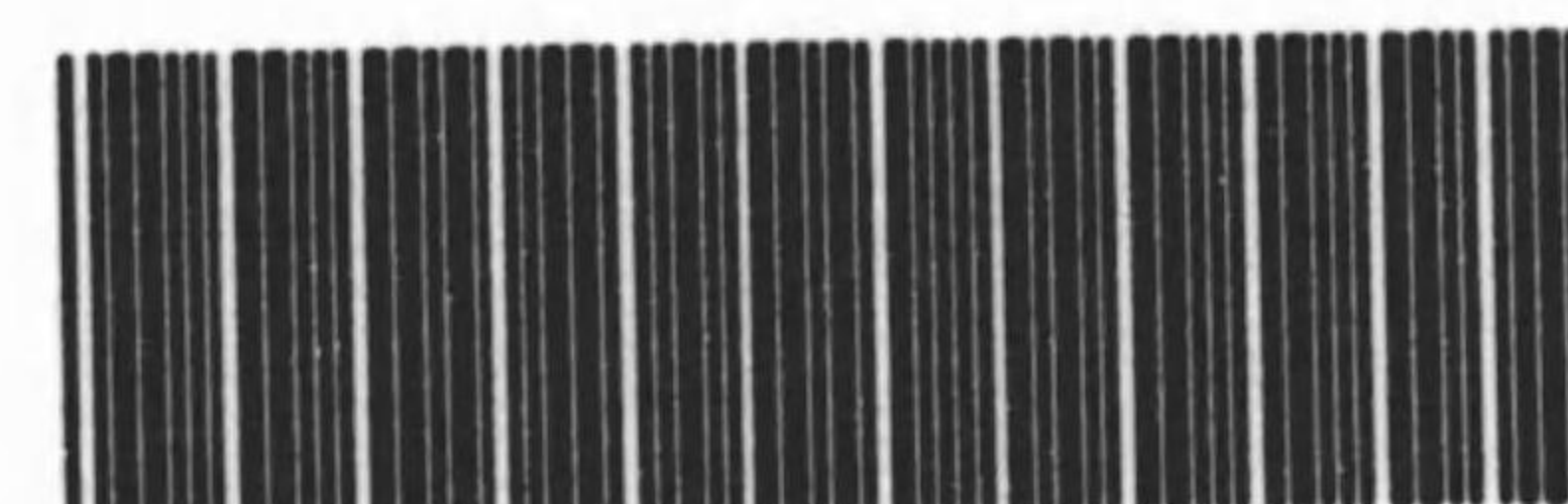
滿洲國境問題

增田忠雄

319.225
M228m

33000

資料証



0011054000

3

0011054-000

319.225-M228m

滿洲國境問題

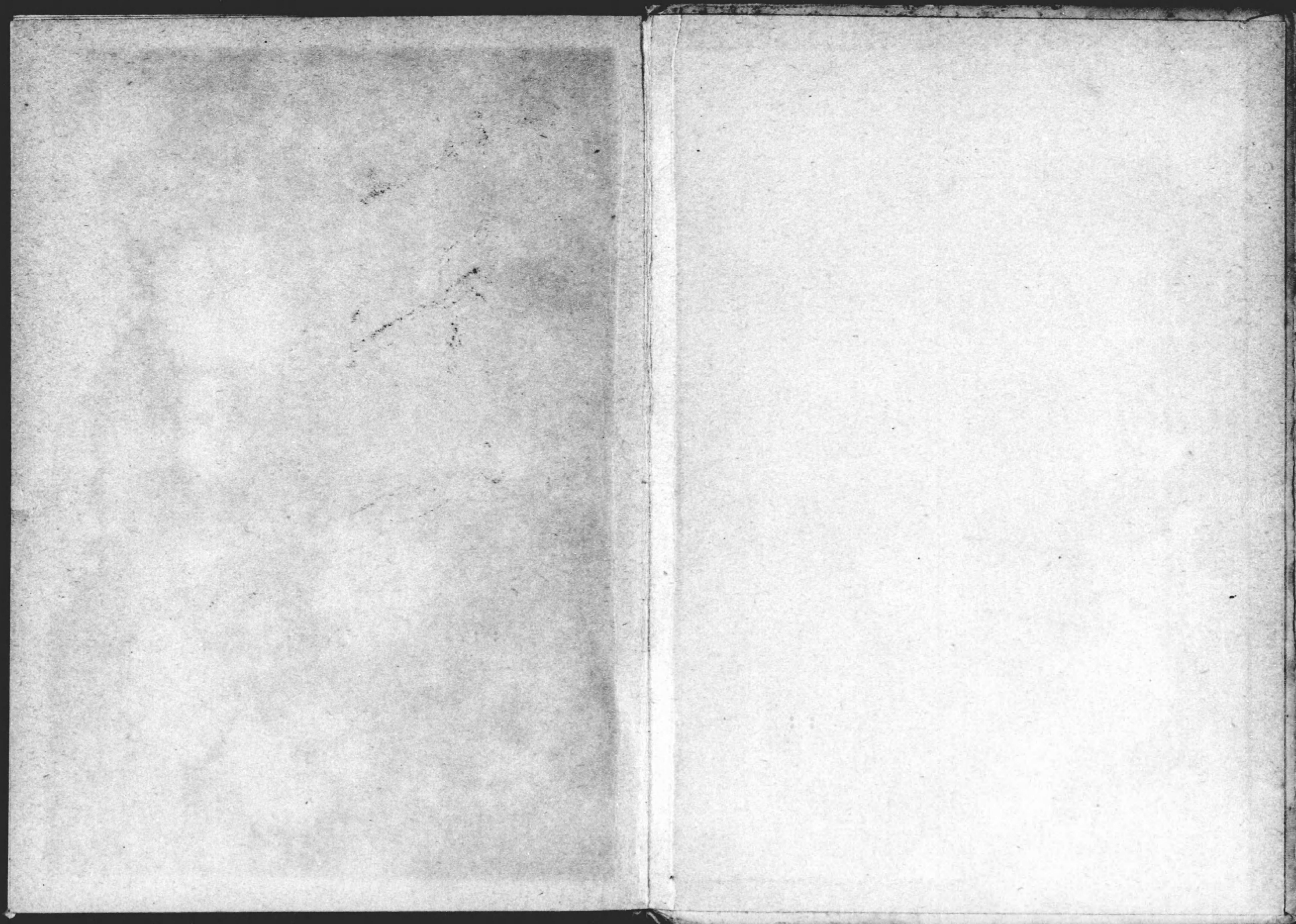
增田忠雄・著

中央公論社

1941

ABJ

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年5月15日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです



滿洲國境問題

增田忠雄

東亞新書

319.225
M228m



33000

序

近代國家の國境線上に立つた經驗のあるものは、誰しも、これがあの全國民の關心を集めてゐる國境かと深い感慨を受けなかつたものはないであらう。——地圖上には一線を限界として相互に色彩を異にし、全然異質の土地として表現されてゐるあの國境が、果して此處であらうか、この土は隣りの國の土と何處に違ひがあるのであらうか、この草、この木、何處に差異があるのであらうか、それだのに眼前には一步も越えることの出来ない見えざる鐵壁がその行く手をさへぎつてゐる。——この疑問こそ、總ての國境問題とその研究の母胎である。

一定範圍の土地を限つて人間社會の生活が行はれることは、その生存基底が土地である以上、不可避の事實である。従つて土地境界の存在は必然的なものであつて、現今、宅地の境界、耕地の境界、國內行政區劃の境界等の各種の境界が、その社會生活を空間的に規定してゐるが、それにも拘らず、これ等の境界上に立つても、國境に立つた時の如き感激はない。これは同一國內の各種の境界が、何等この境界を越えての移動交通に關し、表面上制限を現して居らず、國民の自由を阻碍するものがなく、特

にこの境界に特別の關係ある者以外は、殆ど無關心で、その存在さへも意識しないで自由に行動出来ることに起因してゐると云ふことが出来る。これに反して國境は國民の自由に關する具象的な制限であると云ふ事實に、不自然さが感ぜられて來るのである。而もこの具象的な制限物は、本來、線的な境界のあり得べからざる自然を基礎としてゐる。勿論、自然にも境界がある。山地と平地との境界とか、海陸の境界とか、動植物の分布境界などがあるが、これ等の境界は嚴密に見れば境界帯であつて、漸移的に異質の地に變質して行く連續地域をなし、國境の如き、突變を示す線ではない。しかるに、かゝる性格を有する自然を基礎に成立する國境の場合には、この線を一步越えろと國民の自由は失はれ、その權利義務に變動を生ずる突變を示す生活限界となつて、茲に自然と人間社會の相違がまざ／＼と見せつけられる。特にかゝる國境附近の自然を基礎に生活する農牧民の如きは、國境を越えた向う側に可耕原野、又は放牧採草の可能原野を見るとき、この感が深く、國境に對して關心を持つことが特に深い。又、隣接國が自己にとつて理想國家又は非理想國家との感じを持つものに對しては、この國境線が、自己の解放か又は幽囚かの限界線とも見える。租稅の相違、物價の高下、物資の貧富は、又この國境の存在が、その附近の居住者に對して保護物とも感ぜられ、又は鐵鎖とも感ぜられる。これ等が現地住民の國境に對する關心の深い原因と考へられる。

因と考へられる。

かゝる現地住民の關心に對して、一般國民の關心の對象となることがある。それは教養の問題であるが、國家の領域が圖的に表現された場合、國家の主權の限界が明らかとされる。國家を自己の國家と見る意識は、國土を自己の國土とする意識となる。即ち、自己の自由を保護し、自己の活動が許される領域が、圖上に表現され教養として與へられた場合、その限界に對して關心を持つのは當然である。しかも國境は自然的所與に非ずして、歴史的な國家生成發展の結果であることに想到する時、その合理性に對して批判的な立場に立つに至る。この立場に立つて國境形態を見直すとき、その無心な線上に、接壤國家間の生命の躍動とその火花を感じる。かゝる激しき關心は、國內の各種境界、又は友好的な隣接國家間の經濟的な國境には感ぜられないところのものであつて、對等の文化段階にある對立的な隣接國家との境界にして、初めて深く感ぜられるところのものである。

國境に對する關心には、以上の如く、國境現地の國民の持つ關心と、教養として一般國民の持つ關心との二つがあるが、更にこれ等の關心の基礎に立つて、軍事、經濟、政治の面から國民の福祉と國家の隆盛を企圖する第三の關心群がある。これは現地及び中央部の政策當局であつて、より具體的な立場から國境に關心を有する一群である。

かゝる各方面の關心に對して、満足なる回答をなすが如きは、本書の如き小冊子の能くするところではない。その上、第一、第三の方面の關心に對しては、こゝに充分述べらる餘地もなければ、又その自由も持たない。そこでこの小冊子の讀者對象を第二の關心群に置くこととした。従つて本書に於ては、全般的な概説を主とし、出来るだけ繁雜且つ考證的な記述を避け、結論的な部分を以つて全篇を構成することにした。この點讀者の中には不満足に思ふ方もあらうが、詳細な論據を希望される方は、本書の後記に記した拙文及び條約集等を参照せられんことを願ひする。要するに本書の目的とするところは、國境問題の所在を明かにし、以つて僅かでも全國民の國境に對する關心に答へんとしたもので、幸ひこの目的の一部でも達することが出来れば、筆者の喜びこれに過ぎるものはない。かゝる意味で、本書では滿洲の國境問題の中、最も關心の對象となつてゐる滿蘇國境に就て概説することとした。

願れば常に新しき疑問が湧き起り、絶ゆる時はないが、一應、今述の拙論をまとめて茲に發表する次第で、大方の叱正を得て、他日の訂正を期する次第である。

昭和十六年三月

大連にて 著者

序

第一章 緒論

第一節 土地境界の發展過程

無機自然境界—有機自然境界—人類分布境界—人間社會境界—氏族社會境界—封建領土境界—中央集權國家の行政境界—近代國家境界—國家隣保プロック境界

第二節 日本生活圏の境界發展

境界意識の發達—北方に於ける日露境界—遼東半島境界—樺太國境—關東州境界—滿鮮國境—滿支滿蒙國境—東亞共榮圈境界

第二章 西北部國境

第一節 ロシア支配圏の擴大と對支接近

第二節 黑龍江上流域に於ける露清交渉とネルチンスク條約

第三節 セレンガ河流域に於ける露清交渉とキャフタ條約

第四節 東清鐵道沿線の露清交渉とチチハル協定

第三章 北部國境

第一節 ネルチンスク條約による國境中間地帯の成立

第二節	國境中間地帯へのロシア支配圏の擴大……………	七
第三節	黒龍江國境の發生と政治經濟的中間地帯の殘存……………	八一
第四節	河川國境に於ける近代的國境關係への發展……………	八
第四章	東部國境……………	九三
第一節	ネルチンスク條約の未制定中間地帯へのロシア支配圏の擴大……………	九三
第二節	愛琿條約の共管中間地帯へのロシア支配圏の擴大……………	九八
第三節	北京條約による東部國境の發生……………	一〇一
第四節	興凱湖界約による現地制定……………	一〇四
第五節	環春界約による再制定……………	一一〇
第六節	近代的國境關係と紛争の發生……………	一一三
第五章	結 論……………	一二六
	各露清國境條約の特質—國境發展の原則—國境立地の要點—國家隣保アロツク配分上の考慮—國境安定策……………	
後 記……………		一二三

第一章 緒 論

第一節 土地境界の發展過程

土地の境界といふものは、自然の不均一性といふ公理より必然的に發生するものであつて、土地が不均一であれば、自らこの均しからざる地域の中に境界が存在しなければならぬことは、自明の理である。例へば山岳地域と平原地域の境界の如き、陸地と水域との境界の如き、無機自然界の土地境界がこれである。しかし、その境界は決して、幾何學的な線を以つて表現されるが如き明確なる境界に非ずして、その間、連続的に徐々に異質の地域に漸變する帶狀の境界地帯をなしてゐるのである。このことは、一見線的に分割されると考へられる海岸線の如きを例にとつて見ても、嚴密には滿干潮汐の移動の行はれる海濱地帯の存在により明かである。

然らば有機自然界は如何であらうか。これは動植物の分布より考へれば明かな如く、生物は自然の環境に支配され、その適應性は氣候地味等の無機自然界の制限を受け、生物の生活圏を限定し、例へ

ば南北生育限界の如きものが存在する。しかし、これ又、線的な境界に非ずして、帯状の境界地帯を形成してゐるのである。この點までは無機自然界の境界と差はない。しかし、生命を有する有機自然界には、無機自然界の法則の他に、生物社會の法則が支配する。即ちその最も著しいものは、優勝劣敗、適者生存の生物各種間の生存闘争である。これ等の結果がその生活圏の範圍を限定し、境界地帯を設定する。そして、本能的ではあるが、生物には生活圏に對する境界意識があるものと思はれる。

人類も、生物の一部であるから、原始人類の分布境界は、生物社會の境界と同一に見ることが出来る。人類の原始的分布は、動物分布の如く、他種の生物と闘争しながら確立せる生存地域に於ける自然環境に従つて各人種を發生し、各自その生活地域を一つの限界として、集團をなしてゐたと考へられる。この場合、地域別に發生せる各人種は、各自の生活圏を、その本能的安全感の考慮から、遠大な距離、又は山岳河川等の自然障壁物によつて隔絶してゐたものと考へられ、従つて彼等の集團は大體均一な種族より成り、その生活地域は彼等にとつては、一つの世界であり、この地域の外側の異種族との交渉は存在せず、實際上、彼等にとつては、異種族なるものは、存在しなかつたものと考へられる。この時は狩獵、漁撈等によつて生活が樹てられ、移動性の文化を有してゐたものであるが、しかしその移動も、現在の狩獵民族の例より考へれば、無制限な移動が行はれてゐたのではなく、一年間を通じて一定の移動範圍が、自主的に限定されてゐたと見るべきである。この移動範圍が彼等の生活圏であり、その外側は彼等の生活に必要なない森林、山野をなしてゐたものであつて、その隣接

の異種族との間に、意識されざる境界地帯を形成してゐたものと考へられる。従つて原始人類の社會に於ては、その生活圏と他種族との境界といふものは何等、特に問題となるものはなかつたのである。かゝる状態の原始人類の持つ境界といふものは、その本質上、生物社會の分布境界と何等差異を認めることは出来ないから、後に述べる人間社會の土地境界に屬するものと見るよりも、生物社會の分布境界と見る方が適當の解釋と考へられる。

故に原始的な人類社會の土地境界は、生存闘争があるにしても、本能的に意識するに止り、人間社會の土地境界の如く、自己の土地による生活自由の占有確保を意識する境界とは性質を異にすると云はなければならぬ。

しかるに、或る地域の種族社會に天災、人口壓等に起因する生活地域の放棄が、地球上の一部に起ると、その波紋は、各地域の種族集團に影響を及ぼし、始めてその生活圏の移動は、異種族間の接觸を惹起するに至る。かくて移動する種族集團は、自然條件の良好な地域を求めて、先住の異種族の生活圏内に侵入し來り、種族間の争闘を發生し、その自然淘汰によりて、優勢なる種族が勝利を占め、かくして自然條件の優秀な地域の種族文化が向上し、従つてその生活圏の接觸は、嚴密な境界が要求されることともなる。又かゝる衝突にまで發展しなくても、侵入種族が既存種族の生活圏に接近してその生活圏を設定した場合、その間に境界の意識が始めて明瞭となるのである。

かく異種族の生活圏が接近した時に始めて、種族保護の本能上、自己の生活圏の外廓として、通過

侵入困難な山林原野を利用し、自主的に境界地帯の形態を決定するに至る。従つて、この段階に於ては、異種族との境界は、その外界との交渉紛争が起つて始めてその意識に上るに過ぎず、この紛争が終熄して平靜に歸し、各生活圏が孤立的な生活に立ち歸つた時には、異種族との境界は、再びその意識より消え去つて終ふのである。

右の如く、人間社會の境界が発生するには、複数の人間社會の存在が前提となる。唯一の原始人類の集團が、自己の生活圏を一つの世界として生活してゐる間は、その生活圏の限界は、實際上存在してゐても、土地境界の意識を持つに至らず、その必要もない。然るに他の人間社會の集團と接觸が開始された時に、始めて自己の土地に基礎を置く生活の自由を確保する生活圏の境界が意識に上つて來るのである。

従つて土地境界は、土地を基礎に生存する人間個體が、他の人間個體より生活の自由を保護して、土地の占有使用を確保する具象的な自然物であると云ふことが出来る。

かくてこの段階に於ては寧ろ同一種族世界内を更に分割し組織してゐると考へられる氏族社會間の狩獵移動圏の境界の方が彼等氏族構成員の關心の對象と考へられる。これも原始的には廣大な土地が狩獵移動の自由に委されて、同一種族の總有状態の時は、その間に境界の必要はなく、何等かゝる移動限界の問題も起らなかつたであらうが、この地域が人口増加によつて次第にせばめられ、氏族社會間に狩獵地域の争奪が起る如き段階に達した時には、前に述べた異種族の移動侵入の例の如く、始め

て氏族社會の生活圏が問題となり、その生活の自由を確保し、以つてその土地の占有使用を目的に、隣接氏族社會との間に、各自の生活圏の境界設定が問題となつたものと思はれる。しかし何れにしろ、この場合の如く狩獵漁撈などの自然物採集を以つて生活の基礎としてゐる段階に於ては、何等嚴密に線的な境界を必要とせず、帶狀境界を以つて境すれば、満足さるべき状態であつたのである。

しかるにこの種族生活圏の肥沃なる中心部分より、順次に採集經濟の段階を脱して農牧等の自然育成經濟の段階に入り、土地との結びつきが強固となり、その占有使用の觀念が強力化するに従つて、境界といふものが注目されるに至つた。

しかしその與へられた自然條件によつて牧畜に進展した種族は土地關係に於ては根本的には狩獵の段階と大差はなく、一年間に一定地域の遊牧移動の限界を持つ生活圏が、その隣接の生活圏との間に境界地帯の問題を持つたに過ぎない。

これに反して農業に入つた種族は、定住の發生となり、定住は一定の土地の占有を意味し、その原始の状態に於ては、氏族によつて土地總有の状態にあつたとしても、他氏族との間には、各自の耕地を中心として未開の原野（牧畜用）、森林（狩獵用）等の中間地帯を以つて互ひに境し、各氏族の生活圏の範圍といふものは、前の狩獵の段階とは比較にならない程の關心を集めたに相違ない。各氏族はその共同の敵に對して、經濟的にも、軍事的にも防衛に適當な地形を境界地帯として選んだことと考へられる。このことは、モルガンの「古代社會」に記載されてゐる、アメリカ・インディアンの生活

圍設定に好例が見られる。そして、氏族の住居耕地の周圍には柵を以つて自主的に限界を設け、野獸及び外敵の攻撃に對して防禦手段を講じたものと考へられる。これは、日本の原始聚落を垣内と稱したことによつても、その機能が察せられる。

かゝる氏族の、土地に基礎を置く共同生活より、人口増加によつて生活資源の増産が要求せらるゝに従つて、氏族の構成員たる家族が經濟活動の中心となつて来る。かゝる段階の典型的なものは、ゲルマンの原始社會に見られる。石田文次郎博士の「土地總有權史論」によれば、家族の定住の根據である宅地には、この時既に私有が認められてゐたといふ。従つて土地私有權の空間的限界である土地境界がなければならぬ。事實に於て宅地は垣を繞らして村地と區別してあつたといふ。これ等の屋敷が集つて(百人制により約百戸)、廣場を中心とした聚落が出来、この周圍も亦垣を以つて圍まれ、入口には門が設けられてゐた。これは日本の古代聚落垣内と同様であるが、この垣は、聚落全體の土地所有權の空間的限界と云ふよりも、外敵防衛の意味を有する境界と見ることが出来る。この更に周縁が村地(Mark)であつて、村の總有地となつて居り、聚落に近き處が耕地としてゲワン(Gewann)に分割されてゐた。これは農業技術上の分割であつて、年々割替制によつて各戸に割當てられ、移動が行はれたものであつて、従つて、その土地境界は土地私有權の發達後の耕地境界の如く嚴密なものではないが、小路の兩側を短冊型に區切つた劃一的なものであつた。そして斯る農業技術を基礎に所謂三圃式經營が發達したが、その後の人口増加と耕地の不足は、耕地の割替を不可能とし、次第に、

耕作擔當者の私有と化して行つたのである。

時代的に見れば前後するが、ローマ法の行はれたローマ社會は、土地の私有權が明確に確立された社會であつて、従つて耕地は正確に分割され、その區分法は、耕地の中心で交錯する東西南北の小道及び畝によつて方形に區劃され、耕地の境界は嚴密に線的なものが要求され、ローマ法中には「接續地の境界整理に關する法令」が既に存在してゐた程である。従つてかゝる土地所有觀念は、國家の疆域に對しても嚴密なものが要求され、リメス(Times)の如き國境が發達したのである。

ゲルマンの社會も宅地の私有權が、これを繞る垣を以つて表現されてから、次第に耕地も私有地に分割されるに及んで、この耕地の周圍を垣を以つて、村落の總有地なる村地との間を限り、土地所有權の發展につれて、その境界が線的に嚴密となつて來た。

しかし、かく嚴密に分割された耕地の外縁には、未分割の村落總有地が残されてゐた。これは當時村落の人口、及び農耕技術上、開墾不可能な土地か、又は生活資源採集、村落防衛上殘された森林、原野、山岳、濕地等であつて、村落構成員の牧場、採草、採柴場として、總員の利用に委されてゐたのである。従つて同一構成を有する村落地域が接近して存在してゐる場合、かゝる村落の外廓をなす森林、原野は兩村落地域の境界地帯をなすが、兩村落の總有權の空間的限界が明確に決定されてゐない時には、この森林原野の境界地帯は、兩村落の共同利用の地帯となるのである。これが後世、行政組織が完備するにつれ、正確なる行政區劃が要求されて來ると、かゝる所屬不明の境界地帯を線的境

界により分割しなければならなくなる。かゝる場合、多くの紛争を惹起するのであるが、これが解決されて線的境界が設定されても、日本の村々入會の如き舊慣が残されることとなるのである。

土地の私有が、大地主を發生し、これが直接土地を耕作する農民と遊離して上級所有權を有する貴族となるに従つて、自己の支配力を強化するため武士を養ひ、領土の擴張を企圖するに至る。この段階に於ては、先づ村落耕地の周縁にある森林原野等の總有地をその權力によつて、領地となし、村落農民の從來の入會權は認めるとしても、種々の制限を設け、その上級所有權を握るに至る。かくて封建領土は成立し、次々にその領土を擴張し、遂には隣接の同じ強度を有する封建領土と接觸し、その擴大の限界に達すると、兩封建領土の主權の限界を明確ならしめ、又領土防衛上より、境界を設定するに至る。この場合、日本の邊疆封建領土に見られる如く、その國界としては山脈又は河川等の自然障礙物を多く利用してゐるが、これは線的國境に非ずして、未開拓な帶狀の地域をなし、この邊疆中間地帯の存在によつて、兩封建領土の政治經濟活動を隔離し、又隣國の攻撃に對して自己防衛の目的を達したのである。

かく各封建領土は自給自足の封鎖經濟の段階にありながら、特殊な物資に對しては對外交渉を必要とし、従つて隣國との間に交通が行はれ、この目的のために築造される交通路は、必然的に、この境界地帯を横斷しなければならぬ。従つて境界地帯の中、かゝる交通路の横斷する地域を、所屬未決定の中間地帯として残して置く時は、兩國の領土權の行使上、多くの紛争を惹起しなければならない。

その上、かゝる交通路の通過する地點は、交通の技術上、比較的通過容易な峠、低地等が選ばれる結果、この沿線の開拓は進んでゐる場合が多く、この開拓が兩側より進んで來て、農民の私有耕地の接觸となり、そこに境界沿邊の土地所有者間の個人的な紛争が、封建領主間の争ひに迄發展するのである。従つて、全般的な境界が帶狀の地域を以つて構成されて満足出來る段階にある時でも、對外交通路に沿つた地域のみは線的な境界が要求され、日本の封建領土の境界によく見られるところの關所、境界標、境神社などの標識設置を必要とするに至る。

この封建領土が崩潰して、中央集權が行はれ、各封建領土が地方行政區域と化した時には、封建領主に代つて地方行政官が、その行政權行使の必要上、嚴密な行政境界を設定し、寸土も所屬未決定な地帯を残さず分割して終ふのである。しかし、かゝる行政境界は、も早や軍事的意味はなく、行政、經濟上の境界に過ぎず、殆ど一般の注意を牽くことなく、内國關稅等の制限ある場合にその存在が注意せられるに過ぎない。

血縁によつて結ばれた氏族社會が崩潰して、これ等を結合する封建社會が成立し、更に他の強力な異種族との争闘の必要が、これ等を團結せしめて種族國家の發生を促し、從來の封建領土は前述の如く單なる國內の行政區劃と化して、更に強化せる中央政府の支配力は、その領域の末端までも滲透するが如き近代國家の段階に至る。

以上の如く境界といふものは常に他者が存在して始めて成立するものであつて、人間社會の土地の

境界は、土地に基礎を置く人間社會の或る單位集團が、他の單位集團の基礎である土地より區別し、自己の集團の自由を確保する目的を以つて設定されるものである。この人間社會の單位集團は或は家族であり、氏族であり、封建國家であり、又は種族國家であり、國民國家であることもあらう。この場合、その土地の範圍は、或は宅地となり、自然聚落地域となり、封建領土となり、又單なる行政區域となり、國家領域となる。そしてその各が他者存在の意識の強弱に従つて、その境界を帶狀境界より線狀の嚴密なる境界の設定に至る變異を見せる。

従つて、境界は他者存在の意識が弱化し、又は消滅すればその存在の必要はなくなるか、又はその境界としての意識は少くなる。現在、宅地の所有者も、その隣接の宅地所有者も同じく、同じ文化、社會に結合せる市民であり、國民である。このことは、相互間に他者意識を弱化せしめ、たゞ土地所有權の限界としての境界があるのみであつて、その間に絕對不可侵を主張するが如き敵對境界の必要はない。このことは行政區劃の境界にも見られるところであつて、結局現在、境界が最も注目を牽くところのものは、他者意識の最も強烈な近代國家間の境界である。各國民も同じく人類であるといふ共通意識はあるとしても、人類に對立するが如き土地に基礎を置く生物社會でも發生しない限り、この人類意識は各國民を團結する共通意識とはなり得ない。従つて現段階に於ては國境が最も、人間社會の境界として典型的なものであるが、近き將來に於て、國家よりもより大なる地域を基礎に、その地理的關聯を以つて、その間に含まれる各國家間の共通意識を高めることによつて、その間に含まれ

る國境を弱化せしめ、その外側の國家集合地域との間に他者意識を強化し、世界が數箇の隣保ブロックに別れて各ブロック別の境界といふものが、ブロック内の各國家の共通の國境として重要意義を獲得するに至るであらうことが豫見せられる。滿蘇國境は既にこの段階にあるものであつて、太平洋も、大西洋も斯る境界と化しつゝある。

生物學に於て個體發生が系統發生をくりかへす如く、局地的な滿蘇國境の發生過程の研究によつて、境界發生の各段階に於ける典型を、系統的に理解することが出來、又逆に境界發生の系統的研究資料によつて、滿蘇國境の現段階へまでの發展過程が理解出来るのである。即ち、他者意識の強烈な血族集團社會の境界より、この他者意識が弱化せしめられて、より廣大な共通意識の下に土地を基礎に結合し、封建社會の境界に發展し、又この封建社會間の他者意識が弱化せしめられて、更にこれ等を結合する共通種族意識の下に、種族國家の境界に發展し、更に隣接の弱小種族を合併することによつて種族意識が弱化せられ、より大なる國民意識の下に結合して、近代の國民國家の境界にまで發展したのである。將來は、この國民意識を弱化して、近隣國家の共存共榮を目的とする共通意識の下に結合して、ブロックの境界にまで發展する情勢を示してゐる。滿洲國の成立も、支那事變も、今次の歐州戰爭もこの情勢よりその真相が理解されるのである。従つて、滿蘇國境も、東亞に於ける蘇聯國と東亞共榮圈との接觸面として理解すべきであり、その間の發展過程も、この段階に達する他者意識の擴大によつて、進展する人間社會の生活圏の限界として理解すべきであると信ずる。

この意味で今少しく、この序説の章を借りて、東亞共榮圏の中核である日本の他者意識の擴大と、その境界の發展について述べてみたいと思ふ。

第二節 日本生活圏の境界發展

四面海を繞らせる島嶼を以つてその生活圏とせる古代日本人にとりては、全然種族を異にせる他者の存在は意識されなかつたのである。日本の生活圏は近畿を中心として西方瀬戸内海沿岸、北九州に至る地帯より次第に擴大し、中世には奥州に及び、近世には北海道の蝦夷地に迄擴大し、この島國に充滿したのであつた。この間、鮮漢等の大陸民族との交渉はあつたが、海を以つて境してゐるために境界意識も著しくなく、只蒙古の攻撃に逢つて海による防壘の重要性が意識されたに過ぎなかつた。國內に於ては東方蝦夷の異種族の存在により境界が意識されたが、文化段階の相違がこれを對立的な境界にまで發展せしめず、次第にこれ等の地域も包含して、兩者間の他者意識を抹消し、その間の境界を消滅せしめた。かくて日本は一つの種族世界として意識せられたので、國內各地域の分立は、却つて相互間に他者意識を強め、時に中央權力の弱体化が起ると、封建領土と化して、戰略的な境界又は封鎖經濟に必要な境界が確立されたのであつた。しかし戰國時代を過ぎて、強力な中央權力の下に統一せられた徳川時代に於ては、各封建領域の變更は限定せられ、本格的な封建領土間の境界紛争の發

生の餘地なく、その間の文化の交流は、他者意識を弱体化せしめ、境界の意義を失はしめ、僅かに經濟治安の目的の下に境界が存続したに過ぎなかつた。

かゝる一つの種族世界として存在した日本に、十六世紀中葉より西歐よりの文化的、經濟的交渉が發生するに至つて、新しい他種族の存在が意識に上つて來たが、その本土との間が、遙かなる海洋によつて隔絶されてゐたため、國境意識を昂揚せしむる程、強力な他者意識にまで發展しなかつた。

これに反して十七世紀末、清朝によつて南下を阻まれたロシアは、十八世紀中葉以後、障碍弱き太平洋岸に沿つて南下を企り、ために日本の北邊に於て、その本土より連續的に擴大せる勢力圏を以つて日本生活圏を刺戟し、強力なる他者の存在を日本人に意識せしめ、國境問題をその關心の對象とせしむるに至つた。従つて當時、北海道、千島、樺太方面は日露兩支配圏の中間地帯をなし、十八世紀末より十九世紀初頭に至る間、日露兩國よりその政治的支配を目指して探検争奪が行はれ、急速に國民の國境意識が昂揚せらるゝに至つた。この結果、大體日本は千島列島中の得撫島以南を確保し、又樺太南半にその支配を及ぼし、十九世紀の中頃には一般にこの地方が日露兩國の境界として承認されてゐた。しかし明治八年（一八七五年）、近代國家として相對した日露兩國はその主權の限界を明確ならしめる必要が生じ、又日本の沿海確保の意欲は、この樺太南半を放棄して、千島列島により南下せんとするロシア勢力を阻止せんとし、千島樺太交換條約を締結した。これは地政學上より見ると興味ある交渉であつて、後世これを面積的計算より日本の失敗と論ずるものもあるが、寧ろ當時に於ては

位置と延長が問題であつて、日露兩國本土との關係位置より論ずれば、この交換は兩當事國にとつて最も合理的な境界確定であつたと云ふべきであらう。かゝる方法による不合理國境の調整は、將來にもよき参考になるものであるが、陸地の分割交換の場合は境界の問題が複雑であるから、島嶼の交換の如く簡單には處理出來ないであらう。樺太と千島との交換は、兩者ともに島嶼であるからその交換地域の限界も明確で、交換後も海峡によつて國境が設定せられたから、この際、直接陸地を接する國境の如き嚴密な國境は當時の日本人の意識に上つて來なかつた。

しかし現實的に陸地國境が問題となるに至つたのは、近代日本の最初の他種族との鬭争なる日清戦争の結果、清國領土の割讓が要求せられたときに始まる。この日清戦争は朝鮮半島より南滿、黄海、東支那海に至る、當時の日清兩國間に介在する中間地帯の争奪に關する戰鬪であつて、この結果、日本の勢力圏は、この中間地域全般に及び、その一端は大陸に達し、茲に始めて日本は、異種族との間に陸地を持つて接する國境を持つこととなつた。即ち、下關條約第一條によつて遼東半島の領有が決定せられ、その半島の限界を「鴨綠江口より安平河口に至り、該河口より、鳳凰城、海城、營口に至り、遼河中央線を以つて海に達する線」を以つてし、これを日清兩國の國境と定めた。この線の決定は將來の朝鮮領有を目標として朝鮮より滿洲に達する廊下設定のため、鴨綠江口の割讓に主題を置いたもので、滿洲に楔形の日本領土を打ち込んだ形を呈したが、その國境設定に當り何等自然障礙物を使用せずして、たゞ著名な都邑を聯結する折線國境を以つてせるが如きは、その第三條に境界共同劃

定の技術的方法を規定してあつたとは云へ、その正確なる實施は困難であつて、かゝる國境線は國境劃定の技術上より見れば最も拙劣なるものと云へよう。しかも當時に於ては、國民はたゞ遼東半島の割讓を以つて満足し、その境界の如きは外交當局者一部の關心を集めたに過ぎなかつたのである。しかも、この遼東半島も三國干涉の結果、遂に國境劃定に至らずして、清國に返還せられ、遂に國境の發生を見るに至らなかつた。

日露戦争は當時、日露兩國の争奪の對象となつてゐた南滿より朝鮮半島、日本海、オホーツク海に至る蜿蜒三千杆の延長を有する兩支配圏の中間地帯の政治的支配に關する紛争とも見られるものであつて、明治三十八年（一九〇五年）六月、兩國に和意が發生し、九月五日ポーツマス條約によつてこの中間地帯を分割する境界線が決定せらるゝこととなつた。かくて長春以南の南滿に於ける日本の優越性、遼東半島租借權の讓渡、韓國に對する保護權、日本海、オホーツク海に於ける日本の漁業權の承認、樺太南半島の割讓の如き條項を以つてこの中間地帯は分割され、兩支配圏の境界が決定された。

この結果、日本としては初めて同等以上に強力な、従つて他者として認めるに充分對立的な種族の支配圏との間に境を接することとなり、樺太に於ては、第九條に従つて北緯五十度の緯線を以つて境界とすることが決定された。この地域は樺太南北兩地域の自然的境界地帯を形成するものであつて、これを利用したこの國境は、人爲的な直線國境とはいへ、その距離が短いため比較的合理的な境界と云ふことが出来る。即ち、この兩端は山岳海岸にせまり、森林を以つておほはれ、兩文化地帯を隔絶

し、中央部は幌内河のツンドラ低地帯をなしてゐるが未開地帯であるので支配圏の接觸なく、そこに何等の不合理も與へてゐない。その上、この國境をはさんで樺太全島は非武装地帯となつて居り、一種の緩衝地帯としたことは、最も適宜な處置であつたと云ふべきである。ロシア側にとつても、結水期には大陸と連絡する間宮海峡の最狹部を確保し、沿海地方の安全性を全うしたのであつた。その國境設定の技術的方法は、山間の森林を伐り開き幅十米の林空境界地帯を設け、天測點、中間境界點、木標點を直線を以つて結んだものである。

遼東半島の租借地の讓渡は、結局、日本をして清國との間に、一種の國境を生ぜしめることとなつた。ロシアは一八九八年三月十五日「旅順大連灣租借に關する露清條約」によつて遼東半島先端部を租借したが、四月二十五日の追加協定により「遼東西海岸のアダムス灣北側よりアダムスビークを経て遼東東岸にある貔子窩灣の北側に至る」間の境界が決定せられ金州半島部を獲得し、更にその北方に、「蓋州河口より岫巖の北方を経て、大洋河に至り該河の左岸に沿ひてその河口に至る」間を中立地帯としたのであつた。この權利を日露戰爭の結果、日本はロシアより讓渡を受け、これを明治三十八年十二月二十三日、北京に於て締結された條約によつて清國政府の承認を受け、茲にこの境界を以つて日本は清國と接することとなつた。この場合、封鎖的な樺太國境に較べてこの關東州の境界は滿洲と密接に交通上の連絡があるため、より一層地方的關心が集中せられ、又兩文化地帯が嚴密な意味に於て差別がないにも拘らず、政治的經濟的に他者意識を強化せしむる境界を設定したために、種々

紛争を發生し、特に租稅問題に基く意識的境界移動、又は密輸問題等の經濟的の國境問題を發生せしめた。しかしこれを政治軍事的に見れば、中立地帯によつてこの地方は保護され、更に長春に至る南滿地方の日本勢力外廓地帯によつて包まれ、これが明治四十年（一九〇七年）の日露協定によつて確認せられてより、關東州の位置は一と先づ安定を見たのであつた。

しかし本格的に日本が陸地國境問題に直面するに至つたのは、朝鮮併合により清國と境を接するやうになつてからであつて、これは滿洲國成立により蘇聯との國境問題を發生するに至つたのと相似する現象である。そこでこの滿鮮國境に就て少しく歴史的に詳しく述べてみたい。

十七世紀の初頭漸く勃興の氣運をみせて來た女眞族は、韓國との間に大體現在の鴨綠江、圖們江を以つて境し、義州前面の中洲、會寧、慶源等を定期交易市場として兩國の交渉が行はれてゐた。しかるに女眞族獨立による後金國の成立等の事件で滿洲側が混亂に陥つたため、この交渉が杜絶して終つたが、太宗の天聰元年（一六二八年）、先づ力を以つて韓國に臨み、兩國相互に封境を嚴守して相犯さずとの江都會盟を約して、義州附近の交易市場等を再開し、女眞族の天産物の販路を開拓したのであつた。しかるに韓國側は江都會盟の實行に對し誠意なく、遂に清國と國號を改めた女眞族は、その新興の勢ひを以つて崇徳二年（一六三七年）、朝鮮征伐を實行し、丁卯和約を締結して、鴨綠江右岸一帯を國境地帯とし、その滿洲側に鮮民族不可侵の無人の中間地帯を置き、これ等の地帯より、女眞族の生活圈を守るために、翌年兩國の交通路に當る鳳凰城附近に一線の防壘を築造したのであつた。従つ

て、この國境中間地帯の設定は、鮮民族の滿洲侵入を防止する目的を持つたものであつて、後世見られるが如き漢鮮兩民族の接觸を防止するために設けた緩衝地帯と見做すことは出来ない。康熙四十八年（一七〇九年）、康熙帝の命によりこの地方を測圖せる耶蘇會士レジスの地圖（デュワルドの支那誌所載）によると、鳳凰城東方の邊牆と鴨綠江との間に一線を引きこれを兩國の國境とし、この線と邊牆との間を無人地帯としてゐるが、これは恐らく誤解で、この線と鴨綠江との間は國境地帯で、更にその西方に無人地帯が置かれたものと思はれる。何故なれば、この地圖を見て康熙五十年（一七一一年）康熙帝が出せる上諭に「朝鮮との境は鴨綠江、土門江を以つて界とす、兩江の間不詳につき調査すべし」とあることを以つても明かであつて、これに従つて翌年、兩國の役人は長白山に至り「山上の潭畔の東下十里許りの地」に定界碑を立て、鴨綠江、圖們江間の山間不明の地の劃界を實施したのであつた。その後百餘年間はこの中間地帯は表面上嚴守せられ、特に鴨綠江流域の中間地帯は、度々の韓廷の要求によつて、滿洲封禁の制の弛緩に乘じ、侵入し來れる漢民族の定着を防止して來たが、その間、潜入せる農民の熟地五十萬畝を越えるに至つて、同治六年（一八六七年）遂に韓廷の意志を無視して、この鴨綠江流域の中間地帯を清朝は一方的に開放して終つた。

かく鴨綠江流域の中間地帯は漢民族の侵入によつて消滅したのであるが、圖們江流域の中間地帯はこれと反對に鮮民族の侵入によつて崩潰したのであつた。即ち同治六年の鴨綠江流域の中間地帯の開放に成功せる清朝は、時將に、東部國境方面より侵入せんとするロシア勢力に對抗するために、圖們

江流域の中間地帯を漢民族に開放して防備を嚴ならしめんとし、光緒七年（一八八一年）時の吉林邊務督辦吳大澂をして調査せしめたるところ、越壑の鮮民族を多數發見したのであつた。そこで清朝としては、圖們江が兩國の國境であるから、これ等越壑の鮮民族は清國の統治に服すべきであることを韓國政府に申し送つたのであつた。これに對して韓國中央部としては、自國民が禁を破つて中間地帯に侵入してゐたのであるから、事情止むなしとして承認し、何等中間地帯の一方的開放に對して抗議を行ふこともなく、たゞ鮮民族の故國返還を要求したのであつた。これは折角開拓した同胞の墾地放棄の結果となるので、現地官民はこれに反對し、その居住地を正當化さんがために、兩國の國境土門江は圖們江に非ず、土門江とは分界地點附近に土門多きため、その附近の河川を土門江と稱したものであるとて、長白山頭の定界碑を調査し、附近に土門あり、又鐘城越邊九十里に分界江ありて附近に土門あり、これ等の事實により、土門江は圖們江に非ず、従つて圖們江は國境に非ずとの説を立て、この中間地帯の韓國領土たることを正當化さんとした。この説の當否は問題の餘地はないが、このため所謂間島問題を發生して紛争の種となり、光緒十一年（一八八五年）兩國委員の勘界派遣となつたが、その後韓國の主張は失はれ、たゞ國境河川圖們江源の本流決定の問題に縮小して終つた。しかるに日露戰爭後、近代國家日本の保護權が朝鮮に確立されて以來、再びこの問題は重要意味を持つに至り、日本にとつては最初の國境問題として世人の注意を牽くところとなつたが、明治四十二年（一九〇九年）九月四日、日清間に締結せられた間島に關する協約第一條に於て、「圖們江を清韓兩國の國境と

し、江源地方に於ては定界碑を起點とし、石乙水を以て兩國の境界と爲すことに決定され、紛争多き圖們江國境の問題を解決したのであつた。

従つてこの清韓兩國の中間地帯は、最初人口壓力弱き滿洲をその高度に達せる朝鮮民族から守るために設けられた人爲的防壁であつて、これが背後より漢民族の侵入援護によつて滿洲の人口壓力強度に達し、近代國家の態様を整へるに至るや、これを開放して中間地帯にまでその統治力を伸長し、ここに線的な河川國境によつて清韓兩國の主權は相接し、再びこの河川中洲等の歸屬に關する問題を發生せしめるに至つたのである。特に明治四十三年八月の日韓合併により、強力な日本の主權がこの線まで及ぶに至つて、河川中洲の問題は一應解決したが、その警備問題等は官民の注目するところとなつた。しかし、この國境の外側には、間島條約により承認されたる鮮人居住地帯があり、更にその外廓には、日本の勢力範圍なる南滿地方がこれを護り、政治軍事的に見れば、比較的安全に保護せられてゐて、普通、河川國境の兩側が同一民族により開拓せられてゐる場合露呈する不合理な状態をよく調整して餘りあるものであつた。

しかるに、一九二七年、國民政府が南京に成立するや、滿洲の張學良政權はこれに合流するに至り、その近代國家確立の意欲は自國の領土に於ける完全なる統治權の行使を望み、滿洲に於ける歴史的事實を無視して、強硬なる對外政策を採るに至つた。そこで先づ北方に於てはロシア革命以來、再建に忙殺されてゐる蘇聯政權の弱體に乗じて、その北滿勢力圏の恢復を企圖し、南方に於ては、關東大震

災及び英米壓力によつて弱體化せる日本の南滿勢力圏を回收せんとし、茲に始めて滿鮮國境及び滿關境界、附屬地境界に於て、日支兩國の統治力は接觸し、各種尖鋭なる國境問題を發生するに至つた。従つて本來、日露兩國の中間地帯として設定された日本の南滿勢力圏は、ロシア勢力の弱体化以來、日支兩國の中間地帯に變化したわけであるが、新生支那の攻勢はこの中間地帯を撤去して直接兩國は國境に於て接觸し、各種の紛争を惹起するに至つたのである。故に一九三一年九月十八日の柳條溝に發生せる戰鬪は、廣い意味での日支國境なる鐵道附屬地境界に勃發せる日支兩國の紛争と解すべきであつて、この紛争を解決するための軍事行動が滿洲事變となつたのである。

かくて一九三二年、日滿一體觀の下に滿洲國が成立してより、從來日支兩統治力の接觸面である國境に於ける他者意識は消滅して、單なる行政、經濟境界と化し、又鐵道附屬地の返還によつて、その境界は事實上消滅して終つた。そして日本の國境は、日滿共同防衛の立場より、滿鮮及び滿關の兩境界を越えて擴大し、北方に於ては直接蘇聯とその長大な國境を以つて接觸し、西南方に於ては從來內國境界と考へられた内蒙外蒙及び支那との間に國境を發生せしめた。この中、内蒙との國境は、内蒙が未だ日露支三國間の中間地帯的性格を持つてゐたため、相互の他者意識も弱く、この新國境に嚴密なものゝを要求する段階に立ち至らなかつたが、蘇聯及び外蒙との國境は、も早や滿洲といふ中間地帯を挾まざる直接の接觸であるため尖鋭化した關係にあり、最近まで紛争の絶えることはなかつた。又、支那との國境は一九三二年の停戰協定により長城線を以つて境することとなつたが、その際更に滿洲

の安全を期するため、その外側に冀東地區の中間地帯を置き、一層抗日に傾ける國民政府の攻撃に備へた。そして更にその外側にある冀察政權を親日政權たらしめ、中間地帯の意味を持たしめんとしたが、これが却つて國民政府の乗ずるところとなり、日支兩國は再び北支の地に於て相互の勢力の直接の接觸となり、紛争を發生し、遂に一九三七年の蘆溝橋事件となつた。そこで根本的に東亞諸國家の他者意識を消滅して、相互に共同意識を以つて、對立的國境を政治、經濟的な友好的國境に變更せんとする意欲は、全面的日支戰爭に發展し、遂に抗日政權の奧地退却となり、今や北は黄河より、南は海南島に至る長大なる戰時境界を發生するに至つた。これが將來、支那を分割する國境となることは、日本の聖戰目的より考へても有り得ないことで、一日も早く、抗日政權をしてその對立的な他者意識を放棄せしめ、この戰時境界を消滅せしめなければならない。

滿支國境に於ては、既に他者意識を放棄して、東亞共榮圈確立の共同意識に燃える新生國民政府と滿洲國との平和的な政治、經濟的國境が再建され、一九四〇年の日滿華三國親善協定の成立は、從來便宜的に設定されてゐたこの方面の國境を、政治、經濟的立場より合理的に調整すべき友好的基礎を確立したものと云ふことが出来る。

以上の如く、日本民族はその生活圏の擴大につれて、その周縁の異種族との間の中間地帯にその政治的支配を伸長し、その紛争を解決するための争闘によつて、異種族の他者意識を消滅せしめ、對立的な境界をして平和的な境界たらしめ、今や日滿支に互る東亞共榮圈の中核を完成し、更に南方諸國

をこの圏内に包含して、相互に對立的境界を消滅せしめ、以つて將來發生すべき世界の諸ブロックとの間の共同の國境確立を目指して進まんとしてゐる。

これ等の點から考へると滿洲西南部の國境は、共榮圈内の平和的境界に屬し、假令、そこに不合理な地域が存在するとしても、既に關係國間に平和的基礎があるのであるから、紛争に至らずして調整が出来、又廣く共榮圈内の綜合計畫によつて解決さるべきものである。滿鮮國境も同様の意味で、合理的に調整さるべき段階に達してゐると云ふことが出来る。これに較べると滿洲の西北部、北部及び東部國境は東亞共榮圈と蘇聯國との對立的境界で、最も他者意識の強烈な典型的國境に屬するので、小書に於ては滿洲の諸國境の中、特にこの滿蘇國境に就て概説を試みようと思ふのである。

第二章 西北部國境

第一節 ロシア支配圏の擴大と對支接近

滿洲の西北部の國境とは、呼倫貝爾とザバイカルとを分割するアルゲン河川國境及び滿洲里附近の陸地國境を云ふのであつて、滿洲に於ては最も古く決定された國境である。此處に國境が発生したのは、從來、支那が獨立せる種族國家世界として、自己の生活圏の周圍に藩屬關係にある近親民族の支配圏を置き、全般として支那の勢力圏を形成してゐた處に、他者意識を昂起せしむるに充分強力な對等文化段階にある異種族スラブが西北方より接近して來たため、その勢力圏を限界づける必要が生じたからである。

支那は古來より既に度々その生活圏の周縁の地域にその勢力圏を擴大したが、常にその擴大の限界は自然的に限定せられ、この地域的な範圍内を唯一無上の世界として満足してゐたのであつて、その外側には何等その勢力圏擴大の刺戟を與ふるに足る土地もなく、單なる原始的な民族の散在せる土地

に過ぎず、従つて對等の立場で他者意識を持つに充分強力な異種族の勢力圏が存在しないから境界劃定の必要もなく、たゞ蠻族の侵入を防ぐために自主的に防壁を持つに過ぎなかつたのである。そしてその外側に次第に支配力の弱体化してゆく周縁地帯を配置し、その中で比較的強固な部族集團に對しては藩屬關係を結び、又散在せる少數部族に對しては、土民集散の中心地に木柵を以つて防禦せる假役所を置き、夏季の如き好季節の一定期間を限り、土民の天産品と粗末な工藝品を交換すると云ふ一時的な支配を行ひ、實際上點と線との支配に過ぎなかつた。又これを以つて充分その支配を果し得る程に、土民の反感もなければ、その反感を誘發する程の強力な支配もなかつた。更にその外側には、所屬未決定な狩獵遊牧の民族の分立的生活圏が散在してゐた。

かゝる廣大な中間地帯シベリアを挟んで、十六世紀中葉、ウラルの西方に強力なる西歐文明の援護の下に生長して來たモスクワ政府の勢力圏があつた。これが十六世紀の末葉、ウラルの低分水嶺を越えてオビ河流域に擴大するに至つて、その眼前に擴げられた廣大な中間地帯の存在は、スラブの東進を刺戟して止まなかつた。そしてこの中間地帯の向う側には世界の寶庫支那がある。これ等の東洋の寶庫には、既に西歐諸國が南海通路によつて侵入し、莫大な利益を擧げてゐる。かゝる情勢を聞知しては、モスクワ政府としても黙つて見てゐるわけにはいかなかつた。

勿論、ロシアの東進の最初の出發點となつたものは、豪商ストロガノフ家に與へられた新植民地をその周圍の土着民族の攻撃から守るための私兵コサックの自衛的軍事行動であつたが、それは何等自

覺なき現地の本能的擴大に過ぎなかつた。彼等は、たゞ土民に優る火器の威嚇によつて高價な毛皮を奪取出來るといふ利益に吸引されて、東西方向を有つ水路を利用し、無自覺に東進し、次々にオストローグを建設してその支配を推し進めた。従つてこのロシアの東方進出も、支那の邊疆支配の形式と同じく、點と線との支配の形態を持ち、たゞその土民擄取が強烈であつて、毛皮奪取の利益を求めると同時に、止まるところを知らない程、積極的であつた點が異つてゐる。このコサックの東進行の豫想外の收穫を見ては、モスクワ政府も黙視する能はず、これを政府の直轄事業として一五八六年にはシベリア征服のため遠征軍を派遣し、又兼ねて、この現地の東進力を利用して、露支間に横はる中間地帯を消滅せしめ、陸路による東洋貿易を獨占せんとする遠大な計畫を有するに至つた。

従つて十六世紀末、オビ河流域の支配を完成した時に、早くも古來より歐亞交通路として知られてゐたズンガリア經由による對支接近を試みんとした。しかし此處には蒙古の一部族カルマックの生活圏があり、これが露支兩國の勢力圏の中間地帯となつてゐて、コサック等がシベリアの原始民族に成功した攻撃方法を以つてその勢力圏を擴大し、中間地帯を消滅せしめるには、餘りに強力であつた。そこで武力に依らずに、平和的な懐柔手段をとり、遂に一六一八年春、イヴァン・ペトリンとアンドルシユカ・ムンドフの二商人を、この中間地帯を通過して支那（明）の都北京に送ることに成功したが、貿易上は何等満足すべき成果を擧げ得なかつた。その後、清朝政權確立後も、この路は露支通商路として利用せられ、後述のアムール方面に於ける露支兩國の直接接觸が行はれるに至るまで、その

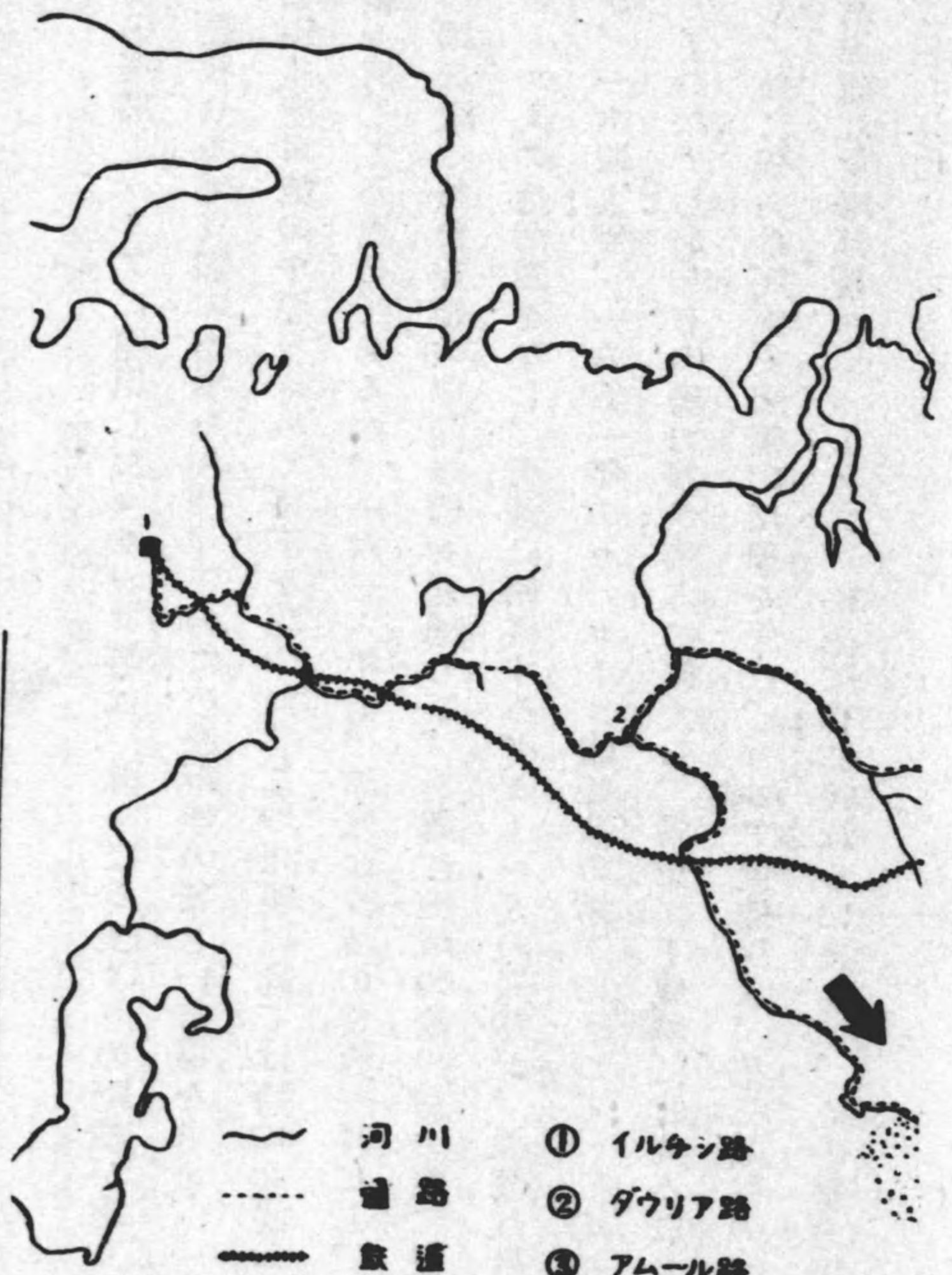
機能が維持されて來た。しかしズンガリアの中間地帯は常に存在してゐたので、露支兩國の勢力圏は直接接觸するに至らず、従つて國境問題も發生しなかつたが、後にはこの中間地帯それ自身が中繼貿易により、露支間の貿易を獨占し、その直接の交通を杜絶せしむるに至つた。




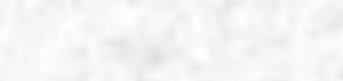

従つてかゝる經過から見ると、ロシアの東進途上、最初に遭遇した障礙はこのズンガリアのカルマックの強固な團結と、その越え難き地形であつたと云ふことが出来る。そこでかゝる障礙を避けて、より收穫の多い森林地帯を水路によつて東進し、一六二〇年には早くもイェニセイ河に達し、次第に支那との間の中間地帯を縮小接近して來た。しかし此處で、第二の民族的、地形的障礙に遭遇し、その進路を再び更へなければならなくなつた。

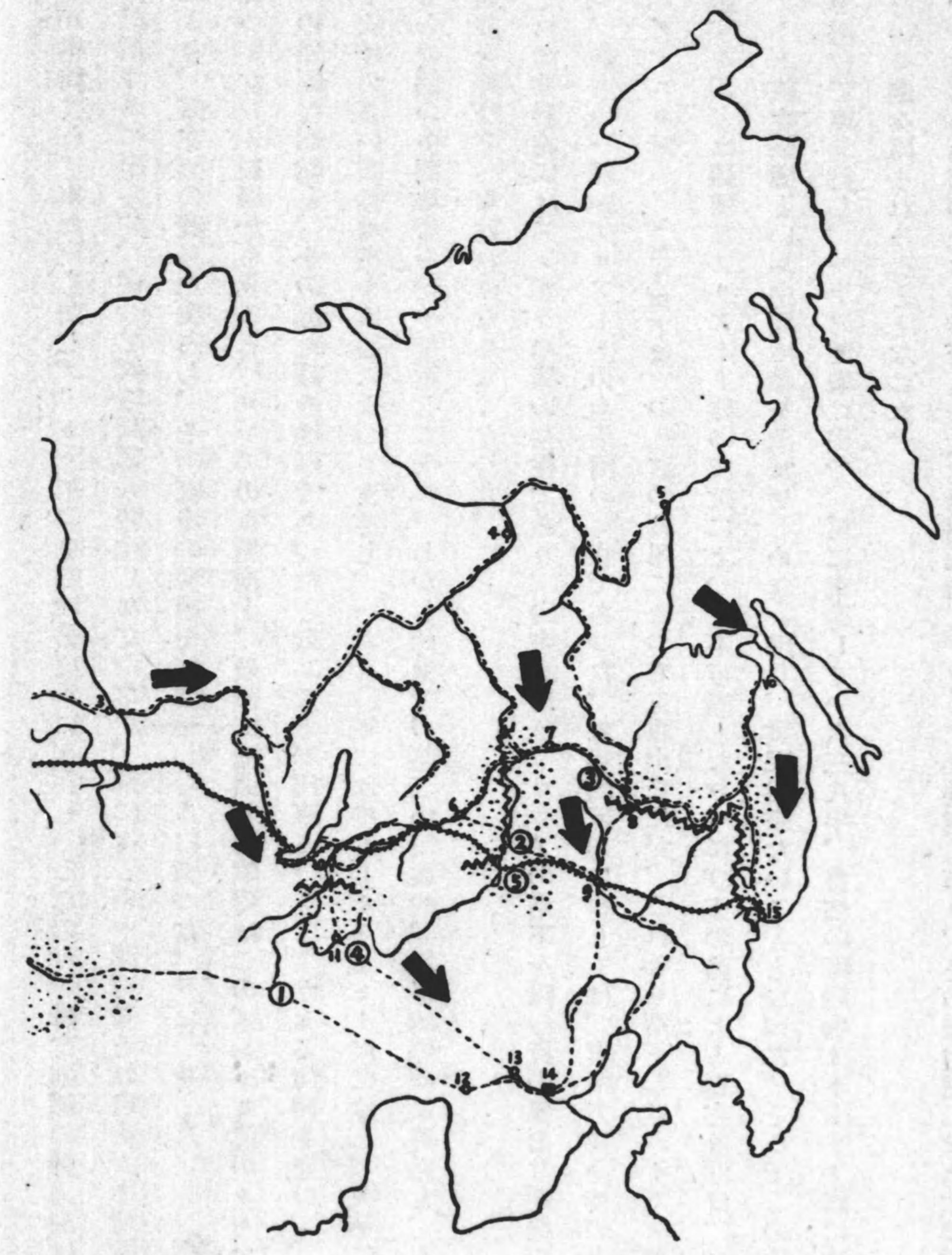
それは地形的にはアンガラ地塊の存在であり、民族的には、ロシアの南下を阻む程の強力な團結を持つ、蒙古の一部族ブリアートの生活圏の存在であつた。地形的障礙に對しては、東西方向を持つ上ツングースカ河（アンガラ河下流）の孔道の利用によつて克服出來たが、これより南下してバイカル湖に達することは頑強なブリアート族の反抗によつて不可能となり、再びこの路による對支接近は、ブリアート族生活圏といふ中間地帯を消滅せしめない限り、實現出來ないこととなつた。そこでこの障礙を避けて東北行し、レナ河流域に出で、更に東進して一六三八年、自然の障礙物オホーツク海に達しその東進を阻まれることとなつた。

かく支那勢力圏の北方に擴がる廣大な中間地帯に、ロシアは進出し來り、その勢力圏に收めた頃、

- 1. モスクワ
- 2. トボルスク
- 3. イニセイスク
- 4. ヤクーツク
- 5. オホーツク
- 6. ネルチンスク
- 7. アルバヂン
- 8. アイグン
- 9. チチハル
- 10. セレギンスク
- 11. 庫倫
- 12. 歸化城
- 13. 張家口
- 14. 北京
- 15. ウラヂヴオストク
- 16. キジ湖



- | | | | |
|---|------|---|-------|
|  | 河川 | ① | イルケン路 |
|  | 道路 | ② | ダウリア路 |
|  | 鉄道 | ③ | アムール路 |
|  | 國境 | ④ | セレンガ路 |
|  | 中間地帯 | ⑤ | 東清鉄道 |



明末の統治力弱化に乗じて滿洲に興起した女眞族は、先づ西方内蒙古を懐柔し、次いで東方朝鮮を従へてその境界を安定し、新興清國の崇徳五年（一六三九年）には、北方索倫部（鄂倫春、達呼爾）を攻略して、黒龍江流域を清の勢力圏たらしめ、ロシアの勢力圏との間に、外興安嶺の中間地帯を残すに過ぎなくなつた。しかし未だこの頃は兩勢力圏の接觸はなく、互ひに強力な他者の存在は意識に上つて來なかつた。

しかるにこの東部シベリアに進出したコサック等は、餘りに本土よりの距離が遠くなつたために、原住民族より徴收せる毛皮類の市場を失ひ、このため近距離の新しい市場を求め、一方各據點の自立自給のため穀物生産可能の平原を求めて南下を謀つた。この問題に就ては特に北邊のヤクーツクは痛切にその必要を感じてゐたのであるが、一六三六年頃、黒龍江流域の富源を耳にし、一六四三年遂にボヤルコフの遠征隊は外興安嶺の中間地帯を通過して、黒龍江流域の清の勢力圏に侵入し來つた。この地域はダホール人の生活圏をなし、清朝に朝貢するダホール人の聚落が、黒龍江沿岸に散在してゐたのであるが、一六四九年、一六五一年のハバロフ遠征隊の南下によつて、この地域はロシアの勢力下に歸して了つた。しかしその勢力圏が南方に擴大し、松花江下流域に達するに及んで、清朝の支配圏と接觸し、茲に強力な民族支配圏の反撃を受け、ロシア東進以來、第三回目の障碍に遭遇し、一六五八年、沿黒龍江攻略部長ステバーノフ、松花江畔に破れるに及んで、その勢力圏を黒龍江、ゼーヤ河上流部に縮小退却せざるを得なくなつた。

かく、バイカル湖西に於てブリアート生活圏の存在により、その東進を阻まれたロシア勢力圏は、この障碍を避けて抵抗の弱き東北方の森林地帯を迂回して南下し、直接黒龍江中流域に進出し、その勢力圏を擴大して來たが、強力な支那の支配圏に接觸するに及んで、この新開の黒龍江中流域の勢力圏を維持するためには、黒龍江上流よりバイカル湖西に達する通路を貫通し、本土との連絡を全うする必要が痛感せられるに至つた。これは宛も、十九世紀中葉、黒龍江口地域の新勢力圏を保持し、英國の攻撃より護るためには、シルカ河のロシア領土と聯結する黒龍江水路の獲得を必要とし、このため一八五八年の愛理條約を締結したのと同じことで、又十九世紀末、沿海州を確保するためには、東清鐵道の建設を必要とした事情と類似せる現象である。

茲に於て、バイカル湖西のコサック等は、ブリアート族の頑強な抵抗を排して、アンガラ河に沿つて溯江し、一六五一年イルクーツクにオストログを建設し、更にバイカル湖東に進出したが、數回に及ぶブリアート族との争闘の後、遂にその生活圏をロシア勢力圏の中に包含することに成功し、以つて黒龍江中流域の勢力圏との連絡を完成し、一六五七年、シルカ河畔にネルチンスクを建設し、前衛アルバチンと共に黒龍江政策の據點となるに至つた。

したがつて、この頃に至つて始めて、露支兩國の勢力圏は滿洲西北境において接觸することになつたのであるが、このため各種の紛争を發生し、外交交渉がこの方面の通路によつて開かれることとなつた。

當時のこの方面の状況に關しては、一六六七年のゴドノフの地圖によつて推察することが出来る。この地圖は一六六七年、モスクワ皇帝の「シベリアの土地全部を記述し、土地及び住居地の境、國境、河川及び地勢一切を地圖に表現せよ」との命令を受けたトボルク知事ゴドノフが製作したもので、その後瑞典の使節がこれをモスクワで寫した寫本二種類（一六六九年寫本、一六七四年寫本）がストックホルムに保存され、現存の最古のシベリア地圖として知られてゐる。この地圖はシベリアの西端トボルクで製作されたのであるから東部シベリアの状況に關しては不明な點が多かつたとは考へられるが、恐らくこの方面との連絡によつて最新知識を集める努力は拂はれたに相違ないから、當時ロシア人の持つてゐた地理的知識の大體は推察出来るものと信ずる。

この地圖は至つて簡単な地圖ではあるが、黒龍江流域は一地域として表現され、ザバイカルとの間に境界が引かれ、外興安嶺の山脈の存在を示してゐて、この中でも特にアルゲン、シルカ兩河の流域までは比較的表現も詳細で信頼するに足るものがあるが、黒龍江下流域は不正確を極めたものである。この地理的知識の精粗は政治的支配の範圍を示すものであつて、これによつて當時の勢力圏を推定することが出来る。

注目すべきは黒龍江流域區域の南限であつて、齊々哈爾（本圖には「國境の町」と記してある）附近で東西に走る一線を以つて所謂滿洲と限つてゐる。これは當時の清國政府の政治的支配圏の限界を示すものと思はれるが、一六七〇年ネルチンスク知事の命令で北京に使したミロヴァノフの報告によると

「支那政府に屬するダホール人の農業地のある嫩江沿岸より支那政府の馬車に乘じ長城に達し」とあり、この事實を證據立ててゐる。そして此處よりアルゲン河に至る間は、露支兩支配圏の中間地帯をなしてゐたと考へられるのであつて、前掲の報告には「アルゲン河の向う側にはロシアの貢納者は居ない」と記し、この事實を物語つてゐる。一六七五年、再び北京にモスクワ政府の正式使節として使したスバサリの報告によると「ドライ湖より先きは支那帝國」であると記してゐるが「アルゲン河流域のツングースはモスクワ皇帝への貢納民族でネルチンスクに屬してゐるが、根河のツングースは誰にも貢納してゐない民族である」とあり、興安嶺は「支那とシベリアとの境界で、支那の車道の始る處」と記し、「もしロシア皇帝がハイラル河か、アルゲン河に城砦を築けば、ネルチンスクと嫩江との間の住民を服従させることが出来る」と報告し、前掲のミロヴァノフの報告と大體一致し、當時この地方が露清いづれの支配圏にも屬さざる中間地帯をなしてゐたことを物語つてゐる。特に興安嶺以西、アルゲン河以東の呼倫貝爾は完全に兩國の勢力の及ばざる中間地帯をなしてゐたことが察せられる。

この中間地帯を貫通するダウリア路（ネルチンスクよりアルゲン河畔を経て現在のハイラル附近より興安嶺を越えてチチハル方面に至る）とアムール路（ネルチンスクよりシルカ河、黒龍江の水路を利用して現在の愛理、墨爾根經由、チチハルに至る）によつて、露清兩國の支配圏の接觸が續けられ、この交通路に沿つた帶狀の地域の政治的支配に關する争闘が一六八四年及び一六八六年兩國のアルバチン争奪戦となつた

のである。従つて一時、ロシア勢力圏は黒龍江に従つて南下し、松花江畔に於て清國支配圏と接觸し、その反撃を受けたが、その後新興の清朝政權が支那本部の内亂鎮定に成功し、その力を北方防衛に用ふる餘力が生ずるに至つて、かく南下せるロシアの勢力圏を縮小退却せしめ、大體黒龍江の上流部アルバチン附近、ゼーヤ河上流部へと壓迫してその間の地域を恢復し、一六八二年には呼瑪爾、愛琿二城を築き、兵站線を完備し、線と點との支配ではあるが、清國の支配圏をこの方面に擴大して來たためアルバチン附近に於て兩支配圏は接觸し、此處に政治的支配に關する紛争が発生することとなつたのである。

しかしロシアの東進に際し、現地方面が土地資源の獲得にその目標を置いて活動したにも拘らず、中央部に於ては常に支那との通商を最後の目的とし、そのため現地の領土獲得の活動も支那中心部へ接近するための交通路開拓政策として利用して來たのであつて、これがために生ずる高價な現地方面の領土的な衝突は、中央部の願はないところであつた。又現地方面としても、兩軍ともに嚴寒遠隔の地に於ける攻城戰が、如何に給養方面に於て困難であるかを切實に體驗したのであつた。かゝる現地情勢に加へて、兩本國に於ては共に内亂鎮定に悩まされ、邊境に於ける戰爭を願はず、茲に兩國は和意を表示するに至つた。

第二節 黒龍江上流域に於ける露清交渉と

ネルチンスク條約

露清兩國間に和意が動いたのは、第一回のアルバチン戰鬪後であつて、一六八五年末、康熙帝からモスクワ皇帝に對し、アルバチン撤退と和解の意を含めた手紙が到着した。茲に於てモスクワ政府はゴロウインを全權大使として任命し、翌年一月モスクワを出發、十月セレギンスクに到着し、この地で支那代表と會合し、國際會議を開催することとなつてゐた。この際、ゴロウインに與へられた使命は、ロシアの東進以來、中央部の常に忘れることなき目標——支那との通商を達成することであつて、このため、領土的獲得は或る程度犠牲を拂つても、この最後の目的を達せんとしてゐた。従つてその領土的主張の限界も、黒龍江全流域の獲得よりも、先づ黒龍江國境を主張し、これが不可能ならばその左岸のブレイヤ河又はゼーヤ河により、アルバチンの確保を目標としてゐた。

これに對して清朝側は康熙二十七年（一六八八年）五月、内大臣索額圖を全權大使に任命し、歸化城經由、外蒙古を横斷してセレギンスクに赴かしめた。この際清朝側はネルチンスクは勿論、黒龍江全流域をその支配圏とせんとし、以つてロシア側の熱望する通商許可の代償たらしめんとした。しかし不幸にも、清朝代表一行の蒙古横斷の途上、準噶爾、噶爾丹の喀爾喀攻撃の時に遭遇し、この地帯

に清朝の支配の及ばざる中間地帯が発生して、ロシアとの接觸は碍げられ、僅かに參領索羅巴等をセレギンスクに送り、會議延期を通告したのであつた。

もしこの時セレギンスクにて國境會議を開催したならば、恐らく太平洋斜面と北極海斜面の分水嶺即ちインゴダ河とキロク河との分水嶺ヤプロノイ山脈（外興安嶺）を以つて露清兩國の國境とすることに成功したと思はれるが、又この時、キャフタ條約に先立つて、早くも露蒙國境を決定しなければならぬことになり、しかもその當時の兩國のこの地方に關する地理的知識を以つてしては、單に兩國の交通路に沿つた地域以外は恐らく漠然たる表現を以つて、未定地域を残さざるを得なかつたであらう。

そこで翌康熙二十八年（一六八九年）四月末、清國側代表索額圖等一行は二千の軍隊を従へ、北京を出發し、古北口、多倫、達里諾爾、呼倫諾爾西方を經、主として現在の東經一一六度線を北上し、六月十五日ネルチンスクに到着し、一方、吉林、寧古塔、愛琿方面の軍隊は多數の軍船を連ねてアムール路によりネルチンスクに到着したのであつた。かくて七月八日より會議が開催せられ、約二週間の論議の末、七月二十四日（舊曆八月二十七）（日西曆九月七日）ネルチンスク條約の締結となつたのである。この際、清朝側は耶蘇會士張誠（ゲルビオン）及び徐日昇（ヘレイラ）を通譯として同行せしめ、従つてラテン語を以つて兩者の意志を通じ、この條約の正文はラテン語にて書かれたものであつて、別に相互に露文、滿文の條約を交換したのであつた。

この際、ロシア側はアルバチンの確保を最後の主張とし、清朝側はネルチンスクの確保を主張して譲らず、この間が結局兩國の爭奪の中間地帯となつて、このアムール路、ダウリア路に沿へる带状の地域の分割が、論議の中心となつたのである。

かくて黒龍江南岸にてはアルグン河を以つて境することに決し、黒龍江北岸にてはケルベチ河を以つて境することとなり、この兩河によつてこの兩國の交通路沿邊の接觸地帯を分割し、その東方海に至る間は外興安嶺の山嶺の漠然たる境界により、その勢力圏の限界を決定したのであつた。従つて、かゝる分割方式より見るとき、このネルチンスク條約の劃界は地域的にその精粗の度を異にし、兩國の關係交渉の密なる交通路に沿つた兩支配圏の接觸地域は、交通關係によつて得た比較的詳細な地理的知識を基礎に、河川による線的國境によつて近代的分割が行はれ、これに比してその交渉粗なる東方國境に於ては、單なる觀念的な分水嶺を以つて兩勢力圏の分割を行ひ、條約上は東方海に至る外興安嶺の山脈を國境とし、越境を嚴禁することを明示してゐるが、實際上は兩勢力圏の間の山岳に中間地帯を設定して、その接觸を防止したに過ぎず、この國境地帯は兩國の經濟的利用に委せられてゐた國際的入會地の性格を持つてゐたと見ることが出来る。かゝる國境分割の方式は至つて不完全なものではあるが、かゝる方式の分割を以つて満足出来る程、當時のその方面に於ける兩國交渉は粗であり、従つてその地理的知識も漠然たるものであつたことを證據立てゝゐる。更にその東方ウディ河地方に於ては、條約上にも明かに未劃定な中間地帯を設定し、黒龍江沿岸の線的國境が、東方海に近づくに

従つて次第に帶狀國境に變移して行く状態を物語つてゐる。

従つてその後、情勢の變化に従つて國境としての弱點を暴露するのは、かゝる帶狀國境の部分であつて、百數十年後の愛環、北京條約によつて、遂にこの帶狀國境の部分は河川による線的國境に改變されることになつたのである。これに比してアルゲン河の線的國境は常に維持され、現在に於ても、滿洲の西北部の國境を構成してゐるのである。

河川國境に於て界碑と云ふものは、現在、陸地國境に見られる如く嚴密な意味を持つことが出来な
いのは、その界碑設立の位置の技術的障壁からも自明であるが、このネルチンスク條約に於ても、その分割の主要部分である黒龍江沿岸の河川國境に就て特に界碑設立を規定し居らず、たゞ清朝側の自由意志に委すことを追記してゐるに過ぎない。しかし清朝側は、その最初の對外交渉を記念し、又兼ねて、兩國交通路の分割點を明示するために、この年の十二月、ケルベチ河口東岸に界碑を建設したのであつた。

このケルベチ河の位置に就ては問題が多く、ネルチンスク會議七月十二日の清朝側最後の提案によれば、主張國境ケルベチ河は、ネルチンスク下流百五十杆附近にて黒龍江に流入する小河であるといふ。もしこれを正確なものとする、後述のアンバ・ケルベチ河に相當し、後世考へられてゐる位置に誤りなきものとなる。しかし、この時その主張の根據となつたものは、清朝代表部所持の地圖であつたことは注意さるべき點である。この頃は未だ耶蘇會士測圖の以前であり、正確な地圖が清朝側に

用意せられてゐるとは考へられず、従つて、かゝる漠然たる地圖を基礎に説明されたケルベチ河の位置は信頼することは出来ない。もし果して、この説明の如く位置が明確であつたならば、條文に於て「チヨルナ河に近きケルベチ河」の如き表現を用ひなかつたであらう。又もしケルベチ河がネルチンスクに接近したものであれば、南岸の分割點アルゲン河口に至る間は黒龍江（シルカ河）の國境の規定がなければならず、これが條文にない處を見ると、このケルベチ河はアルゲン河口附近になければならない。しかるに、この二十年後の一七一〇年にこの方面を測圖した耶蘇會士の報告を基礎に作圖したダンヴィル圖（デュアルド支那誌にも所載）には、アルゲン河口附近にアヂゲ・ケルベチ河があり、その東隣にチヨルナ河があり、條文と一致し、このケルベチ河の西岸にモスコー領、東岸に滿洲領との記入があり、この河川が國境なることを示してゐる。もしこれを兩國の國境とすれば、黒龍江南岸を分割するアルゲン河國境と大體一直線をなして、その北岸を分割し、この黒龍江流域の帶狀地域を東西に二分するに最も合理的な國境と云ふことが出来る。しかるに、このダンヴィル圖には、更に上流のネルチンスクに近き處に、アンバ・ケルベチ河と稱する河川あり、この東岸に界碑の記入があるのである。しかし、その附近にはチヨルナ河はない。しかし後世、この河川の少し上流にチヨルナ河として知られてゐる河川がある。従つて、この圖の測圖の行はれた一七一〇年當時、このアンバ・ケルベチ河口に界碑があつたことは間違ひはないが、これが果して康熙二十八年十二月の建設當時の位置を示したものが疑問である。

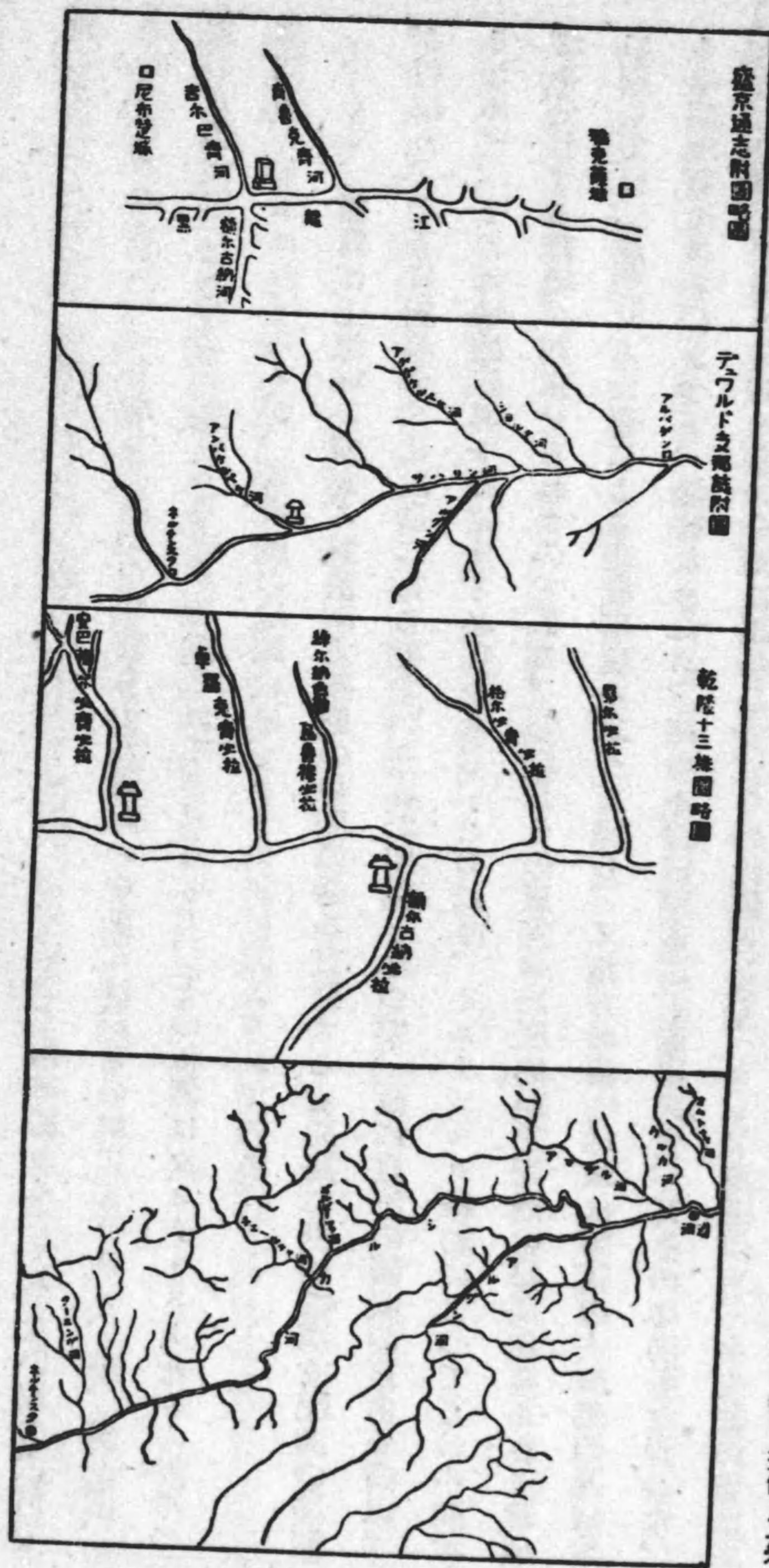
しかるに、ラヴェンスタインの著書「黒龍江上のロシア人等」の六七頁にはビュシングス・マガチンの四八八頁のペアーの報告を引用してこの界碑移動を説明してゐる。これによるとプーシキンがネルチンスクの知事であつた當時（一七〇三年から一七〇九年までで耶蘇會士測圖の直前に相當する）、アルバチンでロシア軍に従つて、清朝側に捕はれたシエレジンと云ふツングース人が、逃れてアンバ・ケルベチ河畔にて、ロシア側の保護の下に暮してゐた。この事實を知つた清朝側はこの逃亡者の逮捕を要求して來たので、プーシキンはこれを捕へしめ、清朝側に引き渡した。清朝側に引き渡されたシエレジンは、自己の清國領土逃亡の事實を否定してその逃亡罪より免れんとし、このアンバ・ケルベチ河こそ兩國の國境であると主張した。そこで清朝側はこの説を喜んで信じ、この者の案内でアンバ・ケルベチ河に至り、此處に界碑を建設したのであるといふ。

この話を事實とすれば、ダンヴィルの圖にアヂゲ・ケルベチ河を國境としながら、アンバ・ケルベチ河畔に界碑の記入があるのも合理的と考へられ、この國境移動によりケルベチ河が二つ生じたものと推定される。

このケルベチ河口の界碑は、實際は河口より上流二十哩の處に後には建設されて居て、ラテン、露、滿、漢語の條文が刻されてゐたらしく、毎年、清朝の官吏が數十人、チチハルより、アムール路により溯江、界碑の地に至り、ロシア官吏と交歡、貿易を行つてゐたのである。即ちこの地は兩國の交通路の關門の役を果してゐたのである。

以上の事實より推察すれば、康熙二十八年十二月に建設された界碑位置は、アヂゲ・ケルベチ河（現在のアマザール河）口と考へられるが、その後これがアンバ・ケルベチ河口に移動せしめられた結果であらうか、一八三二年、このアヂゲ・ケルベチ河の界碑を調査に行つたラディシンスキー大佐は遂にこれを發見することは出来なかつたと云ふ。

かく、黒龍江北岸を分割する河川に界碑を建設したのに、南岸を分割するアルゲン河口に界碑を建



第 二 章 西 北 部 國 境

設しなかつたのは不可解であるが、恐らくアルゲン河が南岸に於て何等紛れることのない程の大河であつたためであらう。しかし乾隆の中頃即ち十八世紀の中葉には、この地にもラテン、滿、漢、蒙、露の五體文字にて條文を刻せる界碑が建設されてゐたらしく、その位置はウスチ・ストルカの對岸の滿洲領とも云はれてゐるが、支那側の地圖には、ロシア領に記入されてゐる。

かくて、黒龍江上流域に擴がる露清兩支配圈の中間地帯を貫通する交通路に沿つて兩支配圈の接觸が行はれ、相互に對等の文化段階にある他者の存在が明確となつて、茲に自己の國家の自由を確保するために、その地域的限界を設定する必要を生じ、この結果、ネルチンスク條約によつてこの中間地帯を分割する國境が劃定せられたのである。しかしその東方の比較的兩支配圈の接觸密ならざる地域に關しては、漠然たる山嶺による帶狀國境を以つて境し、又西方の蒙古地域は兩國の支配圈の及ばざる中間地帯の存在によつて、接觸なきため、國境を設定することも出來ず、又その必要もなかつた。

そこで兩支配圈の接觸地帯の分割に讓歩して、その代償として、ロシア東進以來、中央部の常に忘れることなき北京貿易の許容を、ネルチンスク條約第六條によつて正式に獲得したロシアは、この兩支配圈の接觸地帯より北京に達することの出來るアムール路により、この翌年より直ちに隊商を北京に送り、これに外交的交渉を兼ねしめ、ネルチンスクは今や兩國交渉の中心となり、滿洲側のチチハルと相對して、アムール路の交通據點となるに至つた。

第三節 セレンガ河流域に於ける露清交渉と

キヤフタ條約

ロシアの北京貿易にとつて最も便利な通路は、セレギンスタより南下、蒙古を横斷して張家口に至るセレンガ路であるが、この路が一六八八年以來、噶爾丹の支配のため杜絶し、この外蒙地方は露清兩國の政治的支配の及ばざる中間地帯となつて、兩國支配圈の接觸を碍げてゐた。そこで止むなく、兩支配圈の接觸のあるアムール路によりその目的を満足せしめてゐたが、一六九六年、康熙帝が噶爾丹征伐に成功するに及んで、清朝の政治的支配は外蒙地方に及び、露清兩支配圈はこの地方の北方で接觸し、セレンガ路再開の條件を備へるやうになつた。

しかし對支交通商路としてのセレンガ路再開に就ては、ロシア國內の事情が、その實施をさまたげてゐた。即ちネルチンスク條約後、唯一の露支交通商路として登場したアムール路の據點ネルチンスク主腦部の反對である。何故ならば、セレンガ路が再開されるれば必然的に近距離のこの通路に貿易は集中して、ヤプロノイ山脈を越えた黒龍江上流域にあるネルチンスクの衰退は明かであるからである。

しかし、アムール路の半分の日數で横斷出来るセレンガ路が再開された以上、アムール路の維持は困難となつて來た。果して一七〇四年入京せるサヴァチエーフの隊商は、その歸路をセレンガ路にと

り、續いてこの通路の再開を聞いたオスコルコフの隊商はこの路により入京（一七〇六年）するやうになつた。茲に於てネルチンスクではこれに反対し、從來通りアムール路による入京を要求するに至つた。かゝるロシアの内部的不一致の發生は清朝をして困惑せしむる處となり、遂にロシアに對し從來のアムール路を廢してセレンガ路を通商路と決定することを求め、一七〇七年入京せるコンディヤコフ隊商の歸國に際して、爾今、通商路はセレンガ路によるべき旨を申し送つたのであつた。かくてこのセレンガ路は露支通商の通路として決定され、一七一八年北京官貿易の停止に至る間、數回に及ぶロシア隊商はこの路によつて往復し、又一七二二年ロシアに使した圖理琛もこの路に従つたのであつて、康熙末年には支那側商人もこの路により漠北庫倫地方に至り、兩國の私貿易が行はれるに至つた。

以上の如く當時兩國の私貿易はセレンガ路に沿つて庫倫からセレギンスクの間で行はれ、この間のトーラ河以北、チコイ河以南の地域は所屬未決定の中間地帯となつて、庫倫とセレギンスクはアムール路、ダウリア路に於けるチチハル、ネルチンスクの如き、兩國交通の據點となるに至つた。かくてこの方面の私貿易が盛んとなるにつれ、ロシアの北京官貿易を守るためにも、この國境地帯を國境線として限定し、一定の貿易地を設定統制する必要に迫られ、清朝側としても、外蒙とロシアの接近を防止し露清兩國の支配圏の限界を明確ならしむる必要があつた。特に現地に於てはその支配圏の限界不明確のため、逃亡者問題等の各種の紛争を惹起し、これを解決するために國境劃定の要が痛感せら

れて來たので、先づ一七二四年清朝側よりこの希望が述べられるに至つた。

そこでロシア側でも、一七二五年夏、ヴラディイ斯拉ヴィッチを特命全權大使に任命してこの會議に備へたが、その際特に當時中絶し居れる通商關係再開の訓令が與へられ、茲にもロシア東進以來の中央部の堅持せる目的が忘れられてゐないことが觀取される。

さて中心問題の國境劃定であるが、これには劃定關係地域に關する地理的知識の所有が前提となるが、ネルチンスク條約にては兩國の交通路に沿へる地域に關して得た既有的地理的知識を基礎に國境劃定が行はれたのであつて、従つて交通量多き地域に關しては詳細な地理的知識を基礎に詳細な國境劃定が行はれたが、交通量少き地方では、詳細な地理的知識なきため、漠然たる國境劃定が行はれたに過ぎず、又それを以つて満足出来る程、兩支配圏の接觸も密ではなかつた。この點から考へるとネルチンスク條約當時の露清兩國關係は近代的段階に遙かに遠いところのものであつて、このキャプタ條約の交渉に於て、特にこの點に注目を拂つたことは、ロシアの對外政策の近代化を物語つてゐる。

即ちこの目的のためにロシア政府では特に隨員として、ステフェン・コリチョフなる測量技師を加へた。彼は既に露波、露土間の國境劃定委員の經歷を有し、國境劃定の優秀なるエキスパートとして知られて居り、更に、その當時創立された露國科學院出身の二人の測量助手を同行せしめたのであつた。

この全權一行は、國境劃定に關し、セレギンスク、ザバイカル、ネルチンスク地方及び軍事上の要

地、鑛山等の確保といふ大綱の指示を受けてゐるだけで、その細目に就ては中央政府では之を指示するに足る地理的知識なく、これ等の調査、地圖製作、而してこの自然的事實に従つて決定せられる國境に就ては、全くこの全權に委ねられてゐたのである。これ等の點から見ると、この全權一行は一つの地理的調査隊とも見られるものであつて、これはその日程にも現れてゐる。即ち、一七二五年十月露都を出發し、この冬はザバイカル地方で越冬して種々國境に關する調査打合せをなし、翌一七二六年十月にセレンガ路より入京したのであつた。この蒙古地帯滞在の數箇月こそ、これ等調査隊の活動最も著しい時であつて、この全權の用意周到なる態度には驚くべきものがある。

尙その際注意すべきは、この國境劃定の氣運に相應じて現地方面にても既に地圖製作に乗り出してゐたことである。即ち一七二五年十月、シベリヤ總督はイルクーツクより來れる測量技師ペーター・スコベルチンとその三人の測量助手にこの地圖製作の仕事を命じたのであつた。この地圖は翌年三月完成し、その寫しを丁度、イルクーツクに滞在中のヴラディスラヴィッチ全權に手渡したのであつた。これを見た全權はこれが不完全なるを知り、更にこれ等製作者を東西二隊に分け、露蒙接壤地帯の詳細な現地調査を命じ、成るべく七月中にセレギンスクに報告することを命令したのであつた。これは全權の北京への出發以前に詳細なる地理的知識を得て置く必要があつたためであつて、スコベルチンとバアシアコフは、イルクーツク河、コソゴル湖、サイアンスク山脈、イエニセイ河上流、アバカン河（即ちイルクーツクより唐努烏梁海の西端に至る露蒙接壤地帯）を調査し、その自然地理、人種誌、服從民族

の貢物等に關する報告、地圖を提出すべきことを命じ、他の一隊は同一の調査目的を持つて、ネルチンスク條約に未定として残されたウディ河地方に至る山脈の可及的速かな調査を命じたのであつた。これ等の成果に就ては明かではないが、一年後のプーラ會議に際し、不完全ながら全國境のみならず、シベリア全國の用意が出來、これが國境會談に當り、ロシア側代表に壓倒的な地理的根據を與へた事實より察すれば、意義深き調査であつたと云ふことが出來る。しかしこの會議にてもウディ河流域の未劃定地域が地理的事實の不明のため、そのまゝ残されたことは、この方面の調査隊がその目的を達しなかつたことを證據立てゝゐる。

清朝側も、康熙帝の噶爾丹征伐後その支配圏の擴大に従つてこの方面の地理は相當明かになつて來たが、特に耶蘇會士の測圖によつて詳細な地理的知識を得、これをダンヴィルの地圖により察すれば、オノン河、ケルレン河上流方面、トーラ河附近は特に詳細となつてゐるに注目する。しかしこの際の調査によつても、新國境劃定地域に關しては不明な點が多く、結局この會議によつて、詳細に清朝側に知られてゐる部分、即ち比較的その支配力強力な地方の確保に成功したが、その不明な地方即ちロシア側の調査の完備せる地方は、ロシア側の地理的知識の前に讓るを餘儀なくされ、特にこの會議に臨んだ清朝側代表部の無智は全くロシア側に壓倒的勝利を與へて終つたのである。

さてザバイカルに於て、前述の如き基礎を終了せるヴラディスラヴィッチ全權は、一七二六年十月北京に到着し、清廷と折衝の結果、翌一七二七年三月二十一日（雍正五年三月十一日）に至り、國境劃定區域

(ウアイ河地方以外のネルチンスク條約に残された國境で、アルゲン河上流より西方の露蒙接壤地帯であるが、その西端は準噶爾未平定の當時としては兩支配國の接觸なきため、再び残されることとなつた)、通商條件、外交使節往復に關する件等の十條の豫備協定が成立したので、會議地を現地に移し、六月十四日よりセルギンスク近郊のブーラに於て清朝側代表、多羅郡王和碩額駙策璘、領侍衛內大臣賜赫、兵部侍郎圖理琛とヴラディスラヴィツチ全權との間に國境會議が開催せられた。

この際、國境劃定の中心議題となつたのは、セレンガ路沿邊の兩支配國の接觸する中間地帯であつて、ロシア側は最初トーラ河による國境を主張したが、結局、この中間地帯を分割するチコイ河中流を國境とすることに決定した。そしてセレンガ路の兩國分界地點は、セレンガ河の右岸支流「キャフタ河畔のロシア監視所とオロコイト山上の支那監視所との間にある土地を平分して境界鄂博を建つ」こととなつた。この條文によれば當時、既に主要接觸地域に於ては、大體兩支配國の限界は決定されてゐて、その間に地域的の中間地帯を残してゐた事情が察せられる。これは、キャフタ河畔より東方滿洲境のツァガンオラに至る全蒙古境界の劃定方針にも現れて居り、更にその劃定方法に就て詳細な記述がある。即ち「ロシア臣民の居住せる土地に近く山脈、連山、及び河川の存するときは此等を境界と定め、同様に蒙古監視所に近く山脈、連山、及び河川の存するときは此等を境界と定む。但し山脈及び河川の存せざる平坦なる土地に於ては之を等分して境界鄂博を建設す」とあり、大體、自然物體を境界標識として採用せんとしたことが察せられる。しかし本書の問題とする滿洲西北陸境の部分に

就ては、特に重要視したものと見え、「兩國全權は所謂ツァガンオラの監視所よりアルゲン河岸の蒙古監視所に至る間は、特に人を派して調査し、國境を定む」べきことを規定してゐる。

このブーラ會議は約一箇月を經過して、八月二十日(支那曆七月十五日)遂に前述の如き國境劃定の大綱に關する條約が成立し、世にこれをブーラ條約(ブルスキー條約)と稱せられてゐる。

かくて兩國間に行はれた通商、國境その他の交渉を結末づける本條約は、北京豫備協定十條を基礎とし、これにブーラ條約をその第三條として添入し、この全十一條の條約を十月十日(支那曆九月七日)キャフタ河附近にて議決し、十月二十一日(支那曆九月十八日)ネルチンスクにて調印が行はれ、翌年六月その批准を完了し、これキャフタ條約として知られてゐる處のものである。従つて國境に關する條文に就ては、キャフタ條約とブーラ條約とは差異はないわけである。

このブーラ條約の條項に従つて、兩國代表は國境の現地劃定のため委員を任命し、この中、東方國境の劃定にはグラゾフと瑚畢圖等を出發せしめた。この結果、東方國境細目はブーラ條約追加條項として十月十二日(支那曆九月九日)アバガイドにて調印され、アバガイド界約として知られて居り、西方國境細目は十月二十七日(支那曆九月二十四日)調印され、セレンガ界約として知られてゐる。この中、前者のアバガイド界約は、滿洲の西北部陸境を最初に劃定したものであるから、特に重要で、以下この内容及びその劃定方法に就て詳述して見たい。

第一段はキャフタの分界點より東方に向ひ、チコイ河中流に従つてアラハダイン・ウス河合流點の

第十號境界鄂博に至る約百五十杆の間であつて、比較的その分割も詳細を極め、その大部分はチコイ河による河川國境で、従來の慣習的遊牧越境を嚴禁し、遊牧民の牧地も、その所屬國に従つて移動せしめ豫め將來の紛争の原因を除去してゐる。

第二段は第一段の終りより滿洲領のツガンオラに至る約七百杆の間であつて、この間、山嶺、平原、沙漠をなし、四十八箇の境界鄂博によつて分割されてゐるが、分水嶺等の明確なる自然物なきためか不明確を極め、オノン河の流域を上下に分割し、最も國境劃定に困難を感じた地帯であらうと思はれる。しかしそれだけ、この部分は兩國支配圈の接觸密ならざる地帯で、漠然たる境界を以つて満足出来る程度の地方的遊牧民の接觸ありしに過ぎない。この點、ケルレン河流域のツングース人のチタ方面への遊牧を禁ずる條項の如きは、その最も著しきものの一つであらう。

第三段は滿洲西北部の陸境の部分であつて、五箇の境界鄂博によつて約百杆の間を分割してゐる。即ち第五十九鄂博よりアバガイドの第六十三鄂博に至る間で、その位置を現在、正確に考定することは困難である。

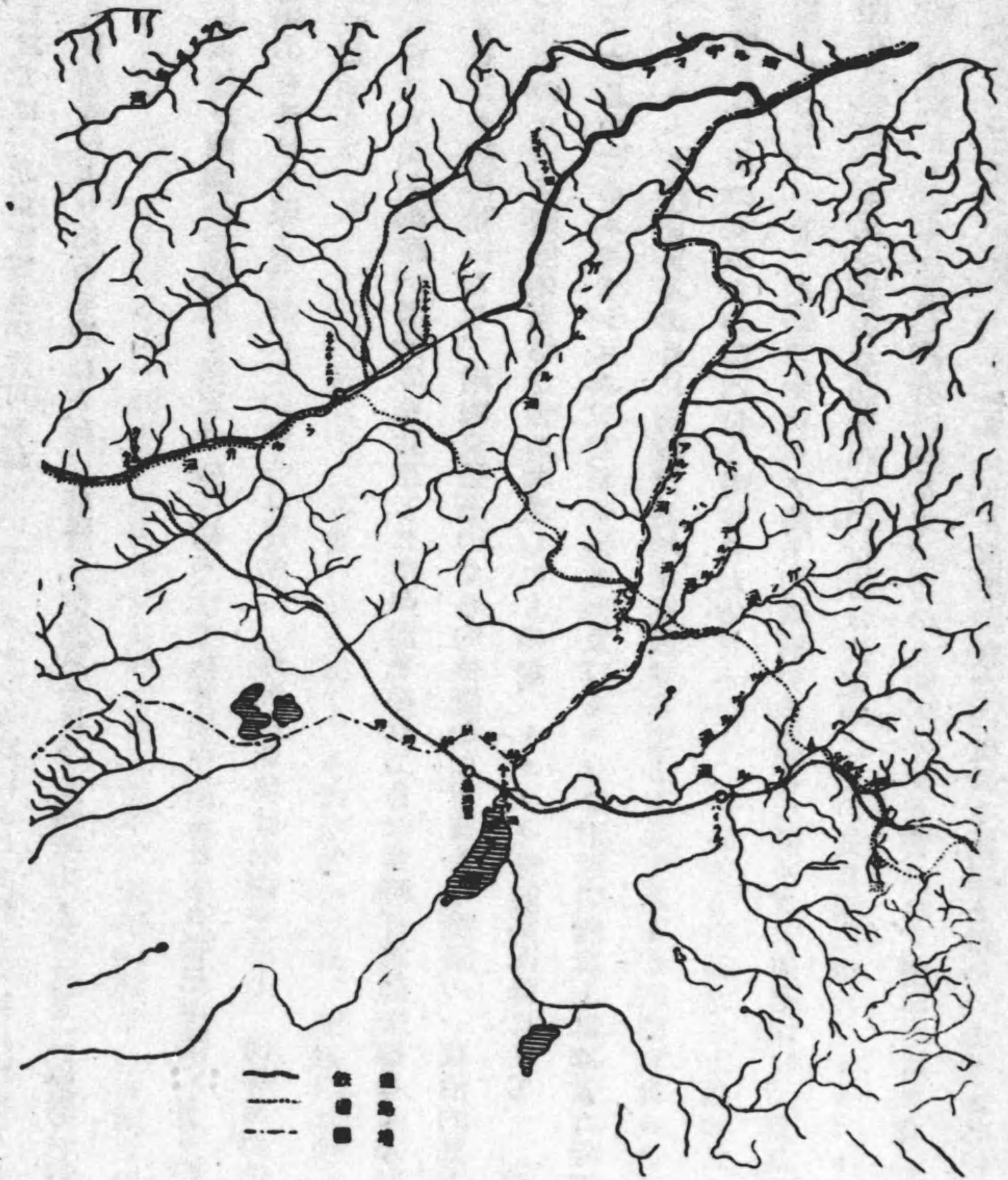
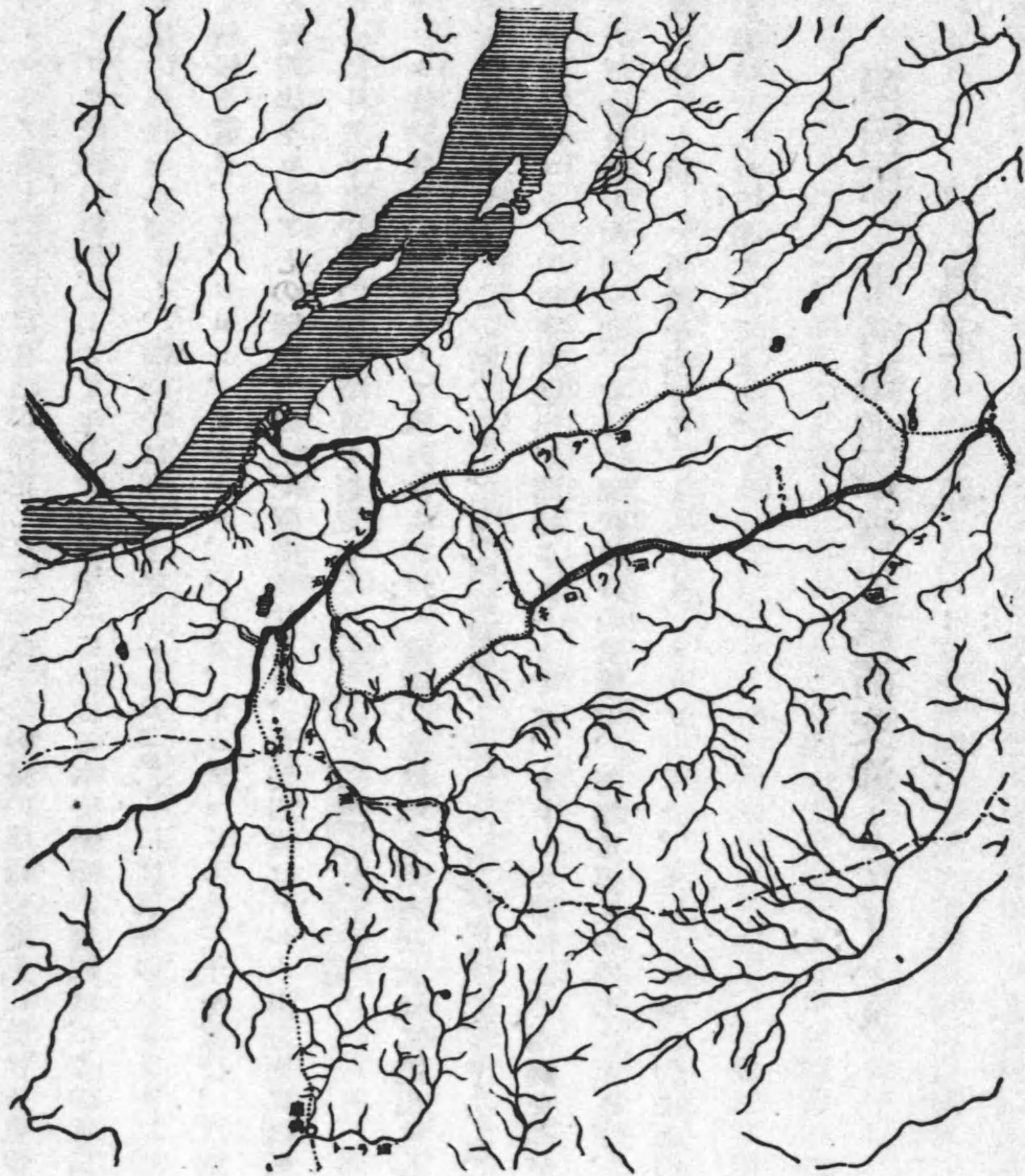
以上三段を通じて、設立されたる境界鄂博には、露蒙兩文にて國境を明示する條項を紙片に書し、これを木牌に貼附して、その附近の一般民衆に周知せしめ、更に翌年、越境に關する詳細な規定を設け（キヤフタ條約追加條約）國境附近の民衆の注意を喚起するために、これを印刷して配布するといふ手段を採つた。

通商關係に就ては、北京官貿易の許可を得たので、セレンガ路により大體五年毎に繼續入京し、一七六二年の入京禁令により始めて廢止され、此處に露支貿易は全く國境のキヤフタに極限されるに至つた。

かくセレンガ路が兩國の交通路と指定された結果、十八世紀中葉より十九世紀中葉に至る約一世紀間、露支兩國の交渉は外蒙古北部にその中心は移動し、滿洲西北境は兩國交渉上、何等重要性を持つに至らなかつた。

従つて曾つて、アムール路が兩國の交通路として使用せられてゐた當時、繁榮を極めてゐたネルチンスクは、セレンガ路再開により、兩國交通上の中心的位置から、單なる邊疆の一政治的都市に顛落して終つた。このロシア國內の事情を豫め考慮したものが、キヤフタ條約第四條に於て、「兩國間の交易の外に、交易のためネルチンスク、セレギンスク及びキヤフタ附近の國境上に適當な場所を選択し」と述べ、セレンガ路官貿易の外に國境貿易地を開設することとしてゐるが、これはネルチンスクの人々を慰撫するためのロシアの對内策と考へられる。

この條文に従つて、一七二八年、ダウリア路上の兩國分界點なるアルゲン河沿岸に、貿易地ツルハイトウが開かれたが、その當時の交通地理上の位置は決定的にその貿易額に現れ、キヤフタ貿易の盛時には年額八百萬ルーブルに達したのに對して、このツルハイトウ貿易は、盛時でも年額一萬ルーブルを踰えなかつたと云ふ有様で、ネルチンスク復興の意志に反する結果となつたのである。しかし、



細々ながらダウリア路上に兩國貿易地が存在したことは、この路の兩國交通上に於ける重要性が察せられ、又キャフタ條約の劃界によつて生じた露蒙境界に於ける兩支配圏の接觸は、この呼倫貝爾地方の政治的支配の強化を必要とし、清朝では雍正十年（一七三二年）には現在のハイラルに呼倫貝爾城を建設して統領を置き、又、ソロン、ダホール、バルガ、オロチヨンの兵三千を選び、八旗に編成して、その左翼四旗をロシアとの國境方面に配置遊牧せしめ、右翼四旗はハルハ河方面に遊牧せしめ、雍正十二年には外蒙車臣汗との間に境界を劃定した。（西北端はこの時未劃定、道光四年第
五十八オボを滿蒙境界の起點とす）

即ちキャフタ條約劃界の影響として現れたものは、清朝の直轄地を滿洲西北境に進出せしめ、その支配圏の擴大強化であつて、この點、この方面の兩國關係が近代化の道程を辿つたことが察せられる。しかし十九世紀のロシアの極東再進出が開始されるまでは、セレンガ路による兩國交渉が主要位置を占め、この呼倫貝爾方面の交通、交渉は現状維持の状態で、何等重要性を持つに至らず、従つて滿洲西北國境に就ても新しい問題を生ずることもなく、ネルチンスク、キャフタ兩條約によつて決定された國境が維持せられて來たのである。

第四節 東清鐵道沿線の露清交渉とチチハル協定

約一世紀間に亘つてセレンガ路交通によつて平靜に推移した兩國關係は、十九世紀に入り、一大變革を受けるに至つた。即ち當時やうやく活潑となれる西歐諸國の帝國主義的活動の影響は、從來ロシア中央部の保持せる商業的目的のシベリア政策を一變せしめ、優秀なる技術の援助の下に、極東に於ける脆弱地域、支那支配圏の外廓地帯に侵入し來り、その支配力完全ならざる中間地帯の組織的な領土侵略が再開されるに至つた。その侵略方向は先づオホーツク海岸より南下、黒龍江口地方の占領を以つて開始され、この河口の新植民地と上流の既有的のロシア領（シルカ河流域）との連絡線確保のため、この東西方向を流れる黒龍江による交通路獲得が必要となり、一八五八年愛琿條約を締結して江北地方を奪ひ、現在の滿洲北部國境を發生せしめた。續いて新發見の日本海沿岸の良港と、これを連絡するウスリー河、綏芬河地方の交通路を獲得する必要が、一八六〇年の北京條約によつて、滿洲東部國境を發生せしめたのである。そして鐵道といふ新交通技術の紹介は、この極東の新領土とロシア本土との連絡強化の武器として採用され、又兼ねて時將に活潑に活動を再開したスエズ經由による南海交通に對應して、陸路による東西交通路を再建せんと計畫は、シベリア鐵道の建設を促進せしめた。

特に、一八九〇年、支那側が英國の援助の下に、南滿洲橫斷鐵道の調査を開始せる報告に接するや、このシベリア鐵道計畫は急速に具體化され、翌年三月ウラヂヴォストクに起工式が行はれた。しかしこのシベリア鐵道建設の當初に於ては、これに對する支出が充分でなかつたが、ウィットが一八九二

年交通大臣より大藏大臣となつてからは、外資（フランス資本）の輸入により鐵道建設に積極政策を採り、特に一八九四年日清戦争の勃發はこの工事を促進することとなつた。

このシベリア全線七區の中、最も建設が困難と考へられたものはアムール區一三〇〇哩で、技術上の困難と共に、これが完成される時はアムール汽船會社との相剋も豫期せられるものであつた。果して一八九四年夏、このアムール區の實地踏査の結果、鐵道建設が極めて困難なことが實際に證明されたので、茲にロシア政府をして、滿洲通過によりアムール區の鐵道建設に對する困難を回避せんとする計畫を持つに至らしめた。かゝる計畫を起さしめる前提となつたものは、日清戦争によつてその弱體を暴露した清朝の支配圏の存在であるが、特にネルチンスク條約以來ロシアの東進を阻止したアルグン河國境對岸にある地域の實相が既に二十數年前よりの秘密裡の調査によりロシア側に知られてゐた結果である。これ等の調査によつてネルチンスク方面より、ツルハイトウを經由、墨爾根に至り、ブラゴヴェスチエンスクに達する、ザバイカルとアムール中流部とを連絡する最短路の存在に就て、既にロシアの注意するところとなつてゐたので、アムール上流部の鐵道建設の技術的困難に遭遇するや、これを回避するために選んだコースはこの路による滿洲領通過であつた。

しかし翌一八九五年、支那政府に滿洲通過鐵道線路の調査隊の入滿許可を求めた時には、かゝる消極的な鐵道設計畫から離れ、直接沿海地方と連絡する積極的な計畫に發展してゐた。即ち沿海地方境界の三岔口と、黒龍江界のツルハイトウの兩地より、四班七十六人の踏査隊派遣を通告してゐるの

である。これに對して、時將にロシアの援助で日本より遼東半島還附を受けた清國政府としては、これを許可せざるを得なかつた。この時既に、翌年露都に於ける露清密約に先立つて、滿洲通過鐵道建設を默許したかたちとなつたのである。

その後この方面の全般的な調査の進行につれ、清國側の意向には何等顧慮することもなく、純技術的立場より、ザバイカルとウスリー鐵道とを連絡する最短コースを選ぶこととなつた。即ちこの時、既にこの滿洲西北境に於ける支那側の支配力は部分的に喪失し、この方面の國境は名のみで、實際上ザバイカルと呼倫貝爾は一つとなつて、ロシア側の支配力の下に、自由な調査が行はれた。この調査が後年、清國側の支配力のこの方面に對する回復に従つて、再び國境問題を發生するに至つたとき有力な資料となつたであらうことは想像に難くない。

かくて、決定された鐵道敷設コースは、現在の如く、アバガイド附近を通過して國境を横斷するものであつて、キャフタ條約以來二百年に近く平靜であつたこの國境地帯に、新しい紛争の種を提供することとなつたのである。

この東清鐵道全線調査は一八九八年一月末に終り、五月八日には全線をマンチュリア區よりボグラーニチナヤ區に至る十三建設區に區分して建設に着手することとなり、滿洲の西北境は今や横斷鐵道の起點として重要性を獲得し、これ等鐵道建設關係の人々の流入によつて滿洲里なる新興市街が誕生するに至つた。かくてこの鐵道建設は東西兩端及び哈爾濱を中心として進められ、一九〇〇年義和團

の亂が滿洲に波及する頃までには、部分的に運轉を開始してゐた。しかしこの亂の影響で工事は一時停頓するの止むなきに至つたが、ロシアの北滿占領によつてこの障礙は除去され、一九〇一年十月三日、海拉爾、滿洲里間のウコノール驛にて最後の連絡成り、此處に全線開通し一九〇三年七月一日營業を開始し、翌年バイカル湖沿岸區の完成によつて歐亞連絡の交通路は全通することとなつた。

かく北京條約によつて決定を見た滿洲に於ける露清國境の國境型態は、滿洲を非常に不安定の状態に置き、ロシア側より見れば、自己の領土沿海地方と、ザバイカルとの間にその交通連絡を遮斷するが如き位置を占め、滿洲側より見れば、その周圍を包むが如きロシア領土の配置となり、露清何れかその強力なる支配力を持つ方が、この關係位置打破に乗り出さなければ、解決されない關係にあつた、もし清國側が強力であつたならば少くとも沿海地方を恢復してかゝる不利な配置の是正を企てたであらうが、不幸にもロシア側の支配力が強力であつたために、反對に北滿にその侵略の手を延し、この部分に自己の支配力を滲透せしめ、事實上、國境存在の意義を失はしめた。これが滿洲横斷鐵道の調査に始まり、その建設に至つてその支配力はその根柢を獲得し、續いて一九〇〇年義和團の亂が滿洲に波及せる機會を捉へて、東西北三面より軍隊を侵入せしめ、全滿の占領を企てた。

この年の春、義和團の亂が北支に勃發するや、その七月初め早くも北滿に波及し、ロシアは鐵道、居留民の保護を名として、オルロフ將軍に命じ、ザバイカリア軍を率ゐて西部國境を越えて侵入せしめた。ために支那側の國境警備の卡倫官兵は皆その持ち場を捨て、退却し、七月三十日にはハイラル

附近に於て清國軍が撃破されるといふ形勢となつて來た。此處に於て黑龍江將軍壽山は營務處總理程德全に命じて殘兵を收拾し防備せしめ、一方ロシア軍と媾和してその進出を阻止せんとしたが及ばず、八月二十八日には遂に齊々哈爾省城を占領され、呼倫貝爾は全くロシアの手中に落ちて終つた。従つてこの頃は滿洲西北境の區々たる國境問題など何等問題でなく、ロシア側の現地首腦部の間には、この際、國境を大興安嶺、小興安嶺、完達山脈、老爺嶺に移して分水嶺を國境とし、黑龍江、ウスリー河、綏芬河流域をロシア領とせんとする意見が行はれた程であつた。

しかし日英同盟の壓力によつてロシアは一九〇二年四月、滿洲還附條約を締結し、その第二條に於て撤兵を約したが、これを履行せず、遂に日露戦争を経て一九〇五年九月の日露媾和條約第三條に於て「滿洲全部を舉て清國專屬の行政に還附すること」となり、その追加條款第一に於て「一杆毎に十五名を超過せざる鐵道守備兵を置くこと」が確認された。茲に於てロシアは、既得の「東清鐵道建設及び經營に關する契約」第六條の鐵道附屬地行政權と、今回の駐兵權とによつて、その直接の支配力は鐵道沿線に限定されることとなり、一時全般的に北滿に滲透してゐたロシアの支配圏は再び縮小退却せざるを得なくなつた。

茲に於て清國側は、一九〇五年十二月北京に於て日本との間に協定された「滿洲に關する條約附屬祕密議定書」の第十條の「清國全權委員は日露兩國軍隊の滿洲撤退後、清國に於て直にその主權に基き該地方に於ける平和を保障すべき充分なる行政手段を講じ」の條文に従ひ、滿洲行政の再建に着手

し、一九〇七年、先づその行政組織に大改革を加へ、東三省總督徐世昌の下に黒龍江巡撫程德全を置き、對露關係のため、特に鐵路交渉總局を設け、その總辦として宋小濂を置いて、その支配力を強化し、翌年には滿洲里に贖浜府を開き、國境邊疆の經營に當り、清國の支配力を恢復し、茲に一九〇〇年以來ロシアの占領によつて中斷されてゐた國境地帯にその支配圏を擴大して、再びこの滿洲西北境に於て露清兩國支配圏の接觸が起り、特に鐵道貫通による兩國交通路の存在は、この關係を密接なものとした。更にこの鐵道建設以來、ロシア側はこの沿線に沿つて移民を送り、その邊疆の強化を企り、清國側も、この方面への支配力恢復以來、アルグン河沿岸等に支那農民を移住せしめ、その支配圏を強化した。

又その支配力の程度は、その地理的調査に現れ、ロシアの鐵道建設より日露講和に至る北滿に於けるその支配圏の擴大期間は、殆ど自己の領土と同じく自由に調査が行はれた。例へば一九〇〇年から一九〇二年に至るロシア黒龍江水路局のアルグン河調査の如きで、一九〇六年には、後に各種の滿洲地圖の基礎となつた八萬四千分の一の詳細な地形圖が完成し、その後一九〇六年から一〇年の間に再びロシア參謀本部兵要地誌のため、詳細なアルグン河沿岸の調査が行はれ、これ等各種の調査資料が後年の國境劃定會議に當り、ロシア側の有力な武器となつたのである。

これに對して清國側でも光緒三十四年（一九〇八年）宋小濂は、五月よりアルグン河方面の現地調査を實行し、又同年八月には東三省總督の命により、于駟興は滿洲里附近の陸地國境の詳細なる調査

を實施し、アバガイド界約の境界界博の考定を試みた。翌宣統元年（一九〇九年）には呼倫兵備道は測繪員曲觀海等をアルグン河國境方面に派し、詳細な地圖を製作せしめた。かゝる露清兩國の邊疆に對する調査が實施されたことは、その政治的支配力がその支配圏の限界まで擴充したことを意味するもので、茲に國境を挾んで兩支配圏の接觸となり、不明確な國境地帯を調整すべき前提が完備したと見ることが出来る。

時適々、光緒三十四年の宋小濂の國境視察の際、アルグン河中洲に採草牧畜の越境慣習を有するロシア人があることが發見せられたので、この國際的入會慣習を規定するために「俄人越界割草章程」「俄人越界牧畜章程」を定めて、越界ロシア人に納税を命じたのであつた。しかるにロシア側は國境不明を口實として越境の事實を承認せず、却つてアルグン河中洲の自國領を主張して納税を拒み、茲に滿洲西北境の國境の再劃定を要すべき事態となつて來たのである。これ即ち、兩支配圏が擴充して、從來のネルチンスク條約による河川國境が帶狀國境と化し、更にこの河川地帯の中に線的國境を求め近代的關係に達したものと云ふことが出来る。

かくて北京外務部は、宣統二年（一九一〇年）四月、駐京ロシア公使と折衝の結果、滿洲里に國境劃定準備委員會を開催することに意見の一致を見るに至つた。茲に於て支那側は準備委員會の委員長に、既に現地調査により國事情に通じてゐた呼倫兵備道宋小濂を任じ、委員杜蔭田、測繪員曲觀海等の各員を派遣し、滿洲里に於てロシア側の委員長ジユダノフ、委員ウサート、イコンニコフ等と會

合し、豫備會談を開くこととなつた。

この滿洲里豫備會談は、宣統二年四月二十二日より開始し、會議を開くこと十二回、三箇月を經、七月二十日一と先づ會議を終了し、十月二十二日よりアバガイド方面、七月二十九日よりアルグン河の兩國委員共同の現地調査を行つたのであつた。このアルグン河國境調査は大體所期の目的を達し、宣統二年九月中に終了したが、滿洲里方面の陸地國境調査は九月末、ベスト流行のため實施出來ず、一時停止し、十一月十二日よりアバガイドより西進調査の結果、未解決の問題を残して不完全のまま、宣統三年三月末に一應終了することとなつた。かくアルグン河中洲の解決のため開始せられた國境調査は、清國側の豫期に反して、滿洲里方面の陸地國境に重大な問題があることを明かにした。

時に蒙古問題が起つて來た。これは日露戰爭後、滿洲で退却を餘儀なくされたロシアが蒙古に於てその穴埋めをせんとする意圖に發するものであつて、特に一九一〇年の日露新協約は、滿洲を挾んで朝鮮、蒙古に於ける兩國の活動を承認するものと思はれた。この一つの政策として現れたシベリア鐵道と庫倫との連絡問題は清國政府を刺戟し、これに對抗して外蒙古國境地帯に支那農民の耕作地を設置して國境の防壁たらしめんとし、又宣統二年末には外蒙古を省組織に改めんとするなど、蒙古人の反漢氣運を激成するが如き政策を採つたので、自然と蒙古の支配者等は親露傾向を帯ぶるに至つた。これに乗じて一九一一年二月駐京ロシア公使コロストウエツツは蒙古とロシアとの通商に關する六箇條の提議をなし、露蒙關係の重大化を示して來た。

この報は滿洲里會談末期の困難な状態を一層險惡のものとし、將に決裂に瀕する有様となつたが、結局兩國全權大使出席の本會議に於て解決することとし、暫く停會することとなつた。かくてジュダノフはチタに歸り、宋小濂もハイラルに引き返し、改めて四月二十日チチハルに於て本會議を開くこととなつた。かゝる間にもロシアは實力壓迫の態勢を示し、滿洲里の駐屯部隊を二千餘名増加してゐた。

かくて兩國政府は交渉の結果、ロシア側は全權委員としてコサック騎兵部長ブチロフ、副委員長としてジュダノフ、チチハル領事アブナシエフ等を任命し、支那側は黒龍江巡撫周樹模を全權委員長とし、副委員長として宋小濂等を任命し、四月二十日(支那曆)よりチチハルに於て國境測定委員會本會議を開催することとなつた。しかし、ロシア全權一行は期日に至るも到着せず、やうやく五月二十日にチチハルに到着したので、準備の都合上開會期日を延期し五月二十七日より開會したのであつた。

しかるに會議を開くこと九回に及び二箇月を經過したが、僅かに第五十八鄂博一箇所に就て彼我の意見が開陳せられたに過ぎなかつた。

しかるに八月十九日(西曆十月十日)武漢の地に革命が勃發するや、ロシアはかねてよりの蒙古經營に乗り出し、八月三十日(十月二十一日)庫倫に於て活佛との間に「ロシア政府は蒙古に自治制を布き、且國民を編成せんとする蒙古の主張を援助する事」等の協約を締結し、獨立の援助を公然と開始した。

この獨立運動は外蒙古のみならず呼倫貝爾にも波及し、清朝政權の立場を益々困難ならしめた。かゝる情勢の下に於て國境劃定が議せられたことは注意を要する點であつて、會議に現れたロシア側の態度の變化も當然と云はなければならぬ。

茲に於て、滿洲里方面の最も困難な陸地國境問題の解決をあとまはしとし、最も問題の少いアルグン河下流の國境を劃定する第一議定書を宣統三年九月十日(西曆一九一一年十月三十一日)調印し、この會議の目的の一部を達したのであつた。しかし陸地國境及びこれと接続するアルグン河上流國境は解決を見ず、特に滿洲里市街の爭奪は論議の中心となつた。

清國側としても、滿洲里の讓歩は法理論上出來ないばかりではなく、既に列國の注視的となつてゐるこの地を讓歩すれば、列國は必ず均勢の説を藉り、同等の利益を求めて他の土地の讓渡を要求して來ることは明かであるからである。この點に關して北京駐在の列國の使臣は、支那側の主張を援助したので、これに力を得、露都に於けるその後の唐大使の活躍と相俟つて、遂にロシア政府をして滿洲里全域を清國の領土として承認せしめたのであつた。

この報告は清國側にとつては非常な外交的成功として迎へられ、その代償として當時清國側としては重要とは考へられなかつた土地を讓歩し、宣統三年十月十八日(西曆一九一一年十二月八日、舊曆一九一二年十一月二十五日)第二、第三議定書の調印が行はれたのであつた。茲にもロシアの對國境劃定會議に對する傳統的な牽制政策が察せられるのであつて、一八六一年東部國境の劃定に當り環春河、穆稜河を國境と主張し、この方面に

支那の注意を集中せしめて、圖們江及び白稜河附近の論争多き國境を有利に解決したのと同じの方法を思はしめるものがある。要するにこの時劃定された國境に於ては、境界鄂博の名等は、その前の雍正五年のアバガイド界約の地名を使用してゐるが、實際は何等その間に理論的關聯が無く、この會議に於ける兩國の勢力に支配された國境と云ふことが出来る。

かくて前述の三議定書より綜合せる本條約は宣統三年十一月一日(西曆一九一一年十二月二十日)に調印され年内に臨時界標を設立し、翌年春、期を定めて現地劃定を行ふ豫定であつたのである。従つてこの國境劃定事業は、この時は未だ完了せず、現地劃定を残してゐたわけであるが、これが實行されるためには、この協定の調印に當れる兩國全權を任命せる露清兩皇帝の支配が、この新しく劃定さるべき國境線迄、完全に到達してゐて、兩國の力が相ひ接する状態にあることを必要とする。然るに當時既に清朝政權は崩潰の一步手前にあり、この協定調印の十數日後の十一月十三日(民國元年一月一日)に南京に孫文を臨時大總統とする民國臨時政府が成立し、その一箇月後の十二月二十五日(二月十二日)には清廷退位を宣言し、民國元年三月一日には、正式に袁世凱を大總統とする中華民國政府が北京に成立したのであつた。

かゝる中央政府の混亂状態に加へて、この國境劃定の現地呼倫貝爾に於ては、これより先き、ロシア側の後援によつて行はれてゐた外蒙古獨立運動と一致せる行動をとり、支那政府の支配の及ばざる地域となりつゝあつたのである。

即ちチチハル協定第一議定書調印の宣統三年九月十日後間もなく、庫倫に於ては九月二十八日蒙古革命成功し、活佛第八世は大蒙古國皇帝となり、十月二十六日、蒙古皇帝即位してゐるのである。かかる情勢は當然呼倫貝爾に波及すべきものと考へられるが、不思議なことにチチハル本協定調印の十一月一日までは表面的形式を持つに至らず、この後十數日にして始めて、巴爾虎總管車和札等は呼倫貝爾蒙旗の獨立を宣言した。

この事件に當つてロシア側は中立を守ると稱し、鐵道沿線に於ける兩軍の衝突を許さず、特に支那兵の列車輸送を許容しなかつたので、愈々支那側は不利となり、これに對する抗議も何等の効果もなく遂に十二月六日に至り、蒙古軍は改装せるロシア軍の援助の下に滿洲里を攻撃することとなつた。かくてこれより間もなく、海拉爾、滿洲里、吉拉林等は蒙古の支配に歸し、民國政府成立の民國元年三月頃には完全に呼倫貝爾は支那の支配より脱してゐたのである。かくては國境の現地劃定などは、全く當時の兩國にとつて意味を失つた事實となつてゐたと見るべきであらう。

民國政府成立後、度々の抗議にも拘らず、ロシア政府は遂に一九二二年十一月三日にはこの蒙古政府と露蒙修好協定を調印し、「支那軍及び支那人の植民を許さざるために」蒙古援助を明かとし、一九一三年十一月遂に支那は外蒙古の宗主權のみを確保して、外蒙古の自治を承認する露支協定を調印し、更にロシアは蒙古に於けるその活動の法的根據を得るために、支那政府を壓迫して一九一五年、外蒙古自治に關する露蒙支三國協定を成立せしめ、その外蒙古に對する保護權を確立した。

ロシアの今回の對蒙政策は清末の内政混亂と對日關係の安定の時機に乗じてシベリアに接せる蒙古地帯、即ち西は新疆省のズンガリア、外蒙古のコブド、ハルハを経て呼倫貝爾に至る一帯の地域に緩衝地帯を設置し、自己の領土の安全を確保せんとする主旨に發するものであつて、この交渉の初期には漠然と蒙古と稱したその對象地域も、一九一三年の露支協定には、その自治區域を外蒙古と限定してゐるが、この頃までは呼倫貝爾は尙、外蒙古の範圍内に考へられたものと思はれる。それは民國二年十一月十九日、黑龍江督辦は民國政府に上申書を送り、呼倫貝爾の特殊性を述べ、「呼倫貝爾獨立せりと雖も、是は單に内亂と見做すべきであつて、決して庫倫に附和せるの故を以つて之を庫倫と同一系統のものとして認むべきではない」と述べ、露國公使も十一月二十日外交部に來り、「呼倫貝爾の制度は外蒙の如き自治を許す能はずと雖も、亦内蒙の如き縣治に改むべきものに非ず」との意見を述べ、外蒙と内蒙との間に占むる呼倫貝爾の特殊地位を認めてゐるのであるが、その解決の途を見出し得ず、呼倫貝爾はロシアの實力の下に獨立の状態を續けたのであつた。しかるに一九一五年六月七日の外蒙古自治に關する露蒙支三國協定が成立せる後、兩國の折衝に依つて同年十一月六日「呼倫貝爾の地位に關する露支協定」が北京に於て成立し、この地方の支那政府治下の自治特別區域なることが確認された。しかし實質的にはロシアの支配圈に屬し、従つて滿洲西北部の露支國境の意味は喪失し、却つて興安嶺より漠河産金地帯に達する呼倫貝爾と滿洲との境界の方が問題となつた程であつた。しかるにこの年の七月既に歐洲大戰勃發し、東支鐵道守備軍の引揚げが行はれ、ロシアの壓力やう

やく低下を示し、特に一九一七年のロシア革命勃發はこれを決定的ならしめた。即ち外蒙方面に對しては同年早くも庫倫張家口間の定期自動車運輸が計畫され、翌年、張庫汽車公司等が成立し、當時既に開通し居れる京綏鐵路と連絡して邊疆を貫く主要交通線の成立となり、支那の外蒙に對する支配圏の再擴大を準備した。果して一九一九年春にはその本體を現し、時の西北邊使兼西北邊防總司令徐樹錚は自動車百數十輛を仕立て、この自動車路を利用し西北軍第三旅歩兵隊を庫倫に輸送し、この武力威嚇により遂に十一月、蒙古政廳をして北京政府に自治取消の請願書を提出せしむるに至り、呼倫貝爾にも同一方法を以つて翌年一月、呼倫貝爾特別區の自治を取消し、その支配圏を露支國境迄再擴大することに成功した。しかし今回は、反對にロシア側が内亂のため、その政治的支配力を失ひ、國境に於て兩支配圏の接觸は起らず、従つて國境問題の發生の餘地がなかつた。

しかるに一九二〇年九月、極東共和國成立するに及び、この國境迄ロシア側の支配圏擴大回復し、茲に兩支配圏は再び國境に於て接觸を開始することとなつた。そこで兩國交渉は先づ東支鐵道の通車問題に開始されたが、國境に關しては、支那側はチチハル協定否認を通告し、これに對して極東共和國代表の部分的承認を得たのであつた。その後、極東共和國は蘇聯政府の一部となるに及び、全面的國交恢復の努力が行はれ、一九二四年の奉露協定に於ては、「兩國の境界を更めて劃定することを約す右劃定に至るまでは現在の境界を維持するものとす」と特別の國境地域を限らず、全面的に國境再劃定の必要あることを承認したのであつた。

兎に角、この當時の蘇聯の對支態度は至つて消極的であり、平和的で、如何に國內整備に急であつたかが察せられる。この様子を見た支那側は各方面の國境に於ける失地恢復を叫び、特に新興支那の國民政府の成立後は、その後援の下に強力化する東北政權をして、東支鐵道回收を企圖せしむるに至つた。この結果、一九二九年八月露支紛争勃發し、蘇聯軍は國境を越えて滿洲里を占領するに及び、支那側も折れて、十二月ハバロフスク協定の成立となり、東支鐵道及び國境は兩軍衝突以前の狀態を回復することとなつた。

しかるに一九三二年春、近代國家滿洲國の出現は、その日滿共同防衛の立場より、その強力なる支配力を國境縁邊まで押し進めることとなり、從來の國境條約によつて劃定された國境を以つてしては解決の出來ない程、滿蘇兩國の支配圏は國境に於て接觸し、その間に寸土も中間地帯を残さざる近代的國境關係を持つに至つた。従つて滿洲内のロシア勢力の殘存物なる東支鐵道の存在は許されず、遂にロシア側はこれを賣却して、自國領内のアムール鐵道により東西連絡を確保し、更にその北方面に十七世紀前半のロシア東進のコースを復活してバム鐵道を建設し、國土防衛を強化するの止むなきに至らしめた。そして滿洲國の東支鐵道ゲージ變更は全くシベリア鐵道との聯絡を斷ち、特に東部國境の封鎖はその交通系統に大變革を加へしめ、僅かに滿洲里に於ける乗換連絡により歐亞交通の位置を維持するに過ぎなかつた。かく兩國の通商交通關係は實質的に杜絶し、國境各處に於ては紛争を惹起し、局地的な戰鬪も數回に及ぶといふ有様で、かゝる尖鋭化した滿蘇關係の下に於ては、兩支配圏の

接觸あるにも拘らず、紛争を解決するための國境劃定を實施することは不可能であつた。

しかるに最近、蘇聯の東西兩端にある日獨伊三國同盟の成立は、蘇聯をしてこの樞軸に接近を餘儀なからしめ、又このため従來主要東西交通路として活躍した南海通路の不安發生は、シベリア經由による陸路東西交通線をして新しい意義を持つに至らしめ、これ等の相互の利害關係によつて生じた滿蘇兩國の友好態度は、久しく不可能として放置せられた滿洲西北境の國境劃定を可能ならしめる情勢となつて來た。もしこの兩國の友好態度が通商、交通等の點に於て具體的に實現されるれば、次に來るものは國境劃定と見ても間違ひではないであらう。

第三章 北部國境

第一節 ネルチンスク條約による國境中間

地帯の成立

滿洲の北部國境とは黒龍江による河川國境を指すのであつて、一八五八年の愛璦條約によつて發生し、一八六〇年の北京條約によつて確認されたものであつて、この點で東部國境の發生と關聯してゐて、その記述を切り離すことは適當ではないが、國境の地域的特殊性を明確ならしめるために、特に北部國境の成立過程を述べ、兩國交渉の密接なる地域に就て詳述しようと思ふ。

ロシアがその領土的東進行をバイカル湖附近のブリアート族生活圏の存在のため、方向變換を餘儀なくされ、止むなく、東北行して北極海斜面の抵抗少き地域を進行し、この方面より迂回して外興安嶺を南下、黒龍江中流域の清の勢力圏内に侵入して來たのは十七世紀の中頃のことであつた。

この地方は黒龍江中流域を形成し、北方は外興安嶺（スタノグアイ山脈）を以つて北極海斜面と限り、

南方は小興安嶺を以つて嫩江流域と限り、この盆地地形の南端を黒龍江が東南流し、北方は漠河附近、南方はラズテ附近の峡谷部を以つてその上流部及び下流部と隔絶し、ゼーヤ河、ブレーヤ河等の北方よりの支流を入れ、これ等流域が一大平原となつてゼイスコ・ブレインスカヤ平原とも稱せられ、又黒河盆地と稱せられてゐる。

従つて滿洲中央部を支配した政權も、かゝる自然條件に制限せられて、その支配圏をこの方面に擴大することは困難を伴ひ、勢ひ、滿洲平原の東北—西南方向を推し進めた黒龍江下流域方面にその支配圏を擴大するのを常とし、この黒河盆地方面はダホール人の地方的生活圏が維持されて來た。明代の滿洲支配もこの方向を持ち、この黒河盆地の如き山岳に圍まれたる隔絶地方までは直接の支配力なく、たゞダホール人酋長が名義上、明朝に服屬して官職が與へられ、自己の城寨を衛所として中央部に登録し、その間多少の通貢が行はれてゐたものと考へられる。

この地方に對する實質的支配が試みられたのは、一六一六年太祖の薩哈連部攻略に始まり、一六三九年には索倫部攻略が行はれ、一六五〇年ハバローフがこの方面に侵入した時には、この地方のダホール人等は清に貢納する民族であつたのである。これ等のダホール人の城寨の中、トウ・ローン・ガアと云ふ酋長の城寨が、黒龍江左岸のゼーヤ河口より少し下流にあり、ジョウエ・アイコーと稱せられてゐた。このアイコーとはダホール語で「的」の意味を有し、その地方的中心となつてゐたことが察せられるが、その他この河川沿岸は既にダホール人によつてよく居住せられ、三、四十里毎に可な

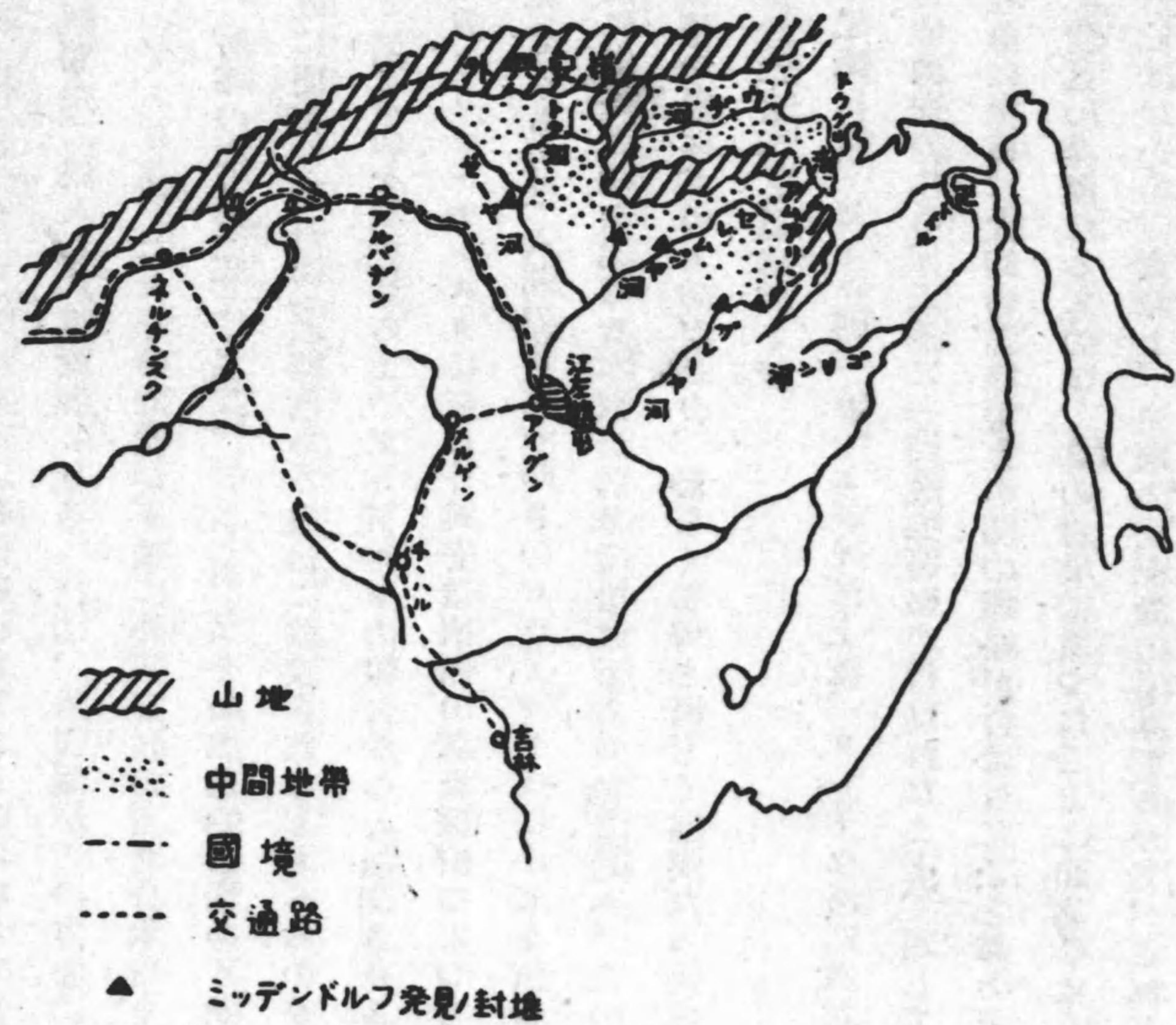
りの防備ある木塼を周らせる城寨があつたと云はれ、アルバチンも彼等の部酋なるラウカイの寨であつたのである。

従つてロシアの南下はこれ等清の勢力圏の外廓を構成せるダホール人の生活圏に侵入し、これをロシアの勢力圏内に收めんと試みたものであつて、これが勢ひに乗じて、黒河盆地を越え、松花江流域に擴大南下するに及んで、高き文化段階にある清の支配圏と接觸し、この争闘に於て一六五八年、完敗し、遂に黒河盆地の維持も危くなり、ロシアの勢力圏を縮小して、黒龍江方面にてはアルバチン、ゼーヤ河上流方面にてはゼイスク（一六七八年建設）等の植民地に迄、退却せざるを得なくなつた。その後、清朝がその南方問題を一時解決するや、北方問題の解決に乗り出し、先づ黒河盆地の支配確保に着手し、一六八二年前述の黒龍江、ゼーヤ河合流點附近のアイコーにその據點をきづき、愛環（艾呼、艾渾、愛渾）と稱し、更にその上流、呼瑪爾に前進據點を置き、その支配圏を固めた。翌年、愛環に將軍を置いて、黒龍江政策の中心とし、ロシア側のネルチンスクと相對せしめたが、この愛環の位置が黒龍江の對岸にあり、吉林方面との連絡に不便があつたので、一六八五年これを右岸の地、ダホールの酋長トルガの城寨のあつたタルギン城に移し、黒龍江城と稱し、舊愛環の地には城守尉を置き、その頃着々實行されてゐたこの方面の旗人屯田の中心地たらしめた。

かゝる背後の整備があつて始めて、アルバチンに於けるロシア勢力排除の争闘が實行出來たのであるが、この戦闘に於て兩國の徹底的な勝負が決定されなかつたことは、大體この位置が兩國の支配圏

の限界であつたことを意味してゐる。従つて、ロシアはシルカ河流域をその支配圏に収め、清國側は黒龍江中流域即ち黒河盆地を確實に自己の支配圏に収めて、一六八九年のネルチンスク會議に於けるロシア側の黒龍江國境、ゼーヤ河國境等の主張を排除して、黒河盆地全域の清國領を承認せしめ、外興安嶺を以つて國境地帯とし、北極海斜面のロシア領との間の分割に成功したのであつた。しかし、この黒龍江中流域の清國の支配程度は、黒龍江沿岸及び、ゼーヤ河合流點附近に限られ、それより奥地の外興安嶺の山岳地帯は直接の支配力の及ばざる中間地帯となつて、ロシア側の支配圏との間を限つてゐた。従つて條約文に於ては、明確に線的國境の如く示されてゐるが、實際は前述の如き漠然たる境界で、又これを以つて満足出来る程度の兩國交渉がこの部分ではあつたに過ぎなかつた。更にこれより下流の黒龍江下流域と、その北方のロシア領との間の交渉は、兩國支配力の中心からの距離が遠いだけに、その政治的支配は一層漠然たるもので、従つて又兩國交渉も殆どなく、その地理的狀態も不明であるので、條約文にも、未劃定地域(ウァイ河流域)として残すことを明記し、中間地帯たることを正式に承認してゐる。

かくて滿洲の北部に漠然ながら國境が発生したのであるが、條約上の外興安嶺の線的な國境も實情は右の如くであるので、近代的國境劃定方式に見られる、線的陸地國境に不可欠な界標設立の如きは、その必要を認めなかつた。従つて條文にもこれを國境劃定の必要條件として記載してゐないのであつて、たゞこれに關して清國側の自由意志に委してゐるのである。康熙末年の柳邊紀略によればこの方



面に界標があつたことが記されてゐる。この位置は現在何處に當るか正確には考定出来ないが、間宮林藏が黒龍江方面より界標調査に侵入した事實等より考へれば、清國側がこの方面に界標を建設したことも無根の事實ではないであらう。たゞその位置が正確に外興安嶺の南北分水嶺上にあつたか否かが問題となるのであるが、前述の如き漠然たる國境にして而も、その地理的事情の不明確な當時に於ては、恐らく清國側より接近に便利な南斜面の、特色ある山岳に建設されたと考へるのが妥當と信ずる。

この事は一八四四年、この方面を調査せるミッテンドルフの報告からも推測される。彼の報告によると、この年ウディ河地方よりネルチンスクに至る外興安嶺南側の調査探検によつて六箇所の界標を發見し、その中彼の實見せるものは人間の脊位の高さのピラミッド式に小石を積み重ねた石壘であつて、その附近の木の枝に巡察記録を記せる木板が馬毛で掛けてあつたと云ふ。この記述から考へると、この界標は蒙古の鄂博を思はせるものがあり、恐らく鄂博と同じく空漠たる邊境地帯巡察の通路を印づける道標の役をなしたものと思はれる。

これに關する清國側の記録には、ゼーヤ河、セレムジャ河上流、ブレーヤ河に六封堆があつたことが明かにせられ、この封堆調査のため、三年に一回邊境巡察が行はれたこと、而して、その巡察證明のため、その記録を封堆中に埋め、次回の巡察者との間の連絡が行はれたこと等の記載があるので、前述のミッテンドルフの發見の界標なるものは、この封堆であつたことは間違ひはない。従つて嚴密には界標と稱すべきものではないが、實際上、清國の支配圏の限界であつて、これより外興安嶺の山

地に至る間は中間地帯であつたのである。かゝる漠然たる境界地帯を以つて二百年近くも満足出來たのは、兩國の支配力が邊疆まで完全に及ばざる前時代的な關係にあつたがためであつて、露清何れかが早く近代國家に成長した時に、當然この中間地帯の存在は不合理なものとなり、優勢なる近代國家の支配圏と化して、新しい線的國境が出現するは明かなことである。この場合、もし隣接國家が同等の程度に近代化したならば、この中間地帯の分割が行はれたであらうが、この露清關係の場合、前者の様式を採り、遂に黒龍江國境の出現となつたのである。

第二節 國境中間地帯へのロシア支配圏の擴大

十九世紀の初頭より急速に近代化の道程にあつたロシアは、ミッテンドルフの報告により、この國境界標が今迄、條約上より考へられてゐた外興安嶺より遙かに南方の黒龍江斜面にあるを知り、黒龍江中流域にその支配圏を擴大せんと考慮するに至り、時の皇帝ニコライ一世の極東發展熱を昂めた。茲に於て皇帝は、政府主腦部の反對を押し切つて、一八四七年、ムラヴィエフを東シベリア總督に任じ、積極政策を採らしめた。かくて一八五〇年夏より、五三年の間に、オホーツク海沿岸より南下せる探検隊は、早くも黒龍江口沿岸一帯の占領を完成した。

然るにロシア外務當局はこの第一線方面の活動の事實を無視して、一八五三年直接清朝に對し、外興安嶺の國境地帯に兩國共同の界標を建設して國境を明確にし、又沿海の未劃定地方の劃界をせん事を提案してゐるが、これに對し清朝側はケルベチ河岸の黒龍江左岸に國界標を立てんと回答してゐる。しかしその翌年（一八五四年）クリミア戰爭の勃發は、黒龍江地方のロシア新植民地が英國艦隊による攻撃の脅威に曝される情勢を誘致し、ロシアとしてはこの地方と本國との急速なる連絡のため黒龍江の航行を確保する必要に迫られた。ために清國の反對にも拘らず、ムラヴィエフはこの五月第一回黒龍江遠征隊總員一千名の強行下航を實行した。これは明かに條約上、清國の國內河川を航行した不法行爲ではあるが、この航行により清朝の邊境に於ける支配力と、その清國領土と稱する地方の空漠たる實態を認識したのであつた。

たゞこの黒龍江流域で明確に清朝の支配が確立されてゐたのはゼーヤ河合流點附近のみであつて、ゼーヤ河（黃河）口右岸に黃河屯、その對岸の黒龍江右岸に大黒河屯（アンバ・サハリン）、少し下流の黒龍江左岸に舊愛琿及び旗人聚落が多數散在し、これ等の地を右岸の黒龍江城（愛琿）駐在の副都統が統括してゐたのである。従つて、この地方は黒龍江中流域に於て最も重要位置を占め、ロシア側にとつては、この地方の奪取は、黒龍江口地方の確保とともに黒龍江政策の根本となつてゐたのである。果して一八五五年九月マリンスクに於ける國境劃定の交渉に當つて、ロシア側は次の二項の國境に關する提案をした。

(1) 第三國の海上よりの攻撃を防ぐためにロシアが占領した黒龍江口の全地域及び全海岸はロシア領とすべきである。

(2) 黒龍江口地方の城砦と内陸地方との年中完全なる交通を確保するためには（陸路は山地のため實際上この目的を達せられない）黒龍江の左岸に植民地を連續的に建設する必要がある。この黒龍江こそ兩帝國間の最良なる自然國境を形成する。この方法によつて東部シベリアは海上よりの攻撃から保護され、露清兩國間の紛争は將來解消されるものと信ずる。

この二項は口頭を以つて述べられたが、清國側は正式文書の提出を要求し、國境討議の範圍はネルチンスク條約にて未劃定に残されたウディ河地方に限るべきことを主張し、遂にこの會議は流會となつて終つた。しかし、このロシア側の提案によつて、前述の黒龍江政策の基本方針が明かにせられたのであつて、第一項は黒龍江口地方の確保を要求したものであり、第二項はこの地方を維持するための黒龍江水路の保持を要求したもので、このために必要な黒龍江沿岸の植民地建設要求の主要目標がゼーヤ河合流點附近、ウスリー河合流點附近にあつたことは疑ひを入れない。

この交渉は何等國境に關して解決を見ず終つたが、ロシア側は着々この方針を實行に移し、一八五六年五月、ムラヴィエフは第三回遠征隊を組織して黒龍江を下航し、愛琿副都統に對し、江左岸に部隊駐屯所及び糧食貯藏所を設置すべきことを告げ、黒龍江中流域に四箇處のコサック屯營地を設立し、その中ゼーヤ河口の黃河屯にウストゼイスクの營所を置き守備兵五十名を駐屯せしめたが、翌年第四

回遠征隊の下航に際し此處に第十四歩兵大隊及び砲兵支隊を置き萬一に備へた。當時清國側より海蘭泡（海蘭は滿洲語で楡の木の意）と稱せられてゐたこの地に、ロシアが植民地を建設したので、抗議を發してゐるが、何等その効果がなかつた。

かゝるロシアの實質的進出を見て、古い國境條約を以つてしてはこれを防止出来ないことを悟り、清朝當局も早急に國境を劃定して置くことが必要であることを認識するに至つた。しかしこの時に及んでも、表面上はネルチンスク條約を基本とし、たゞ前述の如く、ウディ河附近の未劃定部分のみを問題とすべき事を述べてゐるのは、面子上の問題としても注目し得る處であつて、これが結局黒龍江口地方の所屬の問題に發展し、更に黒龍江左岸流域の所屬問題に擴大して終つたのである。

そこでロシア側でもこの問題を正式に解決するために一八五七年、ブーチャチンを特使に任じ北京に派遣したが、陸路より入京を拒絶され、海路白河口に至つたが此處に於てもその目的を達せず、上海に走り、英米佛三國代表の北上の機會に共に北京に入ることが出来た。かくて一八五八年（咸豐八年二月）北京滞在中の黒龍江將軍奕山と會見し、「外興安嶺は直ちに海に達してゐるのではないから、ネルチンスク條約の如く兩國の邊界とすることは不適當である。故に黒龍江左岸を以つてロシア領とすべきである」と交渉を行つたのであつたが、奕山は斷然これをしりぞけ「該地方は清朝の領土であり、打牲人等の居住する處である」と居住民族上より對抗したのであつた。これは政治地理學上より考へる時、興味深き論據であつて、その主目的とするところは、愛琿對岸の江左旗屯の確保にあつた

ものと思はれるが、これに對してブーチャチンは「その左岸の滿漢人は悉く右岸に移すべし」と返答し、その間何等の意見の一致も見ること出来なかつた。かゝる清國側の情勢を察知したブーチャチンは、清國の面上上よりも、國際關係の紛糾せる京津地方の如き中心地帯にて劃界交渉を行ふことの不適當を考へ、この旨、本國に通知して、現地に於て交渉すべきことを進言した。

第三節 黒龍江國境の發生と政治經濟的中間地帯の殘存

現地解決の命を受けたムラヴィエフは一八五八年四月、一萬餘の移民を従へ第五回の下航の途次、愛琿に立ち寄り、黒龍江將軍奕山と會見して、黒龍江政策の根本問題を正式に解決せんとした。これは前々よりの交渉にてロシア側の提出した要求であつて、黒龍江口地方（これは主として黒龍江南岸を占めてゐることは注意を要する）の確保と、黒龍江水路の獲得であり、この目的のために數年來、黒龍江左岸の要地への植民地建設が行はれ、以つてロシア支配圏の事實設定を急いだのであつた。たゞこの場合最も問題となるものは、愛琿對岸の江左旗屯に於ける清國側支配圏の存在であつた。

従つてこの愛琿會談の最初にロシア側より提出した要求に於ては、黒龍江水路獲得のために黒龍江

國境を主張し、このため黒龍江南岸にある江口地方が清國領となることを防ぐためにウスリー江國境を主張し、黒龍江國境設定の障碍となる江左旗屯は右岸に移住するを主張した。これに對して清國側は反對し、ロシア側の左岸の根據地の撤去を要求した。そこでロシア側も少しく讓歩して、江左旗屯の現状維持を承認することを提案した。清國側は尙も反對を續けたが、ロシア側の武力威嚇に逢ひ、遂にこれを承認するの止むなきに至り、成豐八年四月十六日(西曆一八五八年五月二十八日)調印が行はれ、茲に滿洲北部の黒龍江國境が発生するに至つたのである。

突山の中央に對する報告には、「左岸空曠の地にロシア人の居住を許した」と稱し、僅かに江左旗屯の現状維持成功を以つて黒龍江國境の自己辯護を試み、又ウスリー江東の地域に就ては、吉林將軍の管轄下にあることを理由に「兩國共營の地」として問題を將來に残し、ネルチンスク條約に於けるウヂイ河流域の條項の如く、將來、再び國境劃定交渉を要する禍根を残すこととなつた。

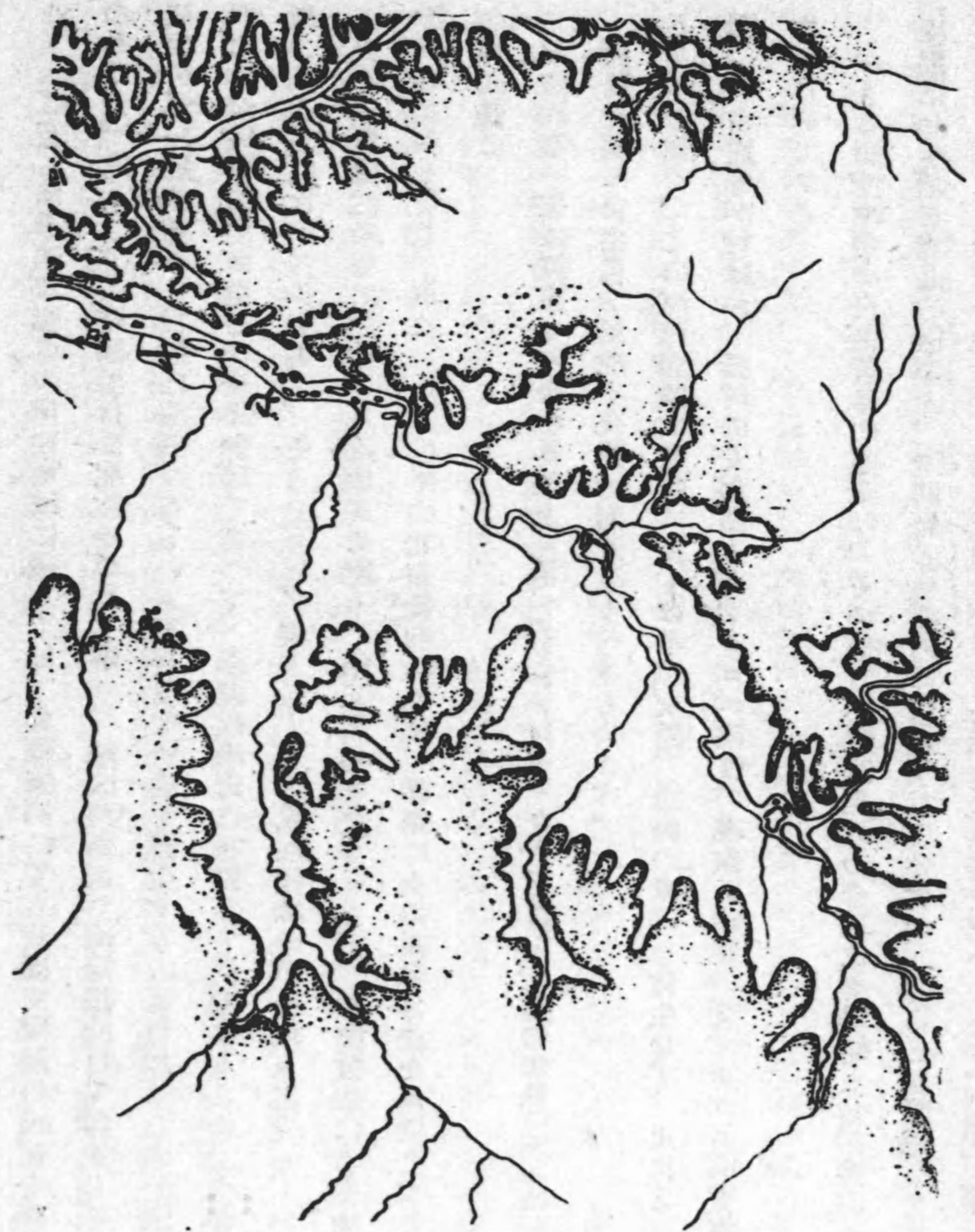
かくて五月十六日(露曆)締結の愛理條約によつて黒龍江左岸の地がロシア領と決定されるや、ムラヴィエフは五月二十一日早くも、この成功を記念して、ゼーヤ河口のウストゼイスク(黃河屯、海蘭泡)にブラゴウエシチエンスク(良い便りの意)と命名し、アムール植民政治上の根據地建設の礎石を置いたのであつた。かく黒龍江左岸のロシア支配圏の事實設定に種々方法が試みられ、特にコサック移民の移植等の方法も行はれたが、これは大體、この地方が土着の原始民族の散在があつたに過ぎない空漠たる未開地域であつたから實行出來た方策であつて、この點、ゼーヤ河口より下流左岸ホルモ

ルジンに至る所謂江左旗屯の所在地域に關しては、愛理條約にても清國支配圏の残存を許さざるを得なかつた。しかし他の全國境は黒龍江を以つて限り、茲に舊來より兩岸相助けて發達して來た黒龍江流域の單一經濟圏を人爲的に分割するといふ不合理な状態を發生するに至つた。この一例はブラゴエ對岸の清國領の黒河屯との交渉制限であつて、黒龍江兩岸に相對して位置するこの二つの渡場町を分割することになつたのである。そこでロシア側としても黒龍江國境の不合理を自覺し、本條約第二條に於て、「黒龍江沿岸に居住する兩國民に對して相互貿易を許す」とて、國境發生による地方的生活の障碍の緩和を策し、更に一八六〇年の北京條約にては、詳細にその緩和方法を規定してゐる。即ちその第四條に、

本條約第一條に設定せる全境界線上(註、アムール河シムカ河合流點より圖們江口に至る間)に於ては兩國臣民間に自由且つ免税の交換通商許さるべきものとす。

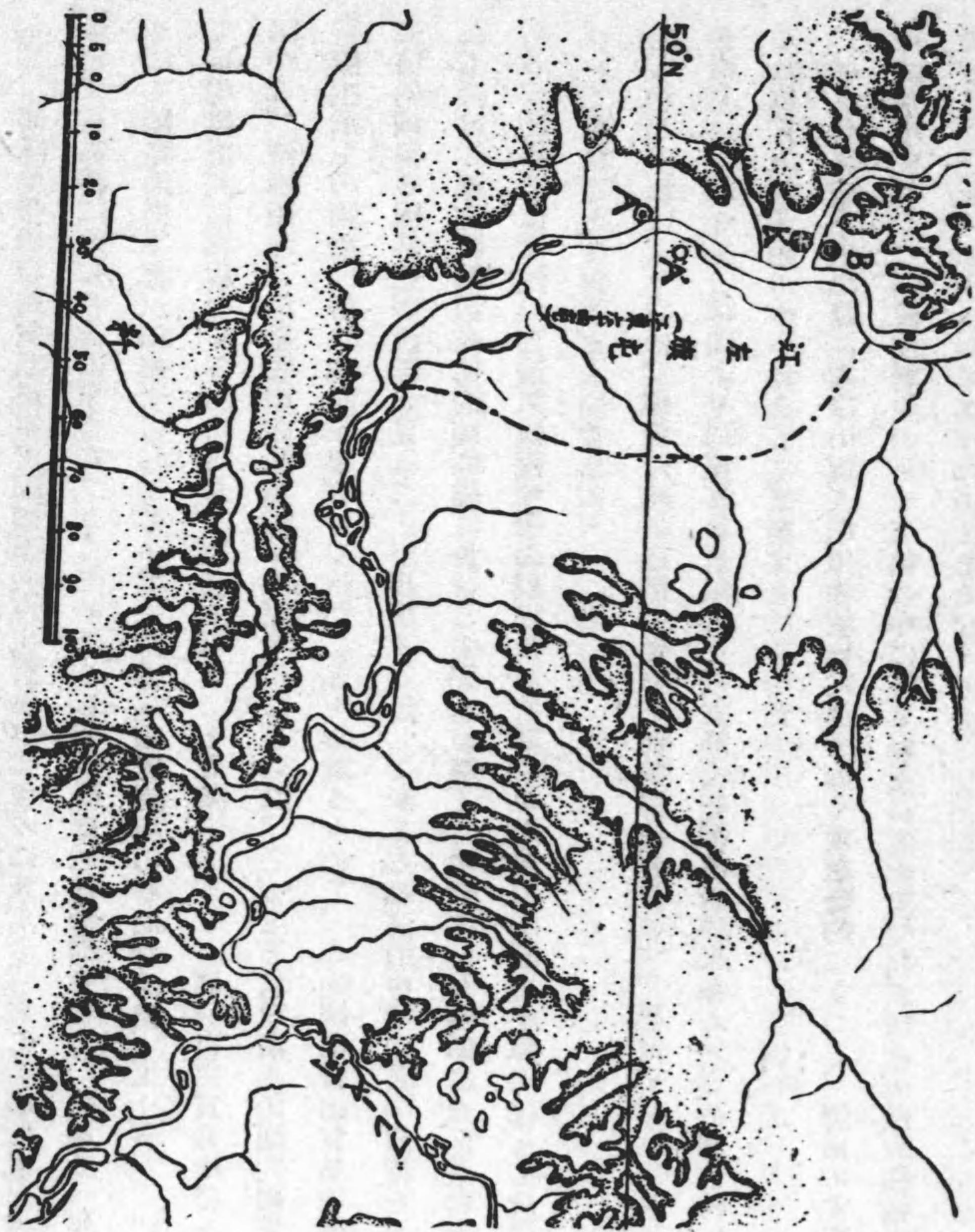
とあるが如く、この河川國境は當時に於ては全然交通、通商の障碍を發生せず、黒河とブラゴエとの間に自由通商が行はれ、黒河の支那商人のブラゴエ往復の現象も起り、又ブラゴエの支那町發達ともなつたのである。

かゝる國境地帯の自由貿易の規定は、その他方的經濟生活の合理化を目標とし、特にロシア側の國境都市の生活必需品の需要上、清國側の生産力に依存すること大なりしことを證據立てるものであるが、この國境地帯の隔離性が次第に消滅して、中央部との連絡が完全となり、兩支配圏が各自單一化



A 雲輝(黒龍江城、サハリン・ウラ・ホートン。明代ダホール族酋長トルガのタルギン城)

A' 舊雲輝(変源、雲輝。明代ダホール族酋長トウ・ロイン・ガアのジヨウエ・アイコー城。現在ガニクルガンと稱せらる)



B プラゴウエシチエンスク(ウスト・ゼイスク。黄河屯。海關池)

K 黒河(アンバ・サハリン、大黒河屯)

して、國境地帯の自由貿易が兩支配圏間の自由貿易と化するに及んで、更にこの國境自由貿易地帯を限定する必要に迫らるゝに至つた。かくて一八六二年の陸路通商條約を経て、一八八一年ペテルブルクにて陸路通商章程が締結せられ、その第一條に「兩國國境の各側百清里（五十露里）の地帯内に於ては兩國臣民に課税せらるゝことなく貿易を爲すことを得」とあり、國境自由貿易地帯を從來の無制限から、國境兩側百清里間の帶狀地域に限定するに至つた。このことは政治上の線的國境に對して、實際生活上の國境は帶狀國境を要求してゐたことを物語るもので、この國境自由貿易地帯の設定も、經濟的國境中間地帯の設置と見ることが出来る。而してかゝる經濟的中間地帯の設置を可能ならしめたものは、兩支配圏の政治的國境線に於ける支配力が弱く、尖鋭化した關係になかつたといふ事實である。陸路通商章程の百清里無税地帯の制限は、次第に中央部の支配力が強力化して政治的國境に近づいて來たことを物語るものである。

しかしこれによりては、國境沿線の生活は從來と何等變化を受けず、黒河もブラゴエも從來の關係をつゞけ、却つてこの頃より以後砂金景氣により支那人労働者の往來多く、この兩市特にブラゴエはこれ等苦力の活動の中心地として繁榮するに至つた。

ブラゴエ南方の黒龍江左岸の旗人屯田地域は前述の如く愛琿條約によつて、清國の支配圏として國際的飛地の如く、黒龍江對岸のロシア領の中に殘されることとなつたが、その法的性格を條約上より考察すると次の如きものであつたのである。

愛琿條約第一條に「黒龍江左岸の地をロシア帝國所屬の地となし」と記し、その末尾に、

黒龍江左岸ゼーヤ河より以南ホルモルジンに至る原住の滿洲人民は舊の如く、永遠に其住する處に屯し、滿洲政府の管轄の下にあるべく（下略）

と記してゐる。従つてこの條文から見ると、「黒龍江左岸の地をロシア帝國所屬の地となし」といふ前提があるのであるから、江左旗屯居住の人民の「滿洲政府の管轄」の承認があるとしても、これは領土權を承認したものでなく、治外法權の承認に近きものを思はしめるが、地域的規定があるところより見ると租界の如き性格を持つたものと見ることが出来る。

しかるに一八六〇年の北京條約にては、この地域的規定も無くなつて了つてゐる。これは、この條約が前述の愛琿條約を全面的に確認したために、更めてこれを條文に記入する必要を認めなかつたためと考へられる。即ちその第一條に「黒龍江の左岸に位する土地はロシア帝國に屬し」と記し、その末尾に、

上記の場所に於て清國臣民の植民せる地ある場合にはロシア政府は住民を其の地に留置し、舊來の如く漁獵に従事することを許可すべきを約す。

と、全國境沿線居住の清國臣民に對する一般的规定があるに過ぎない。

従つて實際には愛琿條約の條項によつて、この地域に關する處理が行はれ、一八八〇年には黒龍江副都統とロシア側委員との間に、この地域の劃界が行はれ、一八八三年にも實施せられ、一八八九年

にはその境界に溝をつくり、これを犁界と稱した。従つてかゝる「清國政府管轄」の地域的限制をロシア政府が承認してゐる事實がある以上、この特殊地域は租界と同様のものと見て間違ひはないものと思ふ。

この當時の實情に就ては、一八七八年、この地を旅行した榎本武揚の「シベリア日記」に、此「ゼヤ」の河口に滿人の村落あり、愛琿城の約前より「アムール」左岸に住居したる者にて今尙依然魯地にありて支那の版籍に屬する者なり、此種の民現に魯領内に在る者殆んど七八千人もありと云ふ。而て其の村落及附屬の地は其民の所有物なるを以て魯政府は下手する能はず、魯商等此地に譬へば家屋を建てんと欲するときは愛琿の鎮臺に許可を受けたる後にあらざれば能はずと云ふ、とあり、これ恐らくロシア官吏の説明によつて記したものであると思はれ、よくその租界的性格を表してゐる。

一八八七年この方面を旅行した永山少將の「周遊日記」にて、ブラゴエにてこの地域に關する質問をしたるに對し、

軍務縣令參謀少將ビネフスキー曰く、清人多く居住し、露領にあるもの一萬五千口にして其管理の法律は皆清國の直轄に屬し、清國は恰も露領内に治外法權を持つが如し

と答へたと記してゐる。これ當時のロシア當局がこの地域に關して如何なる見解を持つてゐるかを推定せしむるに足る。

第四節 河川國境に於ける近代的國境關係

への發展

一八五八年の愛琿條約より一九〇〇年の義和團の亂の突發に至る間の十九世紀後半に於ては、黑龍江國境は完全に兩支配圈を分割する國境とは云ひ得ない状態にあり、經濟的にも政治的にも明確なる分割が行はれてゐなかつたことが推定される。更に原則的に見て、河川國境は隣國侵略の暫停状態を示す點より考へれば、早晚、ロシアがこの國境を越えて滿洲にその支配圈を擴大すべきことは充分豫期せらるゝものであつた。

果して一九〇〇年、義和團の亂の影響が滿洲に波及するや、遂に江左旗屯の清國特殊地域を奪取し、更に對岸清國領の占領が行はれ、この地帯全般がロシアの支配圈に歸し、黑龍江國境の意義を喪失し、出先當局の一部には、この際國境を小興安嶺に押し進め、黑龍江兩岸流域のロシア支配圈確立が主張せられた程であつた。

しかしロシア側は日露戦争の失敗によつて、全面的に滿洲より退却するを餘儀なくされ、これに代つて清國の支配圈が再び擴大して、法的國境までその支配を恢復するに至つた。即ち、一九〇七年、姚福升は愛琿副都統として着任し、當時未だ完全に撤兵を完了して居なかつた江右地方を回收し、黑

龍江が再び兩國の國境たる實をあぐるに至つたが、江左旗屯の特殊地域恢復に關しては、清國側の再三の交渉にも拘らず、ロシア側は事重大なりと稱してこれを許さなかつた。

かくて黒龍江は實質的に兩國支配圏の限界たる實をあぐるに至り、國境としての制限が加はるに至つた。即ち従來自由に國境交通が行はれてゐたが、一九〇九年より、兩岸百清里以内の交通にも旅券を必要とすることとなり（華票、有効期間一箇月及び三日、ロシア票有効期間一年及び若干日）、百清里以外の旅行者にも別に旅券必要の制限が行はるゝに至つた。しかし、この百清里以内の交通には回数に限らざる國境通過權が附與せられてゐたので、旅券の査照さへ受ければ従來と殆ど同様に自由に交通が出来、アラゴエ居住の苦力が黒河の娛樂地に往復するといふ現象も出来て來たのである。

しかしかゝる交通の部分的制限は次第に經濟的制限に轉化する傾向を示して來た。先づ百清里無稅貿易地帯の嚴守であつて、従來、陸路通商章程によつて法的に國境兩側百清里の地域が限定されてゐたが、實際上これに對する施設がなかつたものの如く、この無稅地帯を通過して國內に物資が自由に流入してゐたと見られる。そこで一九〇九年、南滿の關東州に對する稅關設置に比較し、北滿國境に無稅地帯の存在することは均衡を失するとの日本よりの交渉に刺戟されて、清國側は先づ無稅地帯百清里外に出づる輸入貨物取扱ひのため愛環に稅關を開き、大黒河に稅關出張所を置くこととなつた。

その後一九一一年に至り清國政府は更にロシアに對し、國境無稅地帯の廢止を要求した。その理由とする處は、殆ど住民なき時代に定められた國境無稅地帯の存在は、國境に多數住民の生活する聚落

増加せる現在に於ては多くの矛盾を含んでゐるといふにあり、これ結局、國境地帯が兩國の他地方との交通が少く、隔離してたゞ國境に沿へる兩國住民間の交通通商のみ行はれてゐた時代は、國境無稅地帯の存在が大いにその效力を發揮し、國境による兩經濟地帯の分割力を緩和してゐたが、この國境地帯が兩國の本土との間に密接な交通連絡が出来、物資の移動が盛んに行はれるに及んで矛盾を生じ、廢止の必要が現れて來たことを物語つてゐる。この清國政府の要求に従つて一九一三年にロシア側は先づその無稅地帯を撤廢、翌年支那側の撤廢となり、茲に兩國國境は、政治上よりも經濟上よりも完全中間地帯を消滅して、黒龍江を挾んで兩支配圏が對立することとなつた。

しかるに世界大戰及びそれに續くロシア革命は、ロシア側の支配力減退となり、再びこの地方の國境の意義が低くなり、黒龍江兩岸の交通が自由となり、黒河はシベリア奥地への物資供給地として重要性を加へ、我が國のシベリア出兵當時、日本人の居住者も數百人に達し、その總人口も五萬に達する殷賑ぶりであつた。

その後蘇聯政權がシベリアに再建せらるゝに及んで、その支配力は國境にまで及び、新興國民政府の援助によつて強化化する東北政權の支配力と相對することとなつた。しかし蘇聯政權が國內統一に忙殺され、その對外的政策の消極的なるに乗じ、支那側は黒龍江下流航行權問題、江左旗屯特殊地域の回收問題等の交渉が行はれたが、常にロシア側の遷延策に逢つて、何等の解決も見ることが出来なかつた。その上、蘇聯の鎖國主義は、國境交通を杜絶せしめ、たゞその貿易代表機關なる極東貿易公

司を黒河に置き、ブラゴエより黒河への輸入品を取扱ふに過ぎない状態となつてゐたが、近代國家滿洲國の出現に引きつゞき、北黒線開通、哈黒間の水運の發達により、日本品の流入に逢ひ、遂に康徳二年これを閉鎖し、こゝに全然交通も杜絶するに至つた。

かくて十九世紀半頃、滿洲北部の黒龍江國境發生以來、兩國の政治的支配力強化に従つて、次第にこの兩側に擴がる政治的、經濟的中間地帯は縮小し、黒龍江域國境にまで接近して來たが、滿蘇兩國の近代的國境關係に入るに至つて、遂にこの河川國境の中に更に線的國境を確定しなければ解決出來ないやうな、河中洲問題を發生するに至つた。かゝる紛争を解決して、兩國合意の國境が劃定されるためには、先づ兩國の友好的基礎が確立されねばならない。この具體的表現は、現在不自然に分割封鎖の行はれてゐるこの方面國境の交通、貿易の再開であらう。

第四章 東部國境

第一節 ネルチンスク條約の未劃定中間地帯

へのロシア支配圏の擴大

滿洲の東部國境とは黒龍江ウスリー江合流點より、圖們江口に至る間の國境であつて、北部はウスリー江、スンガチャ河、興凱湖を以つて國境とし、中部以南は山嶺國境を形成してゐる。

この方面に國境を發生するに至つた直接の原因は一八五八年の愛理條約にあるのであるが、これを發展的に見れば、一六八九年のネルチンスク條約にその遠因があつたと云ふことが出来る。即ち、外興安嶺より東方海に至る間のウディ河地方を、この條約で未劃定に残したことは、十九世紀の近代國家ロシアの極東への再進出に當り、その表面上の口實を與へる結果となつたのである。この條項あればこそ、未劃定の東海岸地方即ち黒龍江口地方の占領が先づ行はれ、これを清國に承諾せしむるために、劃界交渉を開催するの根據たらしめ、清國としても無下にこれを拒否するを得ざらしたためたのであ

る。

かくて開催せられた一八五五年のマリンスクの會議に於て、「ロシアが占領した黒龍江口の全地域及び全海岸」のロシア領の承認が先づ清國に對して求められたのである。この際、提案された第二の要求は黒龍江國境の主張であるが、これと第一の要求とを分離して提案した理由は、兩者の間に地域的な矛盾があつたがためと察せられる。即ち、ロシア占領の黒龍江口地域とは、キジ湖より下流の黒龍江右岸一帯であつて、もし第二要求の黒龍江國境のみを以つて限れば、この右岸の黒龍江口地域は清國領となつて終ふからである。この點から考へると、ロシア側の要求が二項に分けられたことは、黒龍江は國境とするも黒龍江口地域のみはその右岸もロシア領たることを承認せしめんとしたものと推測される。従つてもし、黒龍江がキジ湖より直接間官海峡に注いでゐたならば、ロシアをして黒龍江右岸を領有せんとする口實を與へることもなかつたであらう。

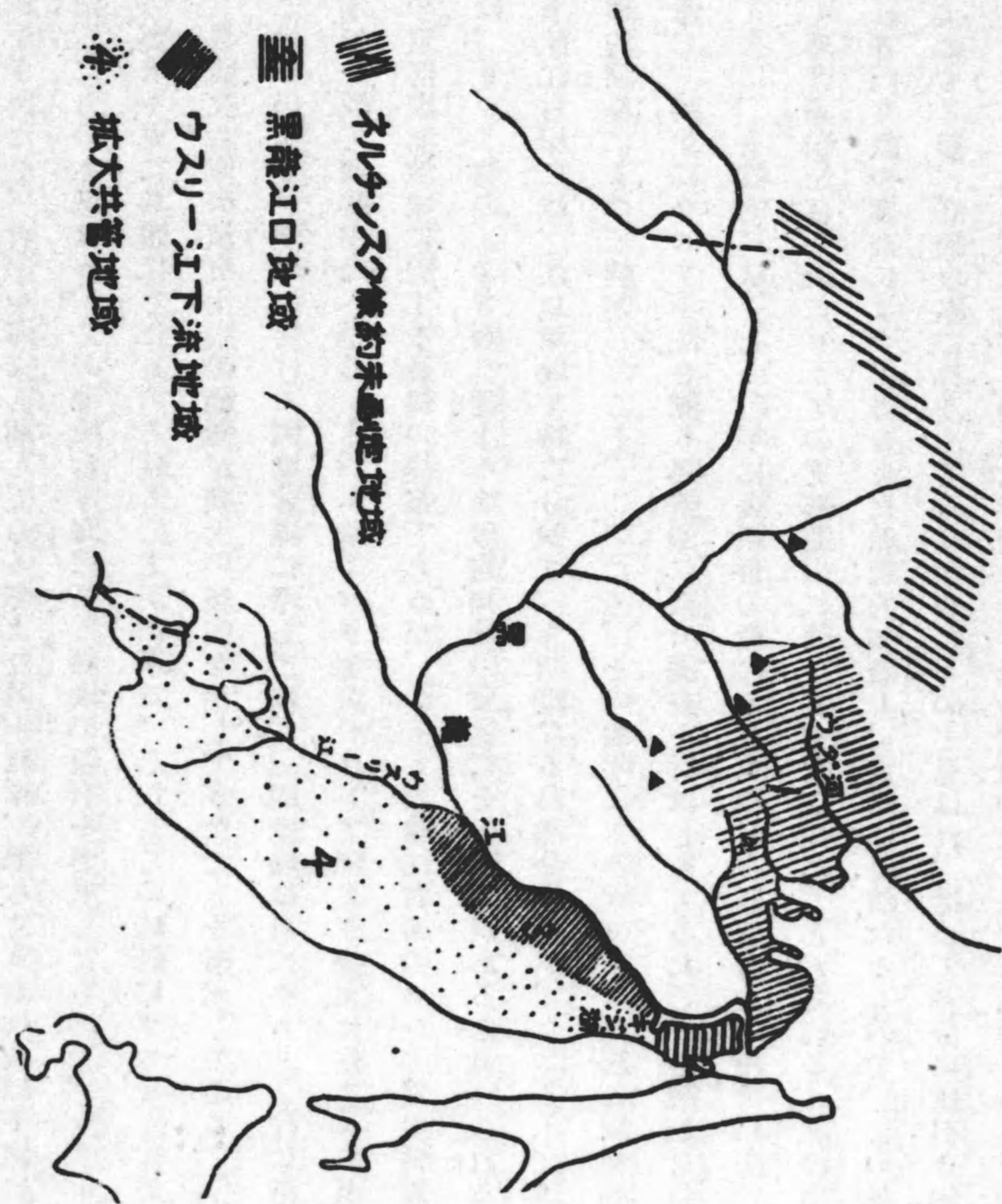
とにかく、このマリンスク會議で始めて、部分的にしる、黒龍江右岸の領有要求が公けにせられたのであつて、この會議流會後も、ロシア側はこの方針を着々實行に移し、先づ一八五六年には、この地方を新しくカムチャッカ、オホーツク海沿岸より成立せる沿海州の一部たらしめ、翌年には黒龍江口のニコライエフスクに沿海州の中心を置くに至つた。

一八五八年の初春、北京に於て行はれた黒龍江將軍奕山と、露使ブーチヤチンとの交渉に際し、ロシア側より「ウスリー江より下流（黒龍江）に於ては、右岸の海岸を以つて境界となす」といふ注目す

べき提案がなされたが、右岸を海岸と稱してゐる點より考へれば、恐らくキジ地峽以下海に至る黒龍江口域を指したものと思はれ、この地域右岸海に至る地域の領有を要求したもので、マリンスク會議の第一の要求を更に具體化したものと見ることが出来る。しかしこの時既にウスリー江の地名の出たことは、黒龍江右岸の領有主張の範圍が擴大の傾向を示して來たことを暗示してゐる。

かくてこの年の初夏、愛琿に於ける國境會議に際しては、「國境線は更にウスリー江に沿うて南へ延びその水源を経て朝鮮半島へ至る」といふ驚くべき要求がロシア側より提案せらるゝに至つた。これは現在の東部國境地域に關する最初の提案であるが、かくも黒龍江右岸のロシア領主張區域が擴大したことは、ロシア側のこの方面に關する地理的知識の發展にその原因があると考へられる。

即ち、黒龍江右岸には、江口地域を特に分割すべき明瞭なる自然分界線が、ウスリー江以外にないことが地理的調査によつて判明したこと、このため、その前年にムラヴィエフは既に測地學者ウソリツェフに命じ、祕かにウスリー江を溯り興凱湖に至る調査を行はしめてゐたことを想起せねばならない。これと共に、全般的には一七一〇年に康熙帝の命により測圖せる耶蘇會士の報告に基けるダンヅイルの新支那帝國圖が百年後にロシアの支那進出に圖らずも役立つことも忘れることは出来ない。しかしこれ等の文獻や調査によつて得られた地理的知識も、實際は漠然たるもので、この地方の獲得を強硬に主張する程、詳細な點には及んでゐなかつたものと思はれ、従つて多分に駈引き的な氣分を含み、恐らくロシア側としても、この要求が僅か二年後に實現されようとは思つてゐなかつたであら



う。結局、この當時としては、キジ湖より下流海に至る間の黒龍江右岸を得ることが、ロシア側主張の根本であつたと考へられる。従つてもしこの時、清國側がこの事情を察して、ロシア占領下の黒龍江口地域を明確にロシア領とする承認を與へたならば、ロシアの南下を一時でも防ぎ得たであらう。

しかるにこの方面の地理に暗き清國側は、黒龍江右岸割譲に對する責任回避を試み、この方面が吉林將軍の管轄下にあるを理由として、

…右岸…由烏蘇里河往彼至海所有之地…作爲兩國共管之地（滿文漢譯）
 ウスリー江より海に至る間の地は…共有領域となす（露文譯文）

との條文に調印して終つた。これと云ふのも清國側代表の無力の結果であるが、この無力の基礎となつたものは、その代表部に充分地理的知識を與へる程の、強力な清國の政治的支配力がこの方面に及んでゐなかつたからであつて、ここでは清國側代表部も自國領を強硬に主張することも出来なかつたであらう。即ち當時に於ける清國側の支配としては、黒龍江下流域に於てウスリー江合流點に哨所があつたに過ぎず、それより下流は季節的な支配が行はれたに過ぎない状態で、この點から考へるとロシア側の主張は清國の支配圏に關する充分なる調査に基礎を置いてゐたものと見ることが出来る。

この共管地域の條文は至つて不明瞭であるが、この漢譯條文の「ウスリー江より彼方（下流を指す）海に至る地」とは、如何に考へても、ウスリー江口より黒龍江の注入する海に至る黒龍江右岸流域とより以外に解することは出来ない。この點、ロシア文譯文の方は一層不明確で、前述の漢譯文と同じ

にも解せられるが、現に一般に考へられてゐる如く、ウスリー江より南方の日本海に至る間の地とも解せられ、茲にロシアの作意が藏せられてゐたことが察せられるが、その明確なる範圍に對しては、ロシア側としてもその當時は正確な認識はなかつたものと思はれる。従つてこの條項に關しては兩國の合意が成立してゐたとは考へられず、清國側はウスリー江より下流の黒龍江右岸流域と考へてこの共管地域に承認を與へ、ロシア側はウスリー江より南下を意圖して、範圍不明の共管地域を成立せしめ、ネルチンスク條約のウディ河流域の如き未劃定な中間地帯を残して、ロシアの南下に口實を與へることとなつたのである。もし、この時、露清兩國の邊疆に於ける政治的支配力が相等しかつたならば、この中間地帯に兩者の支配圏が擴大して、その接觸する地域に於て國境が発生し、中間地帯の分割が行はれたであらうが、不幸にも清國側には、ウスリー江を越えてその支配圏を擴大するが如き餘力がなかつたために、ロシア側の一方的な支配圏の擴大となつて終つたのである。

第二節 愛琿條約の共管中間地帯へのロシア支配圏の擴大

愛琿條約によつて、この不明瞭な中間地帯が兩國の共管地域と決定されるや否や（調印露曆五月十六日）、かねてムラヴィエフよりウスリー江流域調査の命を受けてゐたウエニコフ大尉の調査隊は、六月

十三日には早くもウスリー江口を出發して溯江を開始しこの水源を極め、八月四日には、ロシア調査隊として始めてシホタ・アリン山脈を横斷して聖ウラジミル灣に達したのであつた。この調査隊はダシヴィルの地圖に従つて行つたものの如く、これが實際に最も近い地圖であることを知つたとその手記に書いてゐるが、この當時の地理的知識の程度を知ることが出来る。かゝる地理的調査を行ふ一方、ロシア側はその政治的支配圏を着々擴大し、ウスリー江口にはハバロフカを建設し、ウスリー江及びスガチャ河沿岸にコサツクの營所を設置するといふ有様であつた。

更にロシア側は、天津條約第九條の「未劃定國境の現地調査」の條項を根據に、綏芬ウスリー地方測量の許可を清國地方官に公然と要求するに至つた。天津條約は愛琿條約の調印より遅れること二週間、一八五八年六月一日天津に於て調印せられたものであつて、兩條約は表面上、關係がなく、従つて、天津條約の第九條の未劃定國境も、ネルチンスク條約のウディ河地域の未劃定國境を指したものと解せられる。しかるにロシア側は、これを愛琿條約の共管地域の境界と解して、その現地調査を要求するに至つたのである。しかるにこの交渉に當れる副都統吉拉明阿は、ウスリー江の正確なる位置に關しては認識なく、ウディ河と混同して、簡単にロシア側に現地調査の許可を與へて終つたのである。

愛琿條約の調印當時、承認を與へてゐた清朝當局も、その後のロシア側の行動によつて、この共管地域は清國側が理解してゐた黒龍江下流域に非ずして、實はウスリー綏芬方面を含む地域を指してゐる。

たといふロシア側の眞意が判明して来るに従つて、三姓、寧古塔の支配圏に接近して来る危機を察知し、この條約を否認するの態度に傾いて來てゐた。従つてこの方面のロシア側調査に許可を與へたとの報告が中央に達するや、その激怒するところとなり、清朝當局はその責任者吉拉明阿を罰して、愛琿條約に對する政府の態度を明かにし、この條約の調印者突山も「吉林の地理を明悉せず」との理由で免職し、「ウスリー江及び綏芬河沿岸の地は如何なる事情あるも讓渡不可能なる」ことをロシア側に通告するに至つた。

しかしこれ等の清國側の挑戰的政策も、既定の方針を以つて着々その支配圏を共營地域に擴大しつつあるロシアの大勢には何等その効力なく、この漸定的な共管地域の運命は決定的のものとなり、ただその境界の劃定が殘された問題となつてゐた。

即ち、ウスリー江方面の調査に關する正式の許可を一度獲得したロシア側は、その後の清國側の反對にも拘らず、翌一八五九年春、公然と調査隊を編成し、アドゴルスキー大佐の指揮の下に、ウスリー江流域全般の調査を実施し、その一部は綏芬河及びその支流の瑚布圖河流域迄も調査し、翌年北京條約に於て、この方面に國境を發生せしむる基礎資料を提供することとなつた。このアドゴルスキー調査隊は、前年のウエニコフ調査隊のコースに従つてシホタ・アリン山脈を越え、オリガ灣より、日本海岸を調査中のロシア極東艦隊の軍艦に乘じ（ムラヴィエフ乘艦）南下し、ビーター大帝灣を發見してこの名を與へ、更にボシエト灣等の優秀なる日本海南部の港灣を調査したのであつた。この

良港を發見した時に始めてロシアの必要の範圍が決定され、ロシアと清國との支配圏を限定する滿洲東部國境を大體現狀に劃定せんとする肚が決つたものと思はれる。即ちこの時、興凱湖綏芬河の低地帯を分割するが如き河川國境に依らず、その西側の山嶺を國境として主張し、これによつてボシエト灣一帯の要地を獲得せんとする理由としたものと思はれる。従つて、この調査隊を乗せたロシア艦隊は此處より威海衛に至り、隊長アドゴルスキー大佐のみは上陸して國境劃定に關する新しき調査資料を譯使イグナチエフに報告するために北京に向つたのであつた。

尙この年の夏季にはウスリー、スンガチャ、興凱湖方面に互り、マーク氏の植物調査があり、又植物學者マキシモウイチ氏の調査が行はれたが、翌一八六〇年には同氏は春より大調査旅行に乗り出し、シホタ・アリン山脈を横斷して六月一日にはオリガ灣に達し、此處より海路ボシエト灣に赴き、スラウヤンカ村、ムラヴィエフ・アムールスキー半島西岸、浦鹽、ルスキー島を歴訪してゐる。この時オリガ灣より南下の海路行は、前年の調査隊と同じく軍艦によつたもので、浦鹽の占領はこの七月に、四十八人の兵士によつて行はれたのであつた。

これ等の調査、占領の經路によつて、その當時のこの方面の清國支配圏が推定されるのであつて、その經路は皆ウスリー江源よりシホタ・アリン山脈を横斷して聖ウラジミル灣又はオリガ灣に出で、此處より海路南下して沿岸を調査して居り、浦鹽、ボシエト灣の占領も海路より行はれ、交通容易な綏芬河流域を避けてゐることは、當時、綏芬河流域が清國の支配圏に屬してゐたことを證據立てゝゐる

る。かくてこの方面の中間地帯はロシア支配圏の南下拡大により、清國の支配圏に實質上接觸するに至り、茲に滿洲の東部地域に兩國の國境を確定し、その支配圏の限界を明確ならしむるを必要とする客觀的條件を具備するに至つた。この點にもロシアが常にその國境交渉に先き立つて、その主張を強固ならしむべき事實設定を行つた周到なる侵略方式を見ることが出来る。

第三節 北京條約による東部國境の發生

一八五九年一月、ロシア政府は天津條約第二條の外交使節交換の條項に従つて、イグナチエフを駐支公使として任命し、キャフタより入京せしめたのであつた。その與へられた使命の中、國境に関するものは、從來未決定に残された國境問題の解決であつて、西方にてはキャフタ條約にて残された西北露清國境全域であり、東方にては愛琿條約の共管地域の境界の決定であつた。従つてこれに關する地圖その他の資料を用意し、その大體の主張國境に就ても指示を受けて來てゐたと見られ、特に急速なる解決を要する東部國境に就ては、比較的詳細な地圖が用意せられてゐた。更に、北京に於てこの年の春實施された東部國境方面の調査報告をアドゴルスキー大佐より受けたイグナチエフは、國境交渉に關する萬全の用意が出來たのであつた。

かくてこの七月、清國政府に對して、「東部國境としてウスリー江、スンガチャ河、興凱湖、琿春

河、圖們江口」の大體河川國境を主とする提案が、イグナチエフよりなされたのであつた。しかし、當時英佛使節の入京を太沽に拒否した清朝當局は、自信を恢復して居て、容易に應ずる色も見せなかつた。しかるに翌一八六〇年夏、天津條約批准を目的とする英佛聯合軍の北京攻撃によつて、清朝主腦部の逃亡となり、英佛側も交渉相手を失ひて困惑せるに乘じ、イグナチエフは北京郊外に避難中の恭親王奕訢を歸邸せしめ、この間を斡旋して、英佛清間の調停に成功したのであつた。(十月二十四日) 茲に於て次に來るものは、露清間に残されてゐた問題解決の要求であるのは當然の順序であつた。この要請を受けた恭親王は、清朝の危機を救つたイグナチエフに對して、これを拒絶するの言葉を持たなかつた。そこで尙書瑞常、侍郎成琦等を交渉委員としてロシア公使館に派遣し接觸に當らしめた。しかし實際は、ロシア公使がその作製の條約原案十五條を提示し、持參の地圖を基礎として説明を行つたに過ぎず、殆ど一字をも清國側の變更を許さなかつた。たゞ僅かに愛琿條約によつて認められた黒龍江左岸の清國特殊地域を包含する清國人居住の自由を認めさせる條項を第一條末に附加するに成功したに過ぎなかつた。従つてこの國境交渉は會談と稱すべきものではなく、ロシアが一方的にその必要とする國境線を提示して、清國の承認を強要したものであつて、そこに何等兩者の間に合意が成立してゐなかつたのは當然である。

この時ロシア側の提示した東部國境は、黒龍江より、ウスリー江、スンガチャ河、興凱湖に至り、此處より山嶺に従ひ瑚布圖河口を経て、琿春河と海との間にある山脈に従ひ、圖們江口上流二十清里

の地點より圖們江に從つてその江口に至るものであつたのである。この提案中、興凱湖以北の部分は比較的明確であつたが、この以南の部分は、露清兩國ともその地理的状況に就て不明瞭で、その條文も不明確を極め、兩者の間に合意は成立してゐなかつた。従つてその決定は第三條の、

東方興凱湖より圖們江迄（中略）界標を建立せむが爲、露國及清國政府は委員を任命すべし。委員等は東方境界を調査せむが爲、明年（西曆一八六一年）四月中にウスリー江口に會合すべし

の現地調査に譲り、問題の解決を一時延期して、當面の交渉の妥結を策した。たゞ清國側としては、第一條の末尾の、

その爲に製したる地圖を確認し且その地圖には境界線を一屬明瞭ならしめむが爲、赤線を引き且その方向をロシア字母のА—У（二十字母）にて表示す。

に相當するロシア側提出の地圖には、その不正確を理由に調印を拒み、新國境に關する清國側の眞意を表現した。かくて咸豐十年十月二日（西曆一八六〇年十一月十四日）恭親王は交渉委員等に従へ、ロシア公使館に至り、イグナチエフと會見して、その提出せる十五條の條約に調印し、茲に愛琿、天津兩條約を確認し、東部國境を發生せしむる北京條約が成立したのであつた。

第四節 興凱湖界約による現地劃定

かくて現地劃定會議の準備が行はれることとなつたが、會議豫定地ウスリー江口はロシア側にとつてはハバロフスクに接近して便利であつたが、清國側にとつては、その疆域の東北端でそこに至るは不便を極め、その上三姓の現地官憲よりも交通困難の通知を受け、その上この現地會議の主目的が興凱湖以南の陸地國境劃定にあつたので、清國側は興凱湖西岸に於て會合せんことを提議した。そして北京條約の交渉委員であつた成琦を全權に任じ、咸豐十一年二月北京を出發せしめ、途中、同じく全權を命ぜられた吉林將軍景綸と共に、齊古塔を経て、困難な旅をつゞけ、四月二十九日、興凱湖岸に到着したのであつた。これに對してロシア側は、沿海總督カサケヴィチを全權として、ハバロフスクより水路、數日遅れて興凱湖岸に到着し、二週間ばかりの交渉によつて、咸豐十一年五月二十一日（西曆一八六一年六月二十八日）、興凱湖界約として知られてゐる北京條約追加條款及びその定界圖、國境説明書の調印が行はれたのである。

この會議に於ても、北京條約の條文が疑義多きに乗じて、ロシア側は各種の牽制を行ひ、特に東部國境の北端に於ては穆稜河國境を主張し、南端に於ては環春河國境を主張し、この方面に清國側の注意を集中せしめて、以つて問題多き國境を劃定したのであつた。

かくて滿洲東部山地と、興凱湖、綏芬河下流域の平原とを分割する山岳東端の山嶺を主とする國境が決定され、ロシア側は日本海南部の良港と黒龍江方面との連絡線を確保し、綏芬河下流域の平原を分割することなく全部をロシア支配圏に收め、その後のこの方面の經濟的發展の基礎たらしめるに成

功したが、清國側は寧古塔に最も近き綏芬河下流域を失ひ、その上流域の支配圏の發展方向を閉鎖せられ、又琿春に近き國境の發生によつて、その海港であるボシエト灣を失ひ、吉林省は全く内陸の一省となつて、勃海國以來の交通系統に一大變革を受けるに至つた。そこで、かゝる線的國境の發生が地方生活の矛盾となるのを防ぐために、國境無稅貿易地帯を設置して、これより約半世紀間、政治的國境線の兩側に經濟的中間地帯が維持せられたのである。

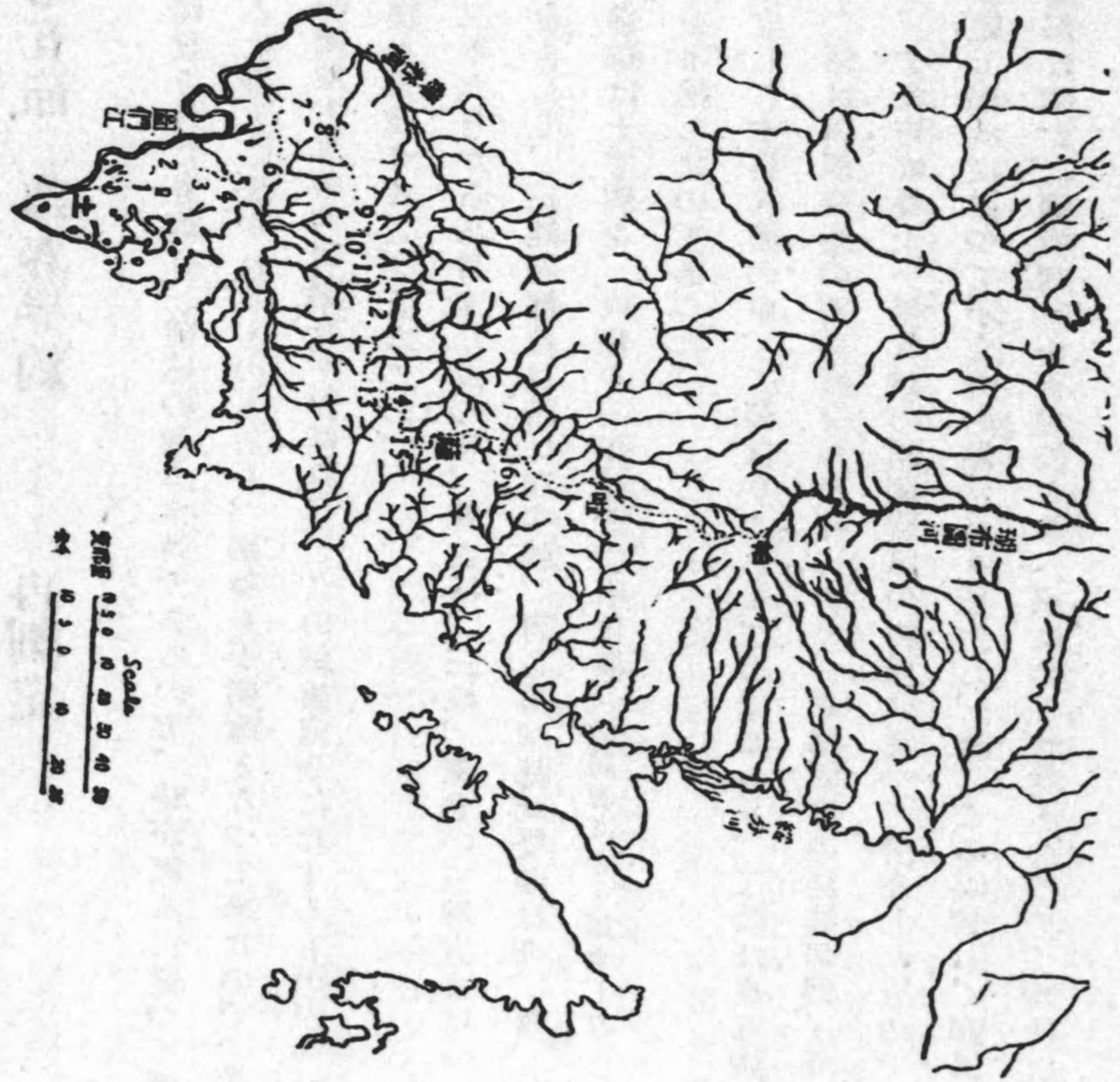
かく國境地帯の兩國の交渉が密接なればなる程、その政治的支配圏の限界が明確でなければならぬが、この興凱湖界約で確定された國境は、河川國境の如き比較的明確な自然物を殆ど利用して居らず、大部分は限界明瞭ならざる山嶺を以つて國境としてゐるので、これを明確ならしむるために人爲的方法を講じなければならなかつた。しかし幸ひなことには、當時に於ける兩支配圏の接觸は、極く部分的で、綏芬河流域、及び琿春方面の交通路に當れる地域に限られ、他の大部分は未開の山岳で實際上、兩支配圏の中間地帯となつてゐた。従つて、かゝる部分に對しては、山嶺を以つて境界とするといふ觀念的國境を以つて満足出来る状態で、假令、地圖上に赤線を以つて國境線を明示してあつても、實際上は國境明示の施設をする必要はなかつた。そこで兩國委員は、かゝる國境線の要地及び兩支配圏の接觸點にのみ國境界標を建設して、その附近の兩國官民の注意を喚起せんとした。

興凱湖會議で調印されたウスリー江合流點より圖們江口に至る交界圖には、國境線を明示しその方向を明かならしめ又地名の代用としてロシア字母E—Yに至る十六字母が記入せられてゐるが、この

中、黒龍江ウスリー江合流點のE(耶)、スンガチャ河出口のI(亦)、白稜河口のK(喀)、白稜河源のJ(拉)、横山會處のH(那)、綏芬河瑚布圖河合流點のO(倭)、瑚布圖河源のП(帕)、圖們江口上流二十清里のT(土)の地點に界標を建設することとなつた。この界標は木牌で、清國側の一面には、上部に○字牌と書し、その下に界標の意義、居住交通の自由を保證する漢文二八〇字を書せる紙片を現地に於て貼付し、油を塗つて腐朽を防いだもので、ロシア側の一面には上部に雙頭の鶯の焼印を入れ、その下に同様のロシア文の牌文を記せる紙片を貼付したものであつた。

これ等の界標の現地建設は兩國委員立會ひの上行はれたが、その指導的立場に立つたのはロシア側で、この會議成立と同時に、會議地に近きK(喀)、J(拉)字牌が建設され、それより北方のE(耶)、I(亦)はその地方官の間で建設され、南方のH(那)、O(倭)、П(帕)、T(土)の各牌は、清國側委員驍騎校永安とロシア側委員トルピンとが順次に建設し、三箇月後には全部を完了したのであつた。

この現地制定に於て注目すべき點は、河川國境の界標建設地は全部清國領内に選ばれたことであつて、本來河川國境の界標が嚴密な意味の國境線を示すものではなく、たゞその附近の河川が國境であることを説明するものには過ぎないが、茲にもロシア側の指導的立場を示してゐる。その他、那、土の界標の位置も條文と相があつたのであるが、當時としては、これを以つて兩國國境が劃定され、何等の紛争も豫期せられなかつたのである。



東部國境水系圖

第五節 琿春界約による再劃定

咸豐十一年に建設された界標は、前述の如き木牌であるので、時が経るに従つて雨雪によつて腐朽甚だしく、加ふるに野火に焚かれるものもあり、國境も不明瞭となつて來たので、光緒二年（一八七六年）九月に露清兩國地方官の共同調査が行はれた。この結果完全に存するものが一つもないことが判明したので、界標を再建することとなつた。

そこで翌光緒三年六月から八月末に及んで、寧古塔、三姓、琿春の三地方官はロシア側代表マチューニンと別個に會合して、三姓副都統長麟は耶字牌、寧古塔副都統雙福は亦、喀、拉、那、倭、帕字牌、琿春協領納穆錦は土字牌を、咸豐十一年建設の原位置（當局者はさう認定した）に、再び同様の様式を以つて木牌を再建したのであつた。

光緒三年に補立した木牌八箇の中、二箇はウスリー江沿岸にあり、二箇は東部陸地國境の北端白稜河附近にあり、二箇は露清交通の要衝綏芬河沿岸にあり、東部國境の終端圖們江沿岸にあるものは僅か一箇に過ぎず、これ皆咸豐十一年當時の兩國關係の輕重に従つて分布したもので、その後兩支配國の擴大接觸が各處で起るに従つて不充分の點が多々發生し、特にこの頃新しく關係が密接となつて來た東部國境の南部は明かに國境判定を不可能とさへ思はせる状態となつて、時代は既に十數年前の國

境劃定技術を以つてしては満足を得られない情勢となつて來てゐたのである。

この情勢をよく表現するものは國境不明確に乗じて行はれたロシアの不法行爲であつて、特に光緒五、六年頃より東部國境の各處に於て越境侵入、清國居留民の虐待等の事件が相つぎ、形勢切迫の状態であつた。ために時の清國政府は吳大澂をして吉林邊務督辦とし、この方面の國境問題の處理に當らしめた。彼は先づ光緒六年末、その管内の國境地帯を視察し、この結果南は琿春より北は密山に至る間に驛道を開き、靖邊軍を駐屯せしめ、一方國境沿線に移民を招致して開墾せしむる等、清國の支配國を政治的國境線まで擴充して、ロシア支配國の進出を防ぐ方策を實施した。この文化的國境劃定方法は最も當を得た近代的對策ではあつたが、その當時侵略急なるロシア側に對しては聊か泥繩的の感があつた。

果して光緒八年末（一八八二年）に至り、ロシア兵の圖們江沿岸黑頂子地方への侵入事件が勃發するに至つたのである。彼等ロシア軍隊はこの朝鮮經略の要衝を占領して各種の施設をほどこし撤退の様子を見せず、琿春副都統依克唐阿の嚴重なる抗議に對しても確たる回答を與へないといふ有様であつた。しかしロシア側も遂に翌光緒九年春、琿春に黒頂子返還の會議を開催することに承諾を與へたが、その當日となつてみると、清國側代表、寧古塔副都統雙壽の出席にも拘らず、ロシア代表、マチューニンは遂に姿を現さず、折角の會議もロシアの不信によりて流會となつて終つた。そこで、光緒十年（一八八四年）春、再びこの方面の國境劃定準備會議開催を提議し、今回はロシア側代表コンラ

ツド、マチュエーニン等の不参を防ぐために清國側代表雙壽は、ロシア領内の横道河監視所に至り、この夏三回の會議及び現地共同調査が行はれた。この時、長嶺子より土字木牌設立地の沙草峯までの調査は許したが、これより以南の圖們江岸の調査はロシア側これを拒絶し、茲に土字牌設立地の條文記載の位置との相違が発見され、又圖們江口の烏字牌問題等の紛糾によつて、この會議は何等の決定も見ず、來るべき正式會議に於て解決することとして、終つたのであつた。

かくて清國の支配圏が政治的國境線に擴充し來り、各處にロシアの支配圏との間に接觸が起り、咸豐十一年の部分的な而も北方を主とせる漠然たる國境を以つてしては、この地方の紛争を解決することが出來ないことをロシア側も認識するに至り、この翌光緒十一年（一八八五年）末、國境劃定本會議の代表としてバラノフを派遣することを確約するに至つた。茲に於て清國側も、從來この方面の國境問題に關係してゐた吳大澂を代表に任命し、又今回の國境會議が黒頂子問題等の圖們江邊界の解決を主としたる關係より、現地の璦春副都統依克唐阿を副代表として加へ、その會議地も、この地方に近き露領岩杵河（ノウキエフスク）を指定したのであつた。

清國側はこの會議に臨むに當り、その主題なる黒頂子に於けるロシアの不法行爲は明瞭な事實であり、又會議の範圍が圖們江邊界の局地的な劃界にあるのであるから、この交渉は簡單に解決されるものと信じてゐた。

従つて代表吳大澂は、この會議出席の途次、奉天に於て、早くも會議成功を記念するために建設す

べき銅柱の銘文を、得意の篆字を以つて書したのであつた。その文に曰く、

光緒十二年四月都察院左副都御史

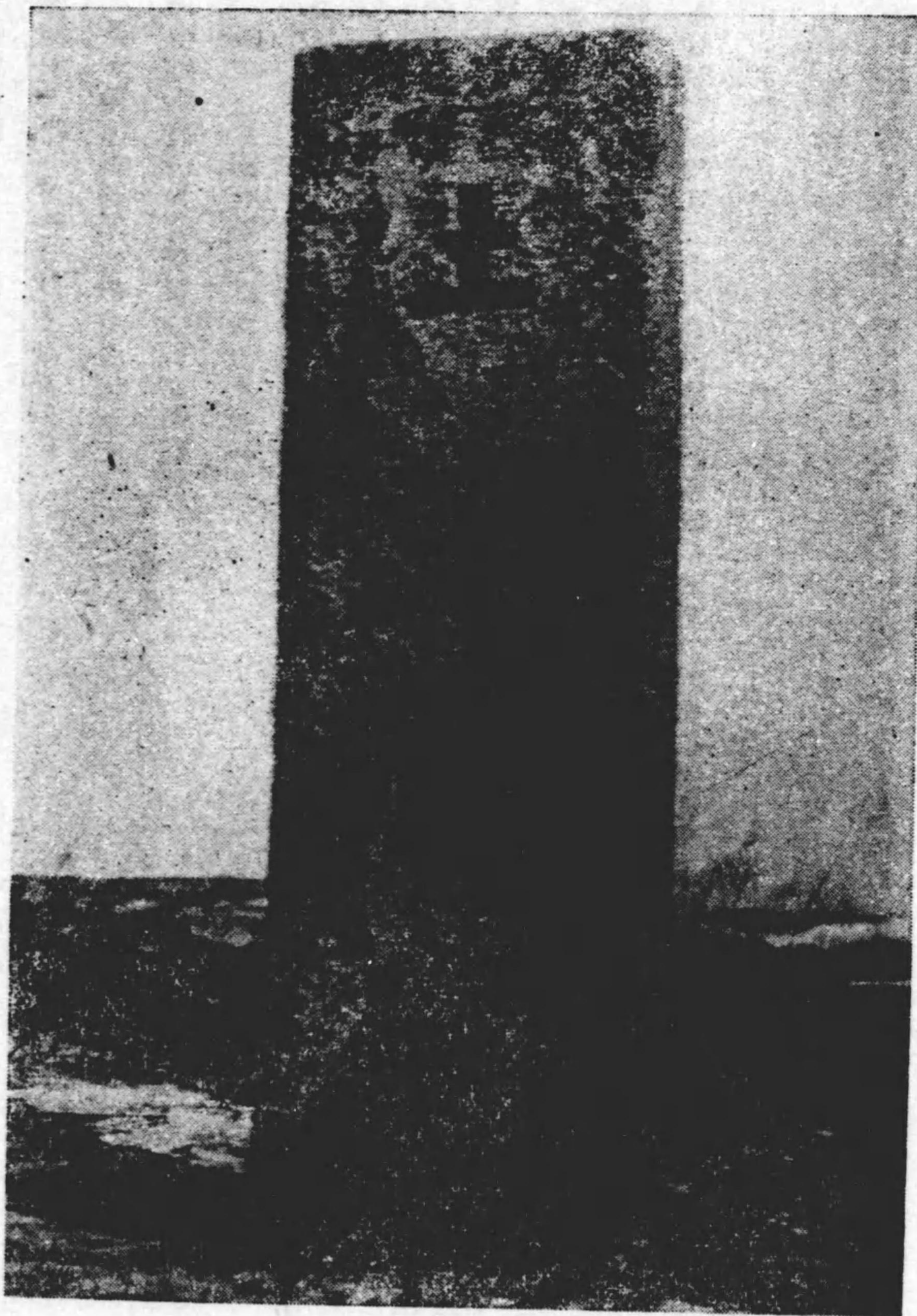
吳大澂璦春副都統依克唐阿奉

命會勘中俄邊界既竣事立此銅標銘曰

疆域有界國有維此柱可立不可移

とあり、會議開催豫定期の四月中に國境劃定交渉が完了するものと豫期して、奉天滞在の二月中に、早くもかかる銘文を書き奉天機器局にその製作を依頼したのであつた。

かくて光緒十二年四月二十二日に第一回會議がロシア領岩杵河（ノウキエフスク）に開催され、先づ咸豐十一年誤立の土字牌の位置及び圖們江口の烏字牌建設が議せられたが、後者は問題とされなかつたが、前者に就ては、既に一八八四年ロシア側測圖の四萬二千分の一の詳細な地圖より見ても、土字木牌原立地は圖們江より四十五清里の沙草峯にあり、興凱湖界約國境説明書の二十清里と相違が明かであるので、四月二十六日の第二回會議に於て、條文に適合する位置に土字石牌を移設再建することをロシア側も承諾するに至つた。更に、E（耶）、I（亦）、K（喀）、J（拉）、H（那）、O（倭）、П（帕）の七箇の木牌を全部石牌に変更すること、更に界標の不足せる部分に石牌を増設することとし、北部にては拉と那の間にM（瑪字牌）を、南部にては、帕と土の間にP（叻）、C（薩）の二石牌を補立することが議せられた。



民國年間の土字牌

五月六日の琿春に於ける第三回會議に於て、土字石牌再建、三石牌増設、七木牌の石牌換立の件を決定しロシア占領の黒頂子撤退の件も決定し、茲にこの國境劃定會議を圓滿に終了するかに見えた。しかるに倭、那の二木牌を石牌に換立すべき地に就て兩者の意見の一致を見ず、吳大澂は「これ本會議の目的ならず」と稱するに至り、茲に、清國側の東部國境全域に互る準備の不足を露呈するに至つた。

そこで先づ決定された事項から實行に移すことに決し、土字牌建設のため五月十九日、吳大澂一行は琿春を出發し途中一泊して、ロシア側代表バラノフ等と落ち合ひ、十九日、沙草峰南十餘里の山麓盡くる處にテントを張り宿泊、明くれば二十日、長さ約七尺の花崗岩に「土字牌、光緒十二年四月立」(ロシア側の面にはT一字)と刻せる石牌を、豫め用意された臺石の孔中に建立したのであつた。かくて咸豐十一年の誤立土字木牌建設地より十八清里も江岸に沿つて南下擴大して、土字石牌を設立したといふ外交的成功に満足せる吳大澂は、ボシエト經由で、二十三日、岩杵河に歸つたのであつた。そこで翌二十四日の第四回會議に於て、未解決の倭、那字石牌設立地問題及び、土字牌下流の圖們江の清國船航行問題の決定を保留し、既決事項を以つてこの會議を終了せんとし、次の條文を議決したのであつた。

- 一、土字石牌を再建す。その立牌の地は山麓盡くる處の圖們江岸の地にして、海口を距る直線距離二十七清里の地とす。

二、啦、薩、瑪字石牌を新設し、舊有の耶、亦、略、拉、那、倭、帕字の七箇の木牌を全部石牌に變更す。

三、清國領黑頂子地方に存在せるロシア官民の施設は一八八六年六月即ち光緒十二年五月にロシア領に遷し歸すべし。

四、土字牌より圖們江口に至る三十清里の間、清國船隻の出入航行の件は、バラノフ既に露都の政府に請訓中にして、その返電に従ひ、再び條文の後に補書せん。

五、倭、那字界牌の移設すべき地は兩國代表の現地調査の結果、再び協議せん。

六、長嶺子より圖們江口に至る間の地圖二部は、兩國代表の畫押調印を経て後、兩國に各一部を保存す。

長嶺子より以北白稜河口に至る間は數段に分け、各段の地圖二部宛製作し、シュリーチン主任及び露人製圖者の製作完了後、各圖及び各圖之道路記文に兩國代表は畫押調印し、相互に交換すること。

七、各牌相去ること甚だ遠く境界不明の處あり、界牌の不足の所は一、二、三、四等の數字記號を立て補ふこと。

八、石牌及び記號立つる所は各詳細圖二部を作り、將來これが完成するを俟つて、琿春副都統とコミサール會合して調印し、一部は北京に、一部は露都に保存し参考とす。

以上八則の記文は露文、滿文、漢文各二部宛を作り、その中滿文を以つて正文とし、俱に畫押調印すべし。而してこれを一八六一年所定の國境説明書の後に附し、永遠遵守して替ふる勿れ。

右の八條が世に琿春界約として知られてゐる處のものであつて、光緒十二年六月三日(西曆一八八六年七月四日、露曆一八八六年六月二十二日)岩杵河(ノウッキエフスク)に於て畫押調印が行はれたのである。

従つてこの界約の調印は土字牌建設實施以後のことに屬し、條約内容の實行後の確認といふ結果となり、この點この界約の一つの特色と見ることが出来る。

更に第二の特色は、第二條後半、第六條、第七條、第八條の如く、界標設立に關する一般原則及び技術的方法を協定する部分を多量に含んでゐることである。

次に第四條、第五條の如く全然未解決の事項を條文の中に列せしめてゐることであつて、即ち第四條は本國からの命令に依り、第五條は兩國代表の現地調査の結果決定することとなつてゐる。

第六條は第一段(長嶺子—圖們江口)の地圖の調印につき別記し、第一段を特別扱ひとし、本界約の主要目的が何處にあつたかを示してゐる。第六條にはその次に長嶺子以北白稜河に至る間の各部地圖製作調印の原則を述べてゐるが、この界約調印の六月上旬頃は未だこの區間を數段に分けるといふ原則だけで、その後の如く五區に分割する方針は未だ決定してゐなかつたものと思はれる。尙第八條は遂に實行されなかつた如くである。要するに本條約は原則的條約で、細目決定はその後の折衝に任じてあり、形式上の會議終了を急ぎ過ぎた感が深い。果せる哉實際上の解決はその後數箇月延引し、吳

代表の豫想とは非常に差異を生じたのである。しかし、かゝる大綱的條約の調印が早く行はれたればこそ、兩國の方針、意圖が明かとなり、大局に大した影響も無い地域的な論争の發生し易い國境會議を圓滿に完了せしめたとも云ふことが出来よう。

六月三日、琿春界約の調印を終つたので残された倭、那字牌の建設地問題を解決するために、第五條の現地調査の條項に従つて、六月上旬に至り現地調査が實施されることとなつた。

このため清國側代表吳大澂一行は、ボシエトよりロシアの軍艦に乘じ浦鹽に至り、大歓迎を受け、それより小艇に移乘して綏芬河を溯江、更に馬車により綏芬河と瑚布圖河との合流點にある三岔口に至り、この地を根據として一箇月に及ぶ、附近一帶の現地調査が行はれた。この時、兩國委員の共同調査の形式を採つたが、實際はロシア側委員が指導的立場に立ち、一方清國側委員の調査放棄などのため、ロシア側委員の一方的調査に終つた處もあり、完全なる共同調査とは云ひ難い點もあつた。

兎に角、大體の調査を終了した調査隊一行は七月初旬その任地に歸還し、吳大澂等も再び浦鹽經由、清國軍艦に乗つて、琿春に歸つたのであつた。かくて琿春界約第五條の未解決の條項も結末をつけ、この現地調査の經過、那字牌再建の方法、那字牌より瑚布圖河口に至る直線國境、倭字牌再建の事等を記せる查明更正倭字那字兩界牌記文を八月初旬完成し、琿春界約に附加したのであつた。

かくて残る處は、琿春界約第四條の圖們江口三十里の清國船出入許可の問題のみとなつた。そこで現地調査より歸つてからは、主としてこの問題の折衝が行はれたが、バラノフはその解決を延期せん

との意向が強く、容易に解決の曙光が見られなかつた。しかるに九月十八日に至り、ウスリー界コミサルより琿春副都統宛の、清國船出入許可の公文が通達されたのであつた。これによつて、數箇月に及ぶ吳大澂の努力も報いられたわけで、彼はこの記念すべき九月十八日の日記に、

余與巴使費盡唇舌、竭數月之力、始獲有此一電

と記してあるのを見てもその喜びが察せられる。

かくて琿春界約の第四條は實質的に解決出來たのであるが、ロシア政府としてはこの許可の一文を追加條項として琿春界約に附記するを欲せず、ために兩國地方官の間の交渉といふ形式を採り、地方問題として解決したのであつた。

そして冬季の結氷期を俟つて、土字牌以外の文字石牌が建設され、又、その間に二十六個の數字記號標識が添設されたのであつた。文字石牌は、土字牌の建設の時に述べた如く、「〇」字牌、光緒十二年四月立」(ロシア側には〇に相當するロシア字母一字)と刻したものであつて、數字記號標識は、封堆上に高さ二尺の石牌を立て、正面に隸書で「欽差大臣吳監立」と刻し、その左側には「第〇」と數字を、その右側にはこの數字をアラビア數字で刻したものであつた。

これ等の新設界標の過半数は琿春邊界に集中し、その國境劃定の主目標が何處にあつたかを説明してゐるが、これより北部の瑚布圖河沿岸は河川國境のため、その必要を認めなかつたものの如く、この間には全然なく、更にこれより北は、北々西十二度の方向をとつて直線國境が七十軒の間、滿洲東

部山岳地帯の東麓を北上し、それより東北行し、山嶺に従つて興凱湖に達してゐる。興凱湖附近は丘陵地帯となつてゐるので比較的界標が接近して建設されてゐる。

更にその建設位置を詳細に見ると、第一に注意されることは、峠等の兩國支配圏の接觸を生ずる交通上の要衝であつて、第二には、國境線の方向變換點である。後者は比較的不變の性質を持つてゐるが、前者は支配圏の擴大によつて、接觸點の増加が豫期せられ、従つて可變増加の傾向があることは注意されねばならない。

兎に角、光緒十二年の當時に於ては、十一の文字界標、二十六の數字記號標識を以つて、東部國境は劃定されたものと信じたのであつた。しかしこれ等の石牌の形式は前述の如く、單なる標識に過ぎず、何等國界の意義を揭示説明する碑文なく、その設立の事情に精通しないものには、この石牌が何を意味するか不明であつたのである。

例へば、この當時この地方を旅行せる永山武四郎少將一行の日記（一八八七年十月十一日）に、興凱湖東岸の亦字牌につき次の如き記述がある。

此間我一行清領の陸に上る。清人山東省より移住したる農家あり。就て一見し家釀の火酒を購ふて一酌を試み屋後の街道に出づ。花崗石の碑あり。亦字碑と題し光緒十二年四月立と勒せり。何の爲めに設けたるかを詳にせず。後二時開行、湖面平穩、八時半カーメンルイバロフ着。

とあり、當時の興凱湖東岸、スンガチャ河口、亦字牌の設立位置の状態を明かにしてゐるが、この石

碑に何等國界を意味する説明が記してないので、他國よりの旅行者などは特に、その意義の了解に苦しんだものと思はれる。これは旅行者のみでなく、その地方人の間にも、その真相を知るもの少く、遂にはこの文字牌の意義が不明な點より、神祕的な傳説さへも附加されるに至つてゐる。例へば土字牌の誤傳と考へられるが、長嶺子に十字牌なるもの存在すると云ひ、キリスト教との關係を思はせるものあり、又東寧附近には王子牌（倭字牌の音譯）なるものありと稱し、王子なる者の傳説が附加されてゐる。

従つて琿春界約當時より、この點の懸念はあつたものの如く、これを總括的に解決し、兼ねて國境劃定會議成立を記念するために、その當時最も兩國間の交通上の要衝に當れる琿春岩杵河間の長嶺子峠上の國境に、高さ十二尺許りのオベリスク形の銅柱を建て、その表面には吳大澂が奉天で執筆せる銘文を刻み、國境劃定の由來を説明したのであつた。しかしこれは清國側が一方的に建設したもので、何等條約上の規定に従つたものではなく、この點、ネルチンスク條約後、兩國交通上の要衝ケルベチ河岸に清國側が建てた界標と類似した點を見ることが出来る。

この銅柱は西曆一八八六年十一月六日（光緒十二年十月十一日）に此處を通過したヤングハズバンド大尉とチェームスの一行の注意するところとなり、前者の記録「大陸の中心」には數箇月前建設されたと記してあり、後者の「長白山」には光緒十二年四月立とあり、銅柱の銘文に従つてゐる。これ等の事實から考へると、この銅柱は光緒十二年の七、八月頃建設されたものと推定される。その翌光緒

十三年九月末この地を通過した永山少將一行も、その「周遊日記」にこの銅柱について詳細に記述してゐるが、その後二十年を経過した光緒三十三年（一九〇七年）に至り、琿春副都統より東三省交涉總局に銅柱紛失の報告が達してゐる。これ即ち、一九〇〇年のロシアの滿洲占領の混亂期に乘じ、ロシア側が持ち去つたもので、その後、日露戦争を経て、清國が滿洲の支配を回復した光緒末年に至り銅柱の紛失が発見されたと見るべく、この銅柱問題はよく滿洲東部國境全般の兩國支配圏の進退を物語つてゐる。この銅柱は現在、ハバロフスク博物館に陳列されてあるといふ。

第六節 近代的國境關係と紛争の發生

琿春界約によつて兩國ともこの方面の政治的境界が劃定され、その支配圏發展の限界が確定されたので、その後は兩國ともこの充實に向つて努力が拂はれ、植民及び交通路政策が實施された。

即ちロシア側は邊疆の沿海を歐羅の本土と連結して、結合を強化するために歐亞連絡の鐵道敷設を計畫し、琿春界約締結の翌一八八七年、早くもウスリー線の調査を開始するに至つた。これに對して清國側も南滿洲を横斷して琿春に達する鐵道を計畫し、一八九〇年には英人技師キンダー一行がその調査に出發したのであつて、この報知はロシア側の鐵道計畫の實施を促進し、一八九一年早くもウラヂウオストクより工事に着手するに至つた。

しかるに日清戦争によつて清國の實力暴落し、今迄越ゆべからざる對等實力の國家領域と考へられてゐた滿洲が、單なる無力の障礙物と化して終つたので、時適々、アムール迂回線の工事困難に直面せるロシア當局は、滿洲を横斷して沿海州と直接連絡する鐵道敷設を計畫し、一八九五年、東部國境の三岔口よりロシア調査隊を入滿せしめたのであつた。この時以後、東部國境の實質的意義は次第に失はれ、ロシア側の自由な調査活動の天地となり、この結果、舊來の兩國交通路に當れる綏芬河系路の地形的困難を回避して、その北方の丘陵地帯を東進する現在のコースが決定せられた。かくて一八九八年より工事が開始せられ、一八九九年には綏芬河、グロデコーウォ間に輕便鐵道が開通し、翌年には本線の開通を見るに至つた。

即ちこの時、東部國境の直線國境部分を通過する交通路が開かれ、琿春界約當時、直線國境を以つて解決出来る程、兩國交渉の簡單な地域が、この鐵道の開通によつて、東部國境に於て最も兩支配圏の接觸の密なる地域と化する素因となつたのである。しかし、これが現實となつて來たのはこれより數年後のことであつて、この鐵道完成より日露戦争後に至る數年間はロシアの滿洲占領により、この國境の兩側はロシアの支配圏に屬し、實際上國境の存在は無視されたと同様の状態であつた。

従つて滿洲の東部國境が再びその意義を恢復したのは、日露戦争後、ロシア支配圏の退却によつて、支那の支配圏が政治的境界附近まで再擴大し、こゝに國境地帯を挟んで兩支配圏の接觸が再開された時からであつた。即ち光緒末年より宣統を経て民國年間に至り、各處に接觸紛争が發生し、特に圖們

江沿岸の地域、瑚布圖河の流域地域、及び陸地國境北端の丘陵地域等の河谷、丘陵等による國境部分に甚だしかつた。これは、これ等の地域が開墾に便利なために、農民の進出が盛んに行はれたためであつて、租税關係よりの意識的な越墾、界標移動、境界の誤認による越墾、伐木、放牧のための越境、邊境の警察力無力による掠奪暴行等の事件が相繼ぎ、琿春界約當時の國境劃定技術を以つてしては、國境の明確を缺く状態となつて來た。

その後、世界大戰とこれにつゞくロシア革命は、支那側の支配力の邊境に於ける強化となつたが、今回は反對にロシア側の支配力喪失となつて、本質的な國境の意義は失はれ、この混亂期の無秩序は、國境に於ける諸種の紛争を激成した。しかし日本軍の沿海州出兵は、この地方の秩序を維持し、綏芬河鐵道國境に於ては、東方に日本軍、西方に支那軍が相對峙する状態も現出した。

その後、ソ聯政權が再建されてより、この方面の國境も再び正常關係をとりもどし、強化化せる東方政權との間に、その支配圏の接觸となり、茲に懸案の國境紛争を解決すべき國境再劃定の原則的一致を規定する一九二四年の奉露協定となつた。しかるに利權回復熱に乗じて強行政策をとれる東北政權は、一九二九年の露支紛争の發生によつて失敗し、東部國境方面よりもソ聯軍の侵入を受け、僅かにハバロフスク協定によつて、從來の國境を恢復維持するを得た。そして今後の交渉はモスクワに於ける兩國代表間に行はれることとなつてゐた。

しかるに新興滿洲國誕生によつて、日滿共同防衛の立場よりその強力な支配力はこの方面の國境に

まで滲透するに至り、茲に全面的に兩支配圏は國境に於て對立し、交通、通商は杜絶し、封鎖國境と化するに至つた。かゝる尖鋭化した兩國關係に於ては、五十年前の條約によつて定められた國境に、紛争の發生するのは當然であつて、これ等の紛争は遂には部分的な戰國にまで發展するに至つた。しかるに最近の世界情勢は兩國間に和意を發生せしめるに至つたので、この兩國の平和的意圖が、この方面の國境を開放して、交通、通商の許容といふ具體的事實に證明せられた時に、始めて國境劃定が問題とされるに至るであらう。

第五章 結論

ネルチンスク條約に現れた國境交渉は最も古い形態のものであつて、この時國境の劃定を必要とした地域は、極く限られた黒龍江上流域の兩支配圈交通路に沿つた接觸部分に過ぎず、その東方の大部分は兩支配圈の中間地帯を紙上に於て分割し、漠然たる國境地帯を以つて支配圈擴大の限界を假定したに過ぎなかつた。

キャフタ條約の國境劃定は前者と同様の意味で、その中心部分はキャフタ河附近のセレンガ路沿線の地域で、この部分で兩支配圈の接觸紛争があり、これを分割する國境が必要であつたのである。しかし、これより東西の蒙古地帯はネルチンスク條約の東方國境地帯の如く、直接兩支配圈の接觸なく、嚴密なる國境を必要としなかつたのであるが、ロシア側の國境劃定技術の發達のため、比較的詳細な國境が劃定されたのである。

愛理條約、北京條約によつて決定された國境は、ネルチンスク條約で殘された東方の國境地帯を劃定づけたものであつて、その中間地帯にロシア側が一方的にその支配圈を擴大して、清國支配圈に接

觸し來り、その間に、前時代に見られたが如き假想上の支配圈の殘存を許さず、その實態に従つてロシア側が一方的に劃定した國境である。しかしその國境として黒龍江、ウスリー江の如き大河川を國境線として採用した結果、河川兩岸に發達する地方經濟圈を分割することとなるので、この分離力を緩和する目的で、これより約半世紀間、行政經濟上の中間地帯をその國境兩側に殘存せざるを得なかつた。

璦春界約は、北京條約によつて劃定された東部國境が二十數年後の現地の情勢を處理するに不十分であることが發見されたので、これ等の不合理を調整し、國境を明確ならしめた追加條約である。この際ロシア側が條文とその現地劃定との間に不一致があることを承認した點は、注目に値するものがある。

チチハル協定は、滿洲西北部國境がネルチンスク、キャフタ兩條約後二百年を経て、その國境地帯に情勢の變化を發生し、このため生ずる紛争を解決するために行はれた國境交渉で、最も近代的な線的國境が劃定せられ、諸種の事情でその實行が見られなかつたが、その國境劃定に當り既往の條約に拘泥せず、その當時の兩國勢力によつて政治的に決定したことは一つの示唆を與ふるものである。

以上の事實から國境發展を原則的に見ると、國境が發生するためには、ある一つの支配圈が擴大して、隣接支配圈に接近し、兩者の間に中間地帯を生じ、これを貫く交通が行はれて對等なる他者が意識された時に始る。この時は先づ自主的に支配圈の限界を各自に限定し、これを標識又は防壁を以つ

て限界づける。

しかるに兩支配圏はこの限界を越え、交通路に沿つて中間地帯にその政治的支配力を伸張し來り、この交通線上に於て接觸が開始せらるゝに至る。このため紛争を發生し、これが時には局部的な戦闘にまで發展することもあるが、かゝる部分的な争闘の不利を自覺せる兩支配圏の中央部は和意を表明し、こゝに國境の劃定が議せられることとなる。かくてこれ等の兩支配圏の接觸點をつなげる線を以つて兩支配圏の中間地帯を分割し、かゝる接觸點に國境標識を建設して、そこを通過する兩國民に國境存在を注意せしめる方策を行ふ。次いでこの分割によつて生じた政治的國境線まで、植民、交通等の政策により、その支配圏の完全なる擴充をはかるに至る。

こゝで辯證法的な展開が行はれ、再び兩支配圏の接觸點を増加し、その點まで政治的支配を伸長するに至ると紛争を發生し、争闘を経て兩國友好的基礎の下に國境を再劃定し、既往の條約にて漠然と殘された界標間の境界地帯に界標を増設して、これ等の地帯を連続して國境線を形成する連續界標の性質を持つに至る。この段階に於ては、界標にはも早や國境を説明する碑文を必要とせず、單なる標識を以つて足りる。しかしこれは石塀をなすものではなく、斷續的に國境を印づけるもので、これを石塀と考へる處に「全長六〇〇軒の東部國境に僅か三十五箇の界標があるに過ぎない」と云ふ批評も生じて來るのである。

しかしこれも時代の経過と共に矛盾を生じ來り、これを以つてしても境界の明確を期することが出

來ない情勢に立ち至る。この段階に於ては主要接觸部分に線的な鐵條網國境の如きものが發生し完全なる垣壁となり、これが國境全般に及ぶに至る。これ寸土も未定の地を殘さざる近代國家間の國境形態であつて、その強力なる兩支配圏は國境を境として全面的に接觸するに至る。従つてもし兩支配圏の間に友好關係がなければ、これを以つてしても恐らく紛争は免れないであらう。

そこで次にとるべき手段は紛争の原因となる兩支配圏の接觸面の分離である。これは支配力弱き間は自國民に對しても、これを強行するのは多くの困難を伴ふが、最近の國土計畫を可能とするが如き全體主義國家の段階に於ては、その支配力は最強度に達してゐるためこの實行を容易にしてゐるので、意識的に國境兩側に無住の中間地帯を設置してその紛争の原因を除去することが出来る。そして、更に兩支配圏の間に友好的基礎が確立された時に、この地帯を非武装地帯として一切の紛争の原因を完全に排除し、その中間に線的形態を持つ政治的國境が置かれるといふ理想的段階に達する。

以上は國境形態の發展過程を隣接二支配圏の擴大の面から見たものであるが、これを安定した基礎に置くためには國境立地に就て注意を拂ふ必要がある。即ち國境設定に當つては、努めて單一經濟圏を發生するが如き地域の分割を避け、これ等地域の經濟圏の自然發生的限界部分に境界を配置することが合理的である。更に廣く兩支配圏の國土計畫上より適當な交通線港灣等を保證し、不合理な分割によつて、かゝる要求を相手方に殘す如きは最も拙策と云はなければならぬ。この點で蘇聯のウラヂウオ交通線の確保は東部シベリアの發展上必須のものであらうし、又、ボシエト灣の保有は東部滿

洲より港灣を奪つたもので、朝鮮攻略の目標を失つた現在に於ては、その存在の意義を失つたものと云はざるを得ない。

更に國境の根本的安定のためには、世界的立場に立つて、近代列強の各支配圏の合理的配置を行ひ、國境變更を意圖せしむるが如き不合理性を一掃せねばならない。この點から見ると蘇聯圏は大體同一の高緯度地方を東西方向に伸びてゐるため、その發展方向は東方アラスカにあり、その寒帯生活の適應性はこの地方の開発を容易ならしめるであらう。しかし、蘇聯圏のかゝる性格の故に、熱帯資源供給地缺如といふ、單獨ブロックとして重大な弱點を持つて居り、これを自己圏内に確保するには、餘りにその位置が北方に位してゐる。そこで如何にしても、熱帯を包含する隣接の支配圏と結合してこの弱點を充足せねばならない。この點で東亞共榮圏の熱帯への擴大は、蘇聯に希望を與へるもので、兩者の通商友好關係の成立は蘇聯にその弱點の補充を約束するものである。

故にもし、蘇聯圏と東亞共榮圏が相互にその地理的立場を自覺して有無相通じ、更に高度の技術を持つ歐洲圏と共に、三者相結合してユーラシアブロックを形成する時、強力な英米ブロックと對立するに充分なる力を獲得するに至るであらう。かくて東亞共榮圏と蘇聯圏との境界なる滿蘇國境は、そこに思想上及び社會機構上の根本的な差異は残るとしても、或る程度の對立的な他者意識を拂拭して、平和な政治經濟的境界と化し、茲に安定を見ることが出来るであらう。

後記

本書は次の拙文を基礎にして執筆したものである。

滿洲東部國境の地域的考察

(滿洲教育研究所研究要報、第十一號) 昭和十二年四月

黒河盆地に於ける聚落の發達

(滿洲史學、第一卷第三號) 昭和十三年一月

滿洲東部國境の諸問題

(滿洲調査月報、第十九卷第三號) 昭和十四年三月

滿洲西北境に於ける露支交渉

(滿洲調査月報、第二十一卷第一號) 昭和十六年一月

ネルチンスク條約の國境に就て

(史林、第二十六卷第一號) 昭和十六年二月

右研究に使用した資料の主なるものは次の如くである。

清季外交史料、籌辦夷務始末、清朝實錄、朔方備乘、中俄界約料注、盛京通志、吉林通志、黒龍江志稿、齊安縣志、增訂吉林地理紀要、愛理縣志、黒龍江外記、柳邊紀略、出塞紀略、海隅從事錄、皇華紀程、滿洲各地の檔案類

Du Halde: Description Géographique, Chronologique, Politique, et Physique de L'empire de la

Chine et de la Tartarie chinoise.

D'Anville: Nouvel Atlas de la Chine de la Tartarie chinoise et du Thibet.

M. G. Cahen : Histoire des Relations de la Russie avec la Chine sous Pierre le Grand (1687—1730).

J. F. Baddeley : Russia, Mongolia, China.

E. G. Ravenstein : The Russians on the Amur.

Atkinson : Travels in the Regions of the Upper and Lower Amoor.

F. F. Younghusband : The Heart of a Continent.

H. F. M. James : The Long White Mountain.

Vladimir : Russia on the Pacific and the Siberian Railway.

H. B. Morse : The International Relations of the Chinese Empire.

Lobanov : Russia and Asia.

ロマンフ 滿洲に於けるロシア、一八九二—一九〇六年 (邦譯、ロシア帝國滿洲侵略史)

サヴィン 帝政ロシア及びソヴェト聯邦と支那との相互關係、一六一九—一九二九年 (邦譯、近世

露滿蒙關係史)

バルトリド 歐洲及びロシアに於ける東洋研究史 (邦譯、東亞研究史)

榎本武揚 シベリア日記

永山武四郎 周遊日記

宮崎正義 近代露支關係の研究 (滿鐵調査報告第十七卷)

下田禮佐 露清關係の研究 (小川博士還曆記念史學地理學論叢)

矢野仁一 近世支那外交史

同 日清戰爭後支那外交史

東亞經濟調査局 露國の極東侵略に關する調査書

その他、滿鐵翻譯のシベリア關係資料、日本外務省編の條約集、マックマレーの支那關係條約集、ロシア外務省編の露支條約集、中外條約彙編、中俄國際約注等がある。

著者
檢印



社論公央中・有所權版

昭和十六年八月一日印刷
昭和十六年八月五日發行

東亞新書

滿洲國境問題

定價一圓

編者 滿鐵弘報課

著者 增田忠雄

發行者 東京市麹町區丸の内二ノ二
木田開

印刷者 東京市小石川區久堅町一〇八
大橋松雄

配給元 東京市神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

發行所

東京市麹町區丸の内二ノ二
丸の内ビルディング五八八
中央論社
振替口座東京三三八
電話丸の内五三五—五三八

東亞新書發刊に際して

世界は今人類史上未曾有の動亂の中を經過しつつある。この世界史的展開の激しい環境のたゞ中にある日本の讀書界は、確乎たる道標を把握せんとして、眞摯なる探求と新しき世紀への熾烈なる知識の欲求とに燃え上つてゐるとは曰へ、世界的規模の擾亂は、動もすれば一般讀書階級をしてそれら眼前のめまぐるしき現象の繼起に心奪はれ、日本國民としての根本的關心が何れにおかれねばならぬかをも忘れしめるかの如くである。

かくて東亞新秩序の理念とその現實的基礎の探究は、たちまち片すみに押しやられる事情を呈するのである。支那事變發生以來の支那問題に對する探究の熱意は、今日恰も颶風一過の觀を呈したかにすら見られる。

しかも東亞問題探究の必要なること今日においてますます切實緊急なるものあるは讀者の間においてまことに論議の餘地なきところである。

我々は世界的禍亂の終局する後に必ずや世界の新秩序成るべきことを確信する。然して我々日本人は東亞新秩序創建の實踐を通じて創意と自主性を提げてこの歴史的使命遂行に参畫せんことを期してゐるのである。

我々は改めて、東亞の現實情勢の正確なる把握から第一步を踏み出さねばならない。滿洲・支那問題の再検討こそ當面最大の必要事といはざるを得ないのである。

東亞新書發刊の意義と使命とな我々はそこに感じてゐるのである。幸にして大方讀書大衆の支持と協力を得て本書の前進をはかりたいと衷心より希ふのである。最後に本計畫は滿鐵弘報課の助力によつて成つたものであることを記してこゝに感謝の意を表する次第である。

東亞新書第一期刊行書目

北東アジアの諸民族(新刊)山本 幡男	石炭液化諸工業の問題	阿部良之助
滿洲國境問題(新刊)増田 忠雄	東亞の炭業方策	久保 孚
東亞とユダヤ問題(新刊)小山 猛男	支那の農業	石川 正義
滿洲協和會の發達(新刊)小山 貞知	滿洲の農業經營	平野 蕃
東亞民族結合と外國勢力(既刊)尾崎 秀實	蒙古人民共和國	石田喜與司
近代支那思想(既刊)藤原 定	滿洲の美術	黒田 源次
ソヴェート計畫經濟論(既刊)奥澤篤次郎	東亞協同體の基礎分析	平 貞藏
支那工業の發達(既刊)尾崎庄太郎	東洋社會の特質	橋 樸
開拓民間問題(既刊)入江 久夫	新中央政府と修正三民主義	中西 功

東洋社會に關する外國人の論争	白井 行幸	滿洲の氣候と保健	遠藤 繁清
滿洲の風俗	永尾 龍造	西北支那に於ける灌漑	安齋 庫治
大陸に於けるインフレーション	山口辰六郎	支那に於ける民族資本	土井 章
シベリヤ開拓史	佐藤 健雄	滿洲の建築	岡 大路
滿洲農業の特質	鈴木小兵衛	聯銀券と法幣の研究	山口 正吾
滿洲に於ける商業機構の發達	齋藤 征生	北支の交通	加藤 新吉
支那事情と國際情勢	具島兼三郎	中支の水田耕作	天野元之助
支那交通概況	手島 正毅	滿洲農村共同體の研究	石井 俊之
滿洲風土	田口 稔	北支蒙の産業	村田 耕作

CL
NO. 11716

35.3. 8

滿鐵弘報課編
中央公論社版